

歯学部ニュース

平成28年度第1号（通算129号）

特集 歯学生の今
海外SSSV特集
学会受賞報告

目 次

特集1 歯学生の今	1
歯学科 2年 今井 千尋／歯学科 3年 小野すみれ／歯学科 4年 斎藤ちはる	
歯学科 5年 小林 亮太／歯学科 6年 小山 祐平／歯学科 6年 金子絵里奈	
口腔生命福祉学科 2年 保坂菜里美／口腔生命福祉学科 3年 北村友里恵	
口腔生命福祉学科 4年 堀井 美希	
特集2 JASSO海外留学支援プログラム特集	19
田村 光・金子絵里奈・松田きよら	
入学者のことは	25
歯学科 植田 優太	
口腔生命福祉学科 廣川 光	
口腔生命福祉学科 柳沢 南	
矯正歯科学分野 大澤 知朗	
新潟大学小児歯科学分野 鈴木 絢子	
口腔生命福祉学専攻博士前期課程 中川 雪人	
口腔生命福祉学博士後期課程 中田 悠	
入学を祝して	29
歯学部長 前田 健康・副病院長 小林 正治	
総務委員会だより	32
前田 健康	
口腔生化学分野担当教授の選考について ほか	
新入生宿研修を終えて	37
塩見 晶	
連載：「大学院に行こう」	40
村上 智哉・酒井 翔悟・大倉麻里子	
学会受賞報告	45
久保田健彦・前川 知樹・佐藤美寿々	
高橋 直紀・黒澤 美絵・小林 太一	
留学報告	51
前川 知樹・江口 香里	
留學生紹介	56
歯周診断・再建学分野 車 玉蘭	
教授に就任して	58
新潟大学 医歯学総合研究科 口腔生命科学専攻 口腔健康科学講座 う蝕学分野 教授 野杵由一郎	
診療室・講座紹介	60
新潟大学医歯学総合病院 インプラント治療部 部長 魚島 勝美	
高度口腔機能教育研究センター センター長 教授 前田 健康	
診療技術支援部便り	67
稲野辺紫巴・本間しのぶ	
技工部便り	69
荒井 秀明	
素顔拝見	70
竹石 龍右・白石 成・藤原 茂弘	
FD委員会活動報告	73
秋葉 陽介	
研究室体験	75
磯野 俊仁・清川 裕貴	
同窓会だより	77
有松美紀子・野内 昭宏・石井 賢紀・内藤義隆・同窓会 準会員・研修歯科医支援部	
総合診療部を経験して	82
鈴木 裕希・深町 直哉	
歯学部運動会を終えて	84
歯学科5年 山本 悠	
歯学部各種委員会	85
教職員異動	89
入学おめでとう	97
平成28年度歯学部歯学科入学者名簿	
平成28年度歯学部口腔生命福祉学科入学者名簿	
平成28年度歯学部歯学科 3年次編入生	
平成28年度歯学部口腔生命福祉学科 3年次編入生	
平成28年度口腔生命福祉学専攻（前期博士課程）入学者名簿	
平成28年度口腔生命福祉学専攻（後期博士課程）入学者名簿	
平成28年度医歯学総合研究科（口腔生命科学専攻博士課程）入学者名簿 4月入学	
平成28年度医歯学総合研究科（口腔生命科学専攻博士課程）入学者名簿 10月入学	
歯学部を支える方々	99
歯学部事務室長 吉田恵太郎・事務室学務係 櫻井 拓仁	
編集後記	101

2年生の今

歯学科2年 今井千尋

入学してから1年が過ぎ、2年生として新たな生活が始まりました。2年生になって約3か月経った今、旭町キャンパスでやっと歯学生として一步を踏み出せたような、まだまだ新鮮な気持ちです。白衣で実習に向かわれる先輩方の姿はとても凛々しく、私もいつかそうになりたいという期待で胸が膨らみます。その日を迎えるために、日頃の学習に全力で取り組んでいきたいです。

2年生になり専門性の高い科目が増え、今まで以上に一つ一つの講義への集中が必要になりました。歯科理工学や人体解剖学、歯科薬理学、生化学など、習得しなければならぬ知識の量に日々圧倒されています。また講義中に、「将来受ける国家試験によく出題されるよ。」と先生方からお聞きするたび、2年生の座学の重要性を再認識しています。将来患者さんの大切な歯を治療させて

いただくからには、知識不足での失敗は許されません。歯科材料の正しい取り扱い方や歯科治療に用いられる薬物、口腔を中心とした解剖学などの知識を正確に習得していく必要があります。3年生では人体解剖学実習があるので、2Dで学んでいる現在の解剖学の知識を3Dで見た時にも活かせるように、組織や器官などの関係性を整理しておきたいです。今学んでいる歯科医学の基礎科目を、知識としてしっかりと定着させ、将来の臨床科目につなげていきたいと思います。そのためには日々の学習に妥協はせず、欲張りになって取り組んでいきたいです。

講義は座学が中心ですが、1年次に引き続き早期臨床実習Ⅱがあります。さまざまな診療科で実習や治療見学などを行うなか、専門科目を習い始めたので、材料や器具の名前に注意深くなりまし



た。座学で習った材料が、実際に治療で使われているのを見ることで、日頃の学習へのモチベーションがあがり、知識の定着にもつながります。サプライ実習では、院内感染対策の視点からも医療従事者の責務について考えさせられました。歯科薬理学の講義でも学んだように、スポルディング分類によって滅菌か消毒かを正しく判断しなければいけないと実感しました。治療中の手の消毒やグローブの付け替えのタイミングなど、1年生の時には気づいて観察していなかった部分にも注目して実習に取り組みたいです。

2年生になり勉強面以外にも新鮮に感じる事が2つあります。1つ目は、部活動に新入生が入り、後輩ができたことです。私が1年前に入部した時、部活の先輩方のやさしさで何度も助けていただいたことを思い出します。私も先輩方のように後輩のことを気遣える存在になっていけるよう心掛けたいです。デンタルや東北リーグなど大き

な試合もあるので、日々の練習で得たことをバネに、より強くなっていきたいと思います。2つ目は、2年生専用の教室があることです。五十嵐キャンパスでは、講義がバラバラで全員そろうことが少なかったクラスのメンバーが、旭町キャンパスの小さな教室の中に、ぎゅうぎゅう詰めになって授業を受けていることはとても新鮮に感じます。人数の多さに教室の中が蒸すことがあるので、換気を忘れないようにし、こまめに水分補給をとりたいです。クラスのメンバーの講義に対する意識は高く、休み時間に勉強を教えあっている姿を見ると、自分も頑張らなくてはと意欲がわきます。楽しむときは全力で楽しみ、集中するときは集中する、時間を上手に使えるメリハリのあるメンバーです。このクラスのメンバーと、これからも充実した日々を過ごしていきたいです。

以上が2年生の今です。最後まで読んでいただきありがとうございます。



3年生の今

歯学科3年 小野 すみれ

歯学部ニュースの原稿依頼を受けたのは確か1か月以上前だったはずなのに、気が付けば締め切りまで1週間を切っている！思い起こせばこれまで生きてきた21年間、そんなことの連続でした…小学生の夏休みの宿題も、レポート提出も、センター出願もなぜか前日。綱渡りの自転車操業状態を毎回悔いて、次こそは！と固く心に誓ってはみるものの、まあ人間そう簡単に変わるはずもなく、今回またしても締め切り間近となっているのです（涙）

と、前置きが長くなりましたが、私たち50期生もこの春立派(?)な3年生となりました。3年生のメインイベントである解剖学実習は、いよいよ佳境に差し掛かっています。実習が始まる前までは、先輩方から聞かされる虚実取り混ぜた話にただただ不安や恐怖を感じるばかりでした。身支度を整え、最初に解剖室に入る時のあの緊張感は今でも忘れられません。しかし、いざ実際に実習が始まってみると、そんな心配は全く杞憂であることがわかりました。実際に直接触れ、五感で感じ取ること、これまで教科書や資料で得てき

た、点でしかなかった知識が線につながり、さらに立体的なものとして体得できる喜びを感じられる、非常に充実した実習です。週2回行われ、とても密度の濃く、いくら予習をしたと思えても、毎回自分の学習不足を痛感します。予習は、限られた時間を有効に活用するために非常に大切であり、私たちの班では、個人で予習し、それをもとに全員で手順やポイントを確認した後、実習に臨むようにしています。そして、解剖後は決まって丸亀製麺で共にうどんを食べながら、反省会をしたり他愛のない話で盛り上がったりと絆を深めています。(実は米が食べたいとは言えない) 実習は体力的にも精神的にもハードですが、ともに頑張り助け合う仲間が存在により、辛いことも乗り越えることができます。実習を通して、人体について深く学ぶことはもとより、緊張を克服する強い意志と生涯を通して支えあえる頼もしい仲間を得ることができるのだと強く確信しています。また、こうして学ぶことができているのも医学の発展のためにご献体してくださっている方々、ご遺族の方々のおかげであることを常に忘



れず、さらに辛抱強く教え導いてくださる先生方へ感謝しながら、残りの実習も頑張りたいです。

解剖の予習、テスト勉強、部活に（たまに遊びにも）追われながら忙しい日々を送っていますが、先日は歯学部運動会が行われ身も心もリフレッシュすることができました。私は大縄跳びと麻袋飛びに出場しましたが、年々重力を感じつつあることを実感し少し悲しくなりました。みんなの普段真面目に（？）講義を受けている時とは違う、粉にまみれた真っ白な顔、大縄に引っかかる

まいといった鬼気迫った表情、パン食い競争で野性的にパンに食らいつく表情…どれも印象に残っています。今年で3回目の運動会でしたが、仲間達の新たな一面を見れたことや、一緒に競技に取り組むことでクラスの絆もますます深まったと思います。

忙しくも適度に息抜きをしつつ、頼りになる仲間たちと共に、本学入学当初に抱いた夢から目標に変わった思いを実現できるように勉学に励んでいきたいと思います。



4年生の今

歯学科4年 齋藤 ちはる

歯学部学生の今を書くに当たって、4年生として何を話するのが相応しいのだろう。そう思いバックナンバーを探し、先輩方の文章を読んでみました。意外にも部活や普段お世話になっている先輩方がたくさん文章を寄せていらっしやいました。実習が大変で…といった内容があり、私はとても励まされました。私も後輩の励みになるような文章を書きたいと思います。

入学時から、年々忙しく大変になってくるということをいろんな人から聞かされながら4年生まで過ごしてきました。しかし私はその当時でさえも、試験が大変だったり、実習が大変だったりしたので、絶対それは嘘だ！とっていました。ですが年々大変さが増していくというのは本当でした。試験はいくつもあり、実習も前期は週に2回あります。部活動では幹部学年ということもあり、後輩たちをまとめていく責任があります。私が低学年だったころの先輩方は、特に苦労することもなくさらさらとこなしているように見えました。しかし歯学部ニュースに苦労話が載っていたり、お話を伺ったりして、実際は私と同じように奔走していたということがわかって親近感を覚えました。4年生では義歯やクラウンの実習等がありますが、私は本当に不器用なのでとても大変です。ですがある程度の所までは、実習も予習することでカバーできることも多いのだと実感してきました。ただ、どの程度まで予習すれば要領を得るのかどうかは個人差が大きいです。私の場合は他人の何倍も努力しなくては人並みにならず、試験勉強や大会などですぐその努力の必要量が足らなくなってしまう。優先順位を考えて行動し、時間を上手く使うことが大切です。時間を上手く使うというのは、具体的には授業中に授業後の負担を減らす工夫を行い、事務仕事や課題などやらないといけないことを休み時間に済ませ

てしまうといったことです。地道なことですが、小さなことの積み重ねで時間は確保できるのだと思います。余談ですが、iPad等の電子機器は学生にとって効率化の味方だと思います。重い荷物はいらなし、ノートはいらなし、ペンもいりません。どこにいてもすぐに過去のノートを振り返ることができます。教科書だって、使い方次第で紙で存在しているより便利です。私はもともと心配性で教科書もノートもすべて毎日修行僧のようにリュックで持ち歩いていました。そのために肩に傷ができてしまいました。とてもとてもショックで反動でiPadを買いました。投資する価値は十分にあります。学生間でこのような電子機器をどのように使っているかを教えあえるような機会があったらいいのになと思います。

日々の授業では、3年生で基礎科目の授業を終え、臨床的な授業ばかりになりました。今までよりグッと、自分は歯科医師になり、それ以外の道はないという感じが強いです。歯学部外の人に自分が歯学部生であることを告げると、歯科に関する鋭い質問をされたりすることがよくあります。まだわからないです…といった返答を3年生まで



はよくしていました。しかし最近では答えられることが多くなってきました。臨床実習中や、歯科医師になってからは知らないでは済まないのだから、より学んでいかなければならないと感じます。また今までは断片的な知識が多くありまし

た。臨床についても、授業では理解が難しいこともありました。しかし4年生になって、実習が増えて、(大変ではありますが)今までの知識が有機的に繋がってきています。せっかくの機会を活かすことができるよう精進していきたいです。



宝箱の中は黒

歯学科5年 小林 亮太

私の夏は真っ黒に染まっていた。

燃え盛る街並みの中、人気のない路地を歩いていると再会する。煙草と炭の煙で顔をしかめ、若く黄色い声色が脳を揺さぶり、色とりどりの光が私を包む。ただいまと言わんばかりに、私の中に夏が住み始める。

人の「記憶」と「におい」というものは密接に関係しているというが、それは誰しもが身をもって知ることができる真実である。それは人それぞれがもつ感覚であり、もしかすると同じ境遇の人なら共有することができる感性なのかもしれない。そんな話をしていこう。

5年生にもなると様々な経験や思い出が増えていくが、それと同時にそれを励起させるにおいというものが増えていく。

砂交じりの熱風が鼻をつき、鉄くさい臭いが手から離れてくれない。照り付ける日差しに喜ぶのはメラノサイトとかいう変わり者ぐらいである。ばたばたと奔走する同級生を眺めていると自分も成功させねばと手に汗を握る。その結果生み出されたものは200人近い参加者の笑顔と5年生の優勝。後者はなぜか毎年であるが、それは言わぬが花、歯学部7不思議の1つとでもしておいたほうがよいかもしれない。そんな運動会がだいたい昔の出来事かと思ってしまうのは、日々何かに追われている5年生の性であろう。

もしかすると歳をとることというのは、見えないうちに何かに追われることであると同時に、締切という怪物に突っ込むことであることかもしれないと気付いたのはつい最近のことである。思えば小さい頃はなに追われるわけでもなく、それこそ追ってくるのは鬼ぐらいのものだった。待ち構えているのは怪物なんかではなく、温かい母の夕飯と、リビングで寝てしまった私を布団まで運んでくれ

る力強い父の腕くらいのものであった。この歳でこの学年で、これほどまでに常に何かに追われているのだから、歯科医師になったあとのことを考えると気が気でならない。かけこで真っ先に捕まっていたのは自分だったのだから。

歯科という世界に入門することが急に現実味を帯びてくるのがこの学年だとも思う。あまりに急すぎて、それは寝起き後すぐにマラソンをしろと告げられた時の感覚に近いかもしれない。ポリクリで各科を回りだしてつくづく感じるのは、焦りと恐怖である。数ヵ月先には臨床の現場に立ち、患者さんの治療をしている自分がいるだろうし、そうでなければならない。彼にバトンを渡すのはほかでもない過去の自分と今の自分であるの言うまでもないだろう。そうか。私を勉強しろと追い駆り立てるのは、過去の怠けていた自分ではないか。それならば力の限り彼から走り逃げ、未来の自分に今あるバトンを少しでも早く渡せるようにしなければ、それが自分自身に対する責任というものではないか。そんな理由づけをしながら今日も机に向かう。CBTや国試という怪物に突っ込む日まで。

病院の階段のこもった熱を帯びたあの独特なおい、グローブを外した後の手のゴムのにおい、消毒用エタノールのツンとしたにおい、1日実習



を終えた後の服のにおい、クーラーのかかりすぎた更衣室の少し汗臭いようなにおい、ご飯時だぞと主張せんばかりの昼の教室のにおい、気になるあの子のシャンプーの香り。なんてことのないすべてのにおいが、学生生活の思い出とともに私の記憶へと染み込んでいる。

CBTやOSCEが終われば我々は激動の日々を過ごすことになる。そこには甘く楽しいにおいよりも、つらく苦しいにおいの方が多いかもしれない。だがそれすらも愛おしい思い出として自分の

宝物になっていくだろう。

あしたはどんな宝物ができるだろうか。

そんなことを思いながら5年生の今を生きている。

私の中に夏が住み始めるとき、彼は多くのものを置いていく。そのすべてが色彩豊かな思い出となり、私の中で混ざり合う。そして今年もこう思うだろう。

私の夏は真っ黒だ。



6年生の今

歯学科6年 小山 祐 平

6年目にして初めて歯学部ニュースの学年紹介に投稿させていただきます、歯学部歯学科6年の小山祐平です。今まで、あみだくじで執筆者を決定するのが恒例の歯学部ニュースでしたが、今年は歯学部ニュース編集委員であり、私が3年生の解剖学実習でインストラクターでもあった、斎藤浩太郎先生からの突然の指名にて、初めて執筆することとなりました。

さて、テーマは「6年生の今」ということで、6年生がどういう生活を送っているのか、皆様にできる限り知ってもらえるように書こうと思います。しかしながら、書ける文字数に限りがあり、すべてを紹介しきれませんので、次のページの6年生の金子絵里奈さんの文章も合わせてご覧ください。

5年生の共用試験（CBT・OSCE）に無事全

員合格し、10月に臨床実習が始まってから、早9か月が経ち、あと3か月ほどで5年生（48期生）に引き継ぐところまでできました。おそらく、この文章が載った歯学部ニュースが皆さんの手元に来る頃には引き継ぎは始まっていることでしょう。

6年生といえば、臨床実習。新潟大学歯学部の臨床実習は診療参加型の臨床実習で、実際に学生は各専門診療科のインストラクターの指導の下、ひとりの担当医として治療に参加するという、全国でも東京医科歯科大学と新潟大学でしか行われていない実習です。実習では、クラスメートひとりひとりが、異なる症状を持つ患者さんを10名ほど担当します。

典型的な6年生の1日を紹介すると、朝は8時ごろに登校し、9時からお昼を挟み16時までは総診で診療、または、係の仕事、口腔外科などの専



クラウン・ブリッジの青柳先生（2列目中央）とのケースリーダー会にて
筆者2列目左から2人目

門診療科での分散実習を行います。係の仕事や分散実習については、次のページで金子絵里奈さんが詳しく説明してくれますので割愛します。そして、夜は19時近くまでプレチェックや、技工室で診療前のレポート作成、技工物製作に励むという毎日です。引き継ぎ当時は、帰りの外は真っ暗、そんな日々「なんてブラックな学生生活なんだろう」なんて思っていました。今ではそんな生活にも慣れ、時間の使い方が上手くなった(?) 気がします(笑)。

引き継ぎが終わった昨年11月、初めてひとりで診療した日の緊張感は今でも忘れられません。9時に診療がスタートするのですが、30分以上も早く外来に行き診療の準備をし、患者さんをお呼びする前の残り数分でレポートを少し見直す、診療中は緊張が思いっきり顔に出ていると思います。基礎実習と明らかに異なることは、「責任」の2文字。臨床実習では実際に患者さんの歯を削ったり、時には抜歯を行ったり、自分のその行為ひとつひとつに責任がついて来ます。それだけに、ライターの先生方は優しさの中にも厳しさを持って丁寧に指導して下さいます。正直に言って、臨床実習は、プレチェックやレポート、技工物に追わ

れ、緊張感の連続で大変です。しかし、それ以上に教科書を読むだけでは得られない多くのことを学ばせてもらっています。診療が終われば、技工室に帰って来てホッと一息つけます。技工室では、普段の会話の中にも、治療方針や臨床操作、技工物の製作などに関して、クラスメート同士で相談しアドバイスし合って、お互いモチベーションを高めています。

さて、この文章を書いている今は6月26日。つい先日、マッチングへの登録が始まりました。マッチングは、卒後の臨床研修先を決める大事なイベントです。マッチングの次は、国家試験と、今後の自分の人生を決める岐路に立っています。将来、自分は何がしたいのか、クラスメートや先輩、両親に相談したり、医局説明会で先生方にアドバイスを頂いたりして、決めたいと思います。

そして、6年生は学生最後の年。部活や飲み会、最後の夏休み、学生のうちにしかできないことを満喫しようと思います。

最後に、臨床実習も残り3か月。この臨床実習に関わる先生方、患者さん、すべての方々に感謝し、残りの実習を行いたいと思います。

6年生の今

歯学科6年 金子 絵里奈

臨床実習が始まってから早くも9か月が経とうとしてます。多くの方がご存じの通り、私たち6年生は、それぞれの学生が10数名の総合診療部の患者さんを担当し、治療計画の立案から実際の治療に至るまでの全てを行わせていただいています。6年生って、毎日1日中診療をしているの？と思われがちですが、担当患者さんの診療以外にもたくさんの実習項目があり、毎日充実した日々を送っています。6年生の大まかなことは小山くんが書いてくれていると思うので、今回はあまり知られていないと思われる6年生の臨床実習内容について、いくつか紹介したいと思います。

【各診療科の外来見学】

歯診、クラブリ、義歯、小児、矯正、予防など

各診療科の先生方の診療の見学、アシストをさせていただきます。治療の手技はもちろんのこと、患者さんとのコミュニケーションなど学ぶことが本当にたくさんあり、自分の診療を見つめ直すきっかけを与えてもらえる実習です。

【係】

予診係では、研修医の先生方が行う初診患者さんへの医療面接や口腔内診査のアシストを行います。限られた時間の中で的確に主訴や経過を聴取することが求められ、研修医の先生方からその技術を学ばせていただいています。その他、診療前のユニットのフラッシングと手用スケーラーのシャープニングも予診係の仕事で、朝が早い仕事の一つでもあります。



技工室にて

受付係では、患者さんからの電話対応を行った
り、初診患者さんを予診係に引き継ぐ仕事を行います。
受付のクラークさんが患者さんに対応する
姿を間近で見たり聞いたりすることができるため、
丁寧な言葉遣いや適切な対応を学ぶことができます。
臨床実習が始まったばかりの頃は電話対
応が苦手でしたが、今は少し慣れることができた
と感じています。

支援係では、総診患者さんの診療をするクラス
メートのアシストを行います。友達が診療してい
る姿を見ると、診療時の工夫や患者さんへの心配
りなど、自分も真似してみよう！と思える新たな
発見が多いです。

【口腔外科分散実習】

3日間×5クルールの日程で、口腔外科において
外来見学、病歴聴取、小手術見学、中央手術室で
の手術見学、病理検査などを行います。担当症例
の所見用紙を記載するのですが、なかなかOKが
もらえず、何度も先生のところに通ってご指導を
いただくこともあります。

その他にも、摂食嚥下リハビリテーションでの
1週間の実習や、CT・MRI・US見学、CT診断、

全身麻酔法見学、矯正歯科の診断、歯周アドバ
ンスの発表などがあります。時には訪問歯科診療見
学や保育園や小中学校、高校、大学の歯科健診な
ど、外に出向くこともあります。やるべきこと、
やりたいことが多く大変な日々ではありますが、
これまでの自分の人生を振り返っても、間違いな
く1番充実し、1番楽しい日々を送っていると感
じています。毎日本当に楽しいです！多くの方が
関わり、支えられて私たちの今があることを忘れ
ずに、あと残り数か月の臨床実習に臨みたいと思
います。

朝7時に技工室に行くとなぐらで技工用バキュー
ムの音が聞こえ、技工物を製作している人がいた
り、難しい症例を担当し、見たこともない技工を
やっている人がいたり、頑張っているクラス
メートの姿を見て何度もパワーをもらいました。
みんなが頑張っているから、私も頑張ることが
できています。最近マッチングプログラムの登録が
始まり、将来が現実味を帯びてきました。病院見
学で欠席している人がちらほら見受けられ、数か
月後にはみんなが全国に散らばってしまうのか…
と思うとなぐらで寂しいですが、あと数か月、47期
みんなの良い思い出をたくさん作りたいたいと思
います。



歯学生の今

口腔生命福祉学科 2年 保坂 菜里美

みなさん、こんにちは。口腔生命福祉学科2年の保坂菜里美です。今回、「歯学生の今」ということでお話をいただいたので、2年生になってからの私の生活について、1年生の時の生活と比較しながら紹介したいと思います。

初めに、勉強についてです。1年生の頃はほとんどが一般教養で、前期の金曜日以外は五十嵐キャンパスに通っていました。正直、1年生の頃は歯学生という意識はほとんどありませんでした。しかし、2年生になった今はほとんどが専門科目なので、歯学生という意識を持つようになってきました。講義や実習などで見たり聞いたりすることというのは初めて知ることばかりなので、覚えることも多く、大変だと感じる一方で毎日が新鮮だと感じます。2年生になって勉強面で一番変わったことは、PBL (Problem-based Learning) をやっていることです。様々な科目でこのPBLを行っています。PBLとは問題発

見・解決能力を高めるものです。問題に基づく学生主体の学習で、文章を読み、問題を見つけ、解決に導くというものです。最初は予備知識が全く無い状態で始まったので、とても大変でした。2年生になって3か月経った今も、まだまだわからないことはたくさんありますが、徐々にPBLでやったことや講義で習ったことをつなぎ合わせて物事を考えられるようになってきています。また、人の意見を聞くと、自分とは違う考えをたくさん知ることができて、とても勉強になります。この過程を繰り返し、今、医療人に求められているコミュニケーション能力や問題発見・解決能力、根拠に立脚した医療を実践する力を身につけたいと思います。

次に、サークル活動についてです。私は五十嵐キャンパスのダンスサークルに所属しています。今年も多くの1年生が入ってくれました。最近の活動としては、1年生に基本を教えることと、イ



イベントに向けての練習がメインになっています。これから秋に向けて、にいがた総おどりや新大祭といった大きなイベントがあるので練習にも力を入れていきたいと思っています。私のサークルは10月に代替えで、今年の10月には自分たちがサークルを引き継がなければなりません。その後は先輩も後輩もいる状態での活動ですか、同期のサークルメンバーと協力しながらサークルを引っ張っていきたいです。サークルに少しでも貢献できる人になりたいと思っています。勉強と両立しながら頑張っけて続けていきたいです。

最後に学校生活についてです。2年生になって、毎日ほとんどの講義を口腔生命福祉学科の2

年生で受けています。口腔生命福祉学科の人数は20人と少ないのでとても仲が良く、全員女子なので昼休みなどは毎日にぎやかです。一人ひとり個性があってとても楽しく、また居心地も良いです。PBLで、今まではあまりしゃべらなかった人とも話すことができるので新たな一面を見つけることができたりして、さらに仲が深まっている感じがします。

2年生になって環境が変わり、気持ちの変化もありました。時間が経つのは早く、あと1か月ほどで夏休みになろうとしています。様々なことを経験、吸収して、成長していきたいと思います。



歯学生の今

口腔生命福祉学科3年 北村 友里恵

大学に入学してから2年間が経過し、驚くことに、今は大学生活の後半を過ごしている。3年生へと進級してからこの数か月、自分自身や周囲の変化に気づかされずにはいられない。休日の予定等、たわいない会話でにぎわっていた教室も、いつの間にか進路や実習の会話が行き交うようになっていた。大学生活の後半を迎え、私たちもようやく将来に近いものだと自覚し始めたところである。

口腔生命福祉学科では、3年時から歯科の学習に加え、本格的に福祉科目を学び始める。福祉の授業では、皆さんもよく耳にするであろう年金や介護サービス、健康診断、生活保護…等の社会保障制度について、またソーシャルワーカーに求められるスキル等を学んでいる。

学習形態としてPBL形式をとることも多い。座学とは異なりグループでの討議を元に課題設定から課題解決までを行うので、自分が理解したこ

とを他者へ伝える能力、また他者の意見を理解しそれらを統合する能力が必要である。PBLは自分だけの理解では成立せず、座学に比べ負荷を感じることもある。しかし将来、歯科と福祉のいずれの道に進むにせよ、PBLで培われた能力が役に立つのではないかと感じている。疾患が発症に至るには様々な要因が関係しており、また社会的援助が必要な人についても、彼らは複数の問題を同時に抱えている場合も多い。その人を取り巻く多くの問題を把握することなしに本人が納得できるような治療や援助は行えない。そして複数の問題を発見するためには自分ひとりの視点では不十分であり、多職種での連携が欠かせないと思う。そのため、PBL等の集団での討議は将来に通じるものであると心に留め、日々取り組んでいる。

また、福祉を学ぶ中で今の私が強く感じていることがある。それは、人の思考や性格はその人の歩んできた人生によって形成されるということだ



ある。すなわち、人の思考には少なからず偏りや先入観がある。治療や支援を行う際、こうした自分の先入観にとらわれず、相手の視点と客観的な視点の両方を持ち合わせる必要があると思う。そのためには、様々な経験をし、多くの人と出会い、自分自身の思考の傾向や他者の考え方を学ばなければならない。残り半分の大学生活とはいえ、まだまだ挑戦の余地は残されている。進路と向き合いながらも、できる限り様々な経験を積みみたいと思う。

歯科については、臨床に向けた知識・技術を学ぶと共に、実際の現場で保健指導や補助、見学をさせて頂いている。その中で印象的であったものの1つとして、幼稚園児に対する集団歯科保健指導がある。実際に保健指導を行うのはこれが初めてであり、最初は中々本番を想定できなかった。4月から6月の本番に向けて準備を開始し、指導目標の設定からリハーサルまで計画的に進めていった。本番は3、4、5歳児に対する全体指導で齲蝕に関連した劇を、また、各クラスにおいてブラッシング指導等、幼児の発達に応じた指導を行った。この実習を通し、集団歯科保健指導を行

うにあたって、準備・計画の進め方、対象者の特性を把握する大切さを学ぶことができた。また、クラスでひとつの物を作り上げるために、全員がそれぞれ役割を持って授業時間以外にも休み時間や放課後の時間を利用して準備を行った。本番が無事終了後は達成感とクラスの絆を強く感じ、この調子で国試や就職に向けて多くの課題を皆で乗り越えていきたいと思う。

最後に、3年から福祉の学習や臨床実習が始まり、また進路にも向き合わなければならない焦りや不安等、今の私は様々な思いを抱えている。そのような中でも、大学に行けば信頼できる仲間や先生がいる。そして信念を持って臨床に臨む医療従事者、ソーシャルワーカーの姿をみることで、将来への希望を感じると共に、人を支える責任感で身が引き締まる思いがする。将来いずれの道に進むにせよ、多職種間での連携や対象者の把握・理解は欠かせないだろう。そこで、様々な協力の下で行われている実習の機会を大切にし、その他にも経験を積むことで、他者と関わりながらスキルの向上・多様な視点の構築を図っていきたい。

歯学生の今

口腔生命福祉学科4年 堀井美希

大学に入学したことをつい最近のように感じていましたが、4月のはじめに3日間、1～5限のガイダンスを受け、そこで私はとうとう最高学年である4年生になったのだと実感がわきました。ガイダンスを受け、不安や緊張を抱えながら幕を開けた4年生の学生生活をご紹介します。

私達は現在、月曜日から木曜日は病院内で各診療科に分かれて1日実習をさせていただいています。金曜日にはPBLや外部講師の先生方からの講義等をうけます。歯科の臨床実習では、主に各診療科で先生方の診療の補助や見学を行っています。治療中のバキューム補助、セメント練和・除去、印象採得の補助、歯面研磨、スケーリング、歯科外科的手術の見学等さまざまです。だいたい1～2週間で実習先の科を交代し全部で17の診療科を約9ヶ月かけてまわります。診療科の先生方や患者様にご迷惑をおかけしないよう予習をし、

頭の中でイメージをしてから実習に臨むのですが、それでも緊張や焦りで戸惑うことも沢山ありました。自分の未熟さ故に大変だと感じることもあり、反省しきりの毎日ですが、そんな不甲斐ない私達に診療科の先生方や歯科衛生士、看護師をはじめとする病院スタッフの皆さんには、ことあるごとに助言をいただきました。医療現場ましてや社会に慣れていない私達に、快く指導をしてくださり、本当に感謝しております。1日の実習を終えると実習日誌の作成をします。ほとんどの診療科はパソコンでポートフォリオを作成し、提出をしています。実習で疲れていても、日誌を作成することを怠らず、その日学んだ知識の整理をします。木曜日の実習が終わると、1週間乗り切った喜びをクラスの友達と分かち合っています。そして、また次の実習が始まります。その中で、大変なことやつらいことがあった日は、昼休みなどに友達と話をしました。時には、症例に対する真



剣な話題も飛び交うようになりました。

この臨床実習は、12月のはじめまで続き、その期間中に1人もしくは2人で、学外のさまざまな福祉施設へ時期をずらして1ヶ月、実習に行きます。福祉現場実習では、特別養護老人ホーム、身体障がい者の方のリハビリセンター、市の児童相談所や障がい者の施設等に実習へ行きます。施設によって実習の内容は異なりますが、事前に実習先の情報収集、実習志望動機、実習計画書の作成、事前訪問を行い実習に臨むこととなります。私は、就労継続支援B型事業所で実習をさせていただきました。そこでは、障害により企業などに就職する事が困難な対象の方に対し、就労に必要な知識及び能力向上のために必要な支援を行います。私は、利用者の方と一緒に作業をさせていただき、実習の後半には、利用者の方の支援計画の立案、支援を行わせていただきました。実習を通して、個別の支援を十分に行っていくためには、支援者が様々な視点を持つことや多職種の連携が必要であり、そのことがソーシャルワークにおい

て重要であると感じました。また、障がい者の方とどのように接すればよいのか不安に感じていましたが、実際に接してみると作業の休憩時や昼休憩時など、利用者の方から話し掛けてくださって楽しく過ごすことができ、知的障害を持つ方々の感じる心は健常者と何ら変わらないのだということを感じ、時にはその方々の個性であると感じました。

さらに4年生は、特論という口腔保健福祉に関する論文形式の報告書の作成、発表、1月と3月にある社会福祉士と歯科衛生士の国家試験の勉強が課せられます。特論は、各自テーマを設定し、文献検索、調査等を行い、論文形式の報告書を作成します。また、勉強だけでなく進路の決定や就職活動等もあり、最後まで忙しくなると思いますが、時には遊んで息抜きもして、これからも周りの人と支えあいながら、お世話になっている方々への感謝の気持ちを忘れずに1日1日を精一杯自己研鑽に励んでいきたいと思えます。



JASSO海外留学支援プログラム報告 マルメ大学SSSV報告

新潟大学医歯学総合病院歯科医師研修Bコース 田村 光

私は歯科医師1年目、新潟大学医歯学総合病院歯科医師研修Bコースにて、今は群馬県高崎市にある協力型臨床研修施設で研修しております。日々悪戦苦闘しつつも、一人前の歯科医師を目指して一生懸命診療・研修に励んでおります。

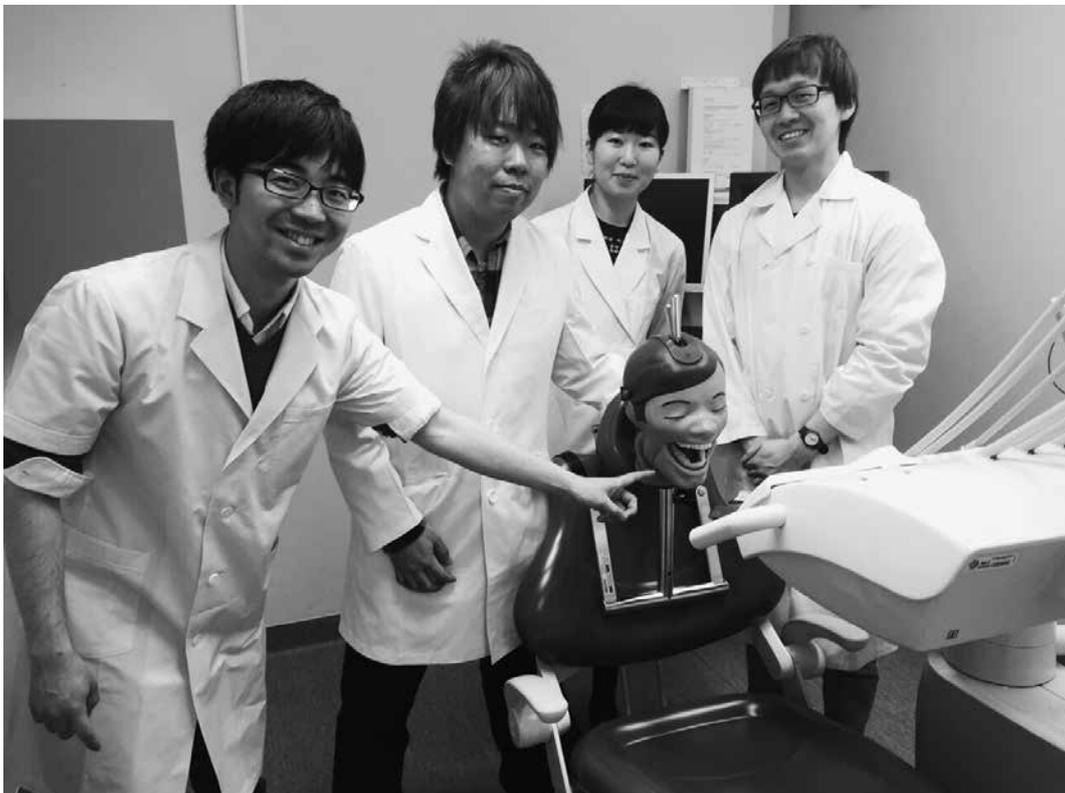
この度は、今年3月に日本学生機構（JASSO）による留学生交流支援事業（SSSV）のプログラムに参加し、スウェーデンのマルメ大学を訪問させていただきましたので、そのご報告を致します。

マルメはスウェーデンの中でストックホルム、ヨーテボリに次ぐ3番目の都市で人口は約30万人、場所はスウェーデン最南端に位置する港町で

す。また、150カ国以上の国から人々が集っており、多国籍多民族な都市です。そのような背景もあってか、マルメ大学歯学部にも様々な国出身の学生がおり、また私たちのような留学生も多かったです。

スウェーデンは世界的にみても予防歯科が進んでいるとされているようで、マルメ大学歯学部もカリオロジーをはじめとした予防歯科学や、教育分野ではPBLを積極的に行っていることで有名です。

私たちはマルメ大学にて、病院の診療室の見学や学生の実習や実習施設の見学、PBLの見学やマルメ大学での教育についての講義や、予防歯



左から筆者、研修医の小松貴紀先生、5年生の松崎奈々香さん、研修医の都野隆博先生

科、カリオロジーについての講義、さらにはインプラント手術などの見学をさせていただきました。

全て貴重な経験となりましたが、その中でも特に印象に残ったことが3つあります。

まず1つ目はPBLについてです。マルメ大学のPBLでは全員がとても積極的に参加し、自信を持って発言しているように感じました。新潟大学でも5年次に行われており、私たちもPBLでの学習をしましたが、意見を言い合う時などは個々によって発言量が違った印象があったので全員が積極的に発言を行っている状況はとても印象的でした。

2つ目はカリオロジーと予防歯科学の講義についてです。歯を顕微鏡で見て拡大していった場合どのような構造が見えてくるのか、それに対して細菌はどれくらいの大きさなのかという話や、歯磨きの回数や生活習慣などの質問を答えていくとどの部分が特にう蝕のリスクを上げているか表でわかるシステムについて講義していただきました。特に印象的だったのはう蝕がどこまで進行したら、修復治療を開始するのかという話です。スウェーデンではC2でう蝕が象牙質の厚さの半分以上進んだくらいになったら治療を開始すること、またそれが可能な理由は多くの患者さんが定期的を受診をしているからだとおっしゃっていました。

3つ目は医療保険制度の違いから治療計画も変わってくることです。スウェーデンでは20歳までは歯科医療は無料で、それ以降も年齢に応じて補助金が出ます。また、1年間の歯科医療費が高額だった場合もそれに応じて補助金が最大85%まで出されます。さらには日本では保険外治療であるインプラントが保険治療として行われています。このことから、例えば大きな根尖病巣があり、貼薬や根充後に比較的長く経過をみなければならぬ症例などでは1年間で治療が終了するように抜歯してインプラントという治療の流れも多いそうです。

マルメ大学の学生や他の国々からの留学生との交流もとても貴重な経験となりました。マルメ大学の学生はみなとても親切で優しく、休日には電車で30分の隣国デンマークのコペンハーゲンに連れて行ってくれたり、自分の家に招いてくれた学生もいました。また、他の留学生との会話も含めて、はじめて日本や自分が日本人であることを真剣に考えるきっかけとなりました。しかし同時に自分自身の英語の能力の足りなさを実感しました。どの国々出身の学生も英語が堪能で、海外での英語の重要性を強く認識させられました。これからでも努力して身につけていきたいです。

最後にこのような貴重で有意義な機会をあたえてくださった、魚島先生、宮崎先生、小川先生、石田先生ら諸先生方、右も左もわからなかった私たちを引率してくださった前川先生、この場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございました。



マルメ大学の中庭にあるポッセルトの図形の銅像

JASSO海外留学支援プログラム報告

スイスSSSV報告

歯学部歯学科6年 金子 絵里奈

2016年3月13日～22日の10日間、SSSVプログラムの短期海外派遣で、スイスのジュネーブにある世界保健機関（WHO）本部に派遣されました。スイスは、フランス、ドイツ、イタリア、オーストリアと接するヨーロッパの内陸国で、地域によって公用語も文化も生活様式も異なります。今回派遣されたジュネーブはスイス西部、フランスとの国境がある都市で、公用語はフランス語でした。またスイスは世界一物価の高い国と言われていますが、実際その通りで、私たちは宿泊先としてフランス国内のホテルを利用し、毎日バスで国境を越えてWHOに通いました。

私たちのプログラムのスケジュールは図1に示した通りです。WHOで活躍されている様々な職種の方から講義を受けたり、サンスターや国際赤十字社に出向いてお話を聞いたり見学をさせていただきました。全ての内容を紹介したいのですがスペースの関係もありますので、今回はWHOという機関について詳しく書かせていただきます。

まずそもそもWHOとは何を行っている場所なのか、明確に答えられる人は少ないのではないで

しょうか。WHOは健康に関する国際連合の専門機関として1948年に設立され、現在194か国が加盟しています。可能な限り高いレベルの健康を達成することを目的とし、国際保健に関する仕事に対する指導、調整の権威として活動します。主要機能としては①リーダーシップの発揮、②規範と基準の設定、③技術支援・能力開発支援、④研究課題の形成、⑤政策オプションの明確化、⑥健康動向の把握のモニタリング、が挙げられ、主要分野としては感染症、非感染症、生涯にわたる健康、保健システム、危機管理があります。日本には厚生労働省がありますが、「世界の厚生労働省にあたるのがWHO」と考えるとイメージしやすいかもしれません（小川先生の言葉をお借りしました）。

WHOは194の加盟国がお金を出し合って運営されているということですが、そのことを象徴するものを建物内で発見することができました。写真1はWHO内の大理石の床なのですが、写真に写っている限りでも3種類の大理石が使われていることがわかります。この建物を建設するとき

March		AM	PM
14	MON	WHO Guidance WHO tour	City sightseeing
15	TUE	visit Sunstar	Oral Health Traditional Medicine
16	WED	Health Financing Policy Tobacco Control	visit IFRC
17	THU	School Health Food Safety	Career development Junior Professional Officer (JPO) Program
18	FRI	Oral Health Information Technology	Coffee Time
19	SAT	Free	
20	SUN	Free	
21	MON	City sightseeing and Preparation for presentation	
22	TUE	Presentation and Discussion	Dep Geneva

図1



写真1

に、いくつかの加盟国がそれぞれの国の大理石を提供した結果このようになったそうです。

プログラム全体を通して学んだのが、世界で動くためには「文化」を考えなければならないということです。日本で生活しているとなかなか感じることもない文化の違いを、自分の考えの中に盛り込むにはある程度の訓練が必要であり、これは日本だけで生活していたら気づけないことなので、貴重な概念を与えてもらえました。また、日本人であることの強みがあることを知りました。日本人は内向的で個性が少ないと言われ、世界で行動するときにはマイナスだと思っていましたが、今回のプログラムでお話をしてくださった方の多くが、日本人は真面目で、よく働いて、時間や期限を守って、ケンカもしないし、まともなことを言う、と外国の方に評価されるとおっしゃっていました。日本人であることが強みになることを知って、日本人であることに誇りを持つようになりまし。また世界規模の話の聞い

て、世界と比べて日本がまだまだ足りないこと、逆に、日本が進んでいることが見えてきました。日本が世界の中でも進んでいるのは、高齢社会に対する概念やシステムであり、その点において日本は今後世界をリードするべき立場にあることを知りました。日本の歯科医師や社会福祉士が世界で活躍できる可能性を強く感じました。

休日は特急でツェルマットへ、その後登山列車に乗り換えてゴルナーグラートまで行きマッターホルンを見たり、首都ベルンのチーズ工場でチーズの歴史や製造過程を学んだりしました。派遣された10日間を最大限に活用し、たくさん学び、たくさんの思い出を作ることができました

最後に、今回このような貴重な機会を与えてくださった方々、このプログラムに関わる全ての方々に感謝申し上げます。特に小川先生には、現地だけでなく派遣前、派遣後に至るまで手厚くサポートしていただきました。心から感謝いたします。



WHO本部前にて



登山列車とゴルナーグラート駅。
奥に見えるのがマッターホルンです

JASSO海外留学支援プログラム報告

短期留学を経て思うこと

歯学部歯学科3年 松田 きよら

私は入学前から、新潟大学歯学部には海外留学プログラムがあるということを知っており、チャンスがあれば参加を強く希望していたが、今回貴重な機会を与えていただき、念願の短期留学に参加することができた。今回、私は三大学合同派遣プログラムに参加させてもらい、東北大学、広島大学、新潟大学の三大学でタイのチェンマイ大学に短期留学してきた。

今回の訪問によって、タイの歯科医療に対して抱いていた、「タイは発展途上国であるから日本よりも医療は劣っている」という私のイメージは払拭された。実際にチェンマイ大学の病院や個人クリニックを訪れてみて、タイは日本よりも衛生面がしっかりしていないという現状が事実としてあるものの、診療技術は確かなもので決して日本より劣っているとは言えないと感じた。また、タ

イでは日本にはない分野であるCommunity Dentistryが盛んだった。これは、地域に出向いて歯科治療や歯科指導を行うという取り組みであり、日本でいう訪問診療のようなもので、日本よりも政府や地方自治体の手厚いバックアップにより発達していた。老人が集まりやすいような施設に病院が併設されていて、ボランティアによる支援も活発であり、口腔保健推進活動にとっても良い環境が整っていた。一方で子供たちは、齲蝕がひどい状況であった。この背景には両親が仕事で忙しく子供に歯磨き指導をする時間や余裕がないこと、知識不足、金銭問題等の重大な諸問題がある。日本では、ある程度小さい頃からきちんと歯磨きをする習慣があり、タイに比べたら子供たちの齲蝕率はとても低い。日本は超高齢社会を迎えていて、ここでタイから学ぶべきことはCommunity



タイの個人医院にて

Dentistry のような取り組みによって、老人たちの憩いの場を提供することだと感じた。各地域に最適な医療を提供するためにも、その地域の状況に対応した医療の在り方を日本はさらに考えていかねばならない。タイの歯科医療現場を見て、日本の歯科医療にも取り入れていくべきことを考えるよいきっかけになったと思う。

タイでの病院見学や地方に行って歯科治療の様子を見るときに、様々な専門用語が飛び交い単語を拾うのに精いっぱいだった私に、上級生がこの患者さんはどんな症状で、今どんな治療が行われているかということを手際よく教えて下さった。これがもし同一学年だけでの派遣だったら一つ一つの状況を理解するのにとても時間がかかったのではないだろうか。この点も学年が様々である合同派遣の良い点であると実感した。三大学合同であることでチェンマイ大学だけでなく国内の他大学との比較もでき、たくさんの違いを発見できた。10日間を共に過ごした東北大学、広島大学の皆さんとも各大学のカリキュラムについて意見交換し

合い、同じ志を持つからこそその刺激を受けることが出来た。国内外で情報の共有ができる繋がりがあるということはとても素晴らしいことである。タイの人々は皆あたたかく寛容で協力的であった。チェンマイ大学の先生、学生もとても親切に対応して下さい、楽しく充実したタイの滞在を終えることが出来た。タイを訪れてみて、日本とは違うタイの良さも感じたし、やはり日本の素晴らしさも実感することができた。

新潟大学には数々の海外派遣プログラムがある。今回の派遣で様々なことを吸収することができ、これからの勉強に対するモチベーションにもなったし、もっと見て知りたいという願望も生まれた。もし次もまたチャンスがあるのなら、英語をもっと学び、今度は先輩から教わるのではなく自分で何かを得られるように勉学に励みたい。最後に、今回のこの三大学合同派遣プログラムに参加するにあたってお世話になった全ての方に感謝の気持ちを伝えたい。



エレファントキャンプにて 本人左

入学者のことば

入学者のことば

歯学科1年 植田 優太



私たち新入生が新潟大学歯学部に入學してから3か月が過ぎようとしています。初めての1人暮らしや大学での生活に慣れず、日々やるべきことに追われていたため、あっという間に時間が過ぎてしまったように感じます。最近では部活に入り多くの先輩方、先生方と出会い、人と関わることの楽しさと大切さをますます実感しています。

私は隣県の長野県出身です。新潟市は受験に関すること以外では訪れたこともありませんでした。新潟に来てみると自分が想像していた以上に都会で驚きました。特にバスの利便性の良さに驚きました。

私は1人暮らしを始めてから、自分の部屋の掃除や洗濯といったままで家族に頼っていたことをすべて自分でするようになりました。1人暮らしをすることで、自分のことを自分で行う楽しさと大変さを感じるとともに、今まで自分のこと支えてくれた家への感謝の気持ちがわいてきます。

大学での生活では今年からカリキュラムの変更があり、より自由に学びたい科目を学ぶことができるものになりました。また新潟大学歯学科の特色でもある1年次の早期臨床実習も着々と進んでいます。歯科についての知識が何もない状態で臨床実習に臨むため、わからないことばかりです。しかし何もわからない状態だからこそ、より患者に近い立場で様々なことを体験でき、大きな刺激になります。この貴重な体験を今後の学校生活、将来に生かしていかなければならないと強く思います。

最後に新潟大学歯学科の1年は60人という他学

部に比べても人数の少ない学部です。少ない人数だからこそ、全員で団結しみんなで困難を乗り越えていくことが出来ると思います。お互い切磋琢磨しあいながら、そして助け合いながら大学生活を有意義なものにしていきたいです。

入学生言葉

口腔生命福祉学科 廣川 光

新潟大学に入學して3か月が経とうとしています。私は社会人を経た後から短大に入學し歯科衛生士免許を得て、この春、口腔生命福祉学科3年次に編入しました。短大では、病院、歯科診療所、介護老人保健施設、小学校など様々な実習先での歯科的介入を経験しました。実習中に歯科的な立場からだけでなく、その人の生活全般を支援することができたらいいなと感じる機会がとても多くあり、医療福祉の包括ケアが重要であることを実感しました。歯科衛生士と社会福祉士のダブルライセンスを取得することにより、そのような支援ができるのではないかと思います。入學を決めました。

入學してみると、施設や実習環境、資料の充実さに驚かされました。改装工事が終わったタイミングでの入學でしたので、とても綺麗な教室で学ばせてもらっています。講義は高校や短大では経験することのなかった、問題を自分で見つけ、グループディスカッションを通し、解決していくPBL形式が多くあります。まだ慣れておらず、自分の意見を言うときには緊張したり、グループの意見をまとめられなかったり、課題はたくさんありますが少しずつ成長していき、社会に出た際に生かしたいと思っています。

3年次編入生は週に2回、五十嵐キャンパスでの講義があります。旭町キャンパスにはない、これぞキャンパスライフというものを経験できてうれしいです。五十嵐キャンパスは語学の支援が充

実していることが魅力的です。カリキュラムに少し余裕があり、いい機会なので苦手な英語に取り組もうと思い、FL-SALCの会話サークルに参加しています。短大時代は全く英語を勉強しませんでしたので、中学や高校で学んだ英語はすっかり忘れてしまいました。入学後、中学英語からやり直して、今TOEICに向けて勉強中です。

受動的に講義をただ受けるのではなく、自分から積極的に様々な活動に挑戦し、充実した大学生活を送りたいと考えています。



入学者のことは

口腔生命福祉学科1年 柳 沢 南



大学生活への希望と不安を抱えながら、この新潟大学歯学部に入學してから早くも3か月がたちました。入学当初は誰も知らない状況でこの知らない土地でひとり生活していくのはと

ても心細く不安でいっぱいでしたが、今ではこの大学生活にもほとんど慣れ、とても楽しく充実した毎日を送っています。

入学して早々にあった歯学部の赤塚での合宿では、グループ討論やお泊りを通して歯学科の人や話したことがなかった人とも話すことができ、仲良くなれたのでこの合宿があってよかったと思っています。口腔生命福祉学科はたった20人で女子だけなので友達ができるか不安でしたが、この人数のおかげですぐに覚えることができたし、話し

やすい子が多くてあっという間に仲良くなることができました。この20人でこれから4年間一緒に勉強していくのでもっと仲良くなればよいなと思っています。

毎週金曜日にある早期臨床実習では、ユニフォームや白衣を着て病院に出て、患者付き添いや患者役、病院見学をしています。ユニフォームや白衣を着て病院内を歩くことで医療に関わるということを実感することができ、モチベーションを上げることが出来るのでとても良い経験だと思っています。実習を通して患者側の立場に立って物事を見たり感じたりできるので、患者さんに対してどのように接するべきかなど色々なことを学ぶことが出来ました。

また、部活は歯学部バレー部に入りました。私は最初、バレー部に入るつもりはありませんでしたが、今では入ってよかったのかなと思っています。歯学部バレー部は人数が少ないですが、かわいくて優しかったり素敵な人たちがばかりでこの部活に入ったおかげで仲良くなれてとても嬉しいです。また、練習は厳しくないのでもつらくないし、やりたい練習を取り入れてくださるのでとても楽しいです。

1年生はまだ教養の授業が多いですが、2年からは専門的な授業になり、どんどんと忙しくなっていくと思います。なので、1年生の時しかできないことをたくさん経験して後で後悔しないような大学生活を送っていきたいと思います。

入学者の言葉

矯正歯科学分野 大 澤 知 朗



今年4月に新潟大学大学院医歯学総合研究科の矯正歯科学分野に入局致しました大澤知朗です。入局しすでに3ヶ月が経とうとしていますが、この3ヶ月間は新潟大学が出身校でなければ、研修施設でもない私にとっては、新潟での大学院生活はすべてが新鮮で、あっという間でした。最近になって少しずつですが、生活に慣れ始

め、充実した日々を過ごさせて頂いております。

私が大学院進学を決めたのは研修医の時です。

「大学院」今思うと学生時代から漠然と頭の片隅にあったような気がします。ただその時は、専門性を持った勉強がしたいという思いだけで、大学院へ進学して学ぶとまでは考えておりませんでした。むしろ開業医に勤めることを思い描いていたと思います。それが、研修医時代に大学院出身の先生方の、高い専門知識や技術を目の当たりにし、自分自身もしっかりと勉強し、そのような歯科医師になりたいと思い大学院進学を決意しました。

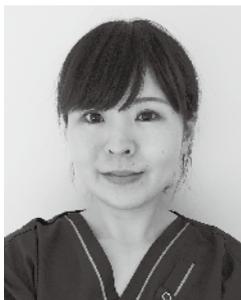
矯正学分野に進んだのは、学生の中から教科書に載っているような歯列が綺麗になっていくのを見るのが好きで、自分もそのような仕事をやりたいと思っていたこと、また顎変形症治療に興味があり学びたいと思ったためです。

入局してからは、自分の矯正の知識の足りなさや、矯正治療の難しさを日々痛感しておりますが、指導医や先生方のアシストをさせて頂きながら、1つ1つの症例や技術を丁寧に教えて頂き、日々勉強しております。また、分からないことがあればなんでも質問でき、どの先生も快く指導して下さるため学生実習の時以上に、楽しく矯正治療についての理解を深められております。

まだまだ若輩者の私で、今後大変なことがいろいろあると思いますが、それ以上に矯正歯科学を楽しみ、十分に学ばせて頂ける恵まれた環境にいることに感謝し、有意義で充実した大学院生活を過ごしたいと思っております。

入学者の言葉

新潟大学小児歯科学分野 鈴木 絢子



私は、“小児歯科”の専門性について、大学生時代には全く気が付きませんでした。

しかし、縁あって昨年10月に小児歯科学分野の大学院に入学し、考えが一転しました。子供は日々成長を遂げているため、口腔内

は診るたびに変化し、その都度判断が迫られます。タイミングを逃せば、う蝕の進行や不正咬合を引き起こしてしまいます。

また、精神的にも発達していくため、成長に合わせた対応が必要となります。一度できたことも気分によってはできなくなったり、診療は上手にできても味がするものが苦手な嫌がったりと様々なキャラクターがあり、そこに気付けるようになるにも経験が必要となります。さらに、大学病院に紹介される子供たちは一癖も二癖もある子、難病を抱えているような子は珍しくありません。全身的な管理を考えながら治療・投薬を行うこと、全身麻酔が必要になるケースは日常的にあふれていて、小児歯科に来て全身麻酔のOpe室に頻繁に出入りするとは思ってもいませんでした。

小児歯科の外来は常に子どもたちの泣き声は聞こえてきますが、同じくらい笑い声もあふれています。どんなに嫌がって治療しても、笑顔で帰る子供たちをみるととてもやりがいがあり、そこで生まれた信頼関係は堅い絆で結ばれていると感じております。

また、研究に関しては小児の口腔習癖の1つである、いわゆる“お口ぽかん”を解剖学的に解明していく予定です。このテーマは臨床的な面と基礎的な面の両方を兼ねそろえており、いずれは今後の小児歯科に役立てるような研究になるよう努力していきたいと思っております。

入学者のことば

口腔生命福祉学専攻博士前期課程

中川 雪人



この度、口腔生命福祉学専攻博士前期課程に社会人入学を致しました中川雪人と申します。私は長岡市にある高齢者の通所介護施設（デイサービスセンター）で生活相談員として働いております。福祉の現場で仕事をしておりますが、高齢者にとって口腔の健康状態がとても大切なことや、現場に入っているだけでは学べないことも

あると考え、もう一度勉強をしたいと考えるようになりました。そういった中で、どこの大学がいかと考えた結果、医療（歯科）と福祉が同時に学べる口腔生命福祉学専攻を選びました。

入学してから3ヶ月が経ちました。同期の方々は、私を除いて口腔生命福祉学科を昨年卒業しています。そういった中で、一緒に講義を受けていると歯科分野の知識に差があり圧倒をされています。しかし、そういったことをプラスに考えて、わからないことは色々教えていただこうと考えております。また、講義などで知りえた情報や知識は現場の職員にも伝えていき、自分自身だけではなく、他職員の資質向上に繋げられるようにしていきたいです。

私の目標の1つに社会福祉法人の経営があります。まだまだ先の話ではありますが、実際にどのように経営しているかを研究することで目標達成への1歩とします。また、世間では一部の悪質な社会福祉法人による内部留保の私的流用や虐待などの問題で社会福祉法人全体のイメージが悪くなっている現状があります。その世間のイメージに対して私はこの研究を通して社会福祉法人のより良い在り方を表していきたいと思えます。

この2年という短い期間の中で、課題や研究に精一杯取り組みたいと考えております。また、社会人なので仕事にも支障をきたすことのないように取り組んでいきます。まだまだ始まったばかりで苦勞も多くありますが、1つ1つの事柄が自分のプラスになると信じて進んでいきます。

入学者のことは

口腔生命福祉学博士後期課程 中田 悠



今年度から私は口腔生命福祉学博士後期課程に社会人大学院生として入学しました。平成21年3月に口腔生命福祉学科の2期生として卒業後、そのまま修士課程へ進学しましたが、2年間の修士課程修了後は経済的理由などから後期課程へは進学しませんでした。この度博士後期課程

へ入学することを決めたのは、現在勤務している環境が大きく影響しています。

現在、私は愛知県の病床数1,435床を有する藤田保健衛生大学病院で歯科衛生士として勤務しています。大学の附属病院ではありますが、歯学部がないため病院に入院するのは、ほとんどが医科の患者さんです。そのため歯科は医師から依頼のあった入院患者さんの口腔ケアや、全身麻酔手術を受けられる患者さんに対して周術期管理を行っています。特に近年は、手術件数が増加傾向にあるため周術期管理の依頼が多くなり、周術期の患者さんを診る機会が増えています。そういった患者さんと関わる機会が多いことから、周術期管理をテーマにした研究を行いたいと考えるようになりました。

現在の勤務先では歯科医師はもちろんのこと、歯科衛生士も同様に臨床と研究を両立していくことが求められています。そのため、これまで周術期患者や摂食嚥下訓練についての学会発表を行ってきました。また、看護師と協同した研究も実施しています。このような際、研究の進め方など修士課程で学んだ基礎を活かして日々なんとか乗り越えているのが現状です。今後とも研究への取り組みが必須であり、更に研究スキルを発展させていきたいと考え、博士後期課程に進学することを決めました。

これまで新潟大学歯学部の先生がたには非常にお世話になっていること、旧知の先生がたくさんいらっしゃって安心できること、帰省や友人に会うため新潟に行く機会が多いことなども、新潟大学への進学を決めた理由です。

これから3年間、社会人大学院生として仕事と勉強を共に頑張りたいと思えます。ご指導の程どうぞよろしくお願い致します。

入学を祝して



入学を祝して

歯学部長 前田 健康

平成28年度新入生の皆さん、入学おめでとうございます。新潟大学歯学部に入學された皆さんに、新潟大学歯学部の教職員を代表して、心からお祝いと歓迎の意を表します。厳しい入学試験を突破し、大学生活での新たな生活への期待に胸を膨らませていることと思います。また保護者ならびにご家族の皆様の方々にも心からお慶び申し上げます。皆様方のご期待にそえるべく、新潟大学歯学部でその能力をさらに大きく伸ばすことができるよう、私たち教職員も全力を尽くしたいと思います。

新潟大学歯学部は半世紀の歴史をもち、この歴史は在学生、全国各地で活躍している卒業生、教職員の努力の上に築かれてきたものです。歴史、すなわち伝統は安穩として築かれるものではなく、その過程には常に革新が必要とされています。すなわち、「伝統は革新の連続」です。常にチャレンジ精神をもつことが必要です。新入生の皆さんと新潟大学歯学部の新たな歴史の扉を開き、さらなる伝統を築き上げていきましょう。

歯学部設置前の昭和35（1960）年には男性65.32歳、女性70.19歳だった平均寿命が平成25（2013）年にはそれぞれ80.50歳、86.83歳となり、我が国は超高齢社会となっています。平成25（2013）年の高齢化率は25.1%（男性22.1%、女性27.8%）となり、平成72年（2060）年には39.9%に達し、2.5人に1人が65歳以上になるとの推計が出されています。従って、今までの歯科医療も健康者型から高齢者型への転換が求められ、また健康寿命の延伸が国家政策となっています。歯学への社会的要請として、「健康長寿社会実現への貢献」、「医療イノベーションの創出」、「国際的な医療課題の解決」が掲げられています。また本歯

学部の強みとして、「問題解決能力を持った歯科医師養成と国内外の人材養成モデルの構築」、「口腔のQOL向上を目指した基礎・臨床研究」、「有病・高齢者への対応や歯科再生医療の実践」があげられています。私ども新潟大学歯学部の教育スタッフは、課題探求・問題解決能力の育成を重視し、その後続く学習を通して、主体的に専門性を向上させる人材を養成することを目指しています。新潟大学歯学部の教育目標は、歯学・口腔保健福祉学の分野に貢献する専門職業人の育成で、この分野で活躍するためには国家試験に合格する必要がありますが、伝統的に本学ではいわゆる国家試験対策を行っていません。新潟大学歯学部では「学生自身が自ら学ぶ」ということを教育の柱としていますので、教育への学生の積極的な参加が求められます。高校までのspoon-feedingからself-cookingに転換する必要があります。また、歯科医療・口腔保健医療教育の集大成である臨床実習は、新潟大学医歯学総合病院を学びの場として、学生諸君が担当医の指導の元、診療参加・実践型の臨床実習を展開しています。ここで再度強調しておきたいのは、新潟大学歯学部の教育の主役は、教員ではなくて、学生諸君であるということです。自ら努力して勉強しなければ、皆さんが望む成果を得ることができません。皆さんと教職員が協働して皆さんの夢を叶えましょう。

厳しい国家財政の中、歯学部大型改修工事も昨年完了し、新たな教育環境で教育・研究が進められることとなっています。また、学生教育環境整備にも注力し、ファントム実習設備の整備、ハプティックデバイスによるシミュレーターおよび相互実習室の新設、学生診療用の歯科ユニットおよび補綴技工機の更新に代表されるように、各種

教材、教育機器の整備・充実にも努めています。これらの高度かつ快適な教育環境を積極的に活用し、自己の目標達成のために、切磋琢磨し、たゆまぬ努力をお願いします。

勉強の話ばかり致しましたが、20代前後のこの時期、勉強ばかりだけでなく、クラブ活動、ボランティア活動などさまざまな社会経験をし、歯学

部以外にも多くの友人を作り、教養のある社会人となるよう人間性を磨いてください。そして、社会の期待に応える医療人を目指し、これから充実した学生生活を過ごし、卒業時に、平成28年度新入生および保護者の皆様全員でまた朱鷺メッセで喜びを分かち合いましょう。





入学を祝して

新潟大学医歯学総合病院副院長 小林 正治

難関を突破され歯学部歯学科ならびに口腔生命福祉学科に入学された平成28年度新入生の皆さん、入学おめでとうございます。これからの歯科医療ならびに社会福祉を担うべく全国から集まってきた君達を心より歓迎いたします。

新潟大学医歯学総合病院は、医科と歯科のより緊密な連携による全人的医療の提供と更なる医療ニーズの変化に的確に対応することを目的として、平成15年10月に医学部附属病院と歯学部附属病院が統合して設置されました。本院は、特定機能病院として地域の中核的医療及び高度医療を担う医療機関であるとともに、医療に従事する者を養成する教育機関でもあります。その理念は、「生命と個人の尊厳を重んじ、質の高い医療を提供するとともに、人間性豊かな医療人を育成する」というものです。

君達は今、大学入学という1つの目標を達成しました。次に君達が目指す新たな目標を設定してください。君達の大多数は歯科医師や歯科衛生士、社会福祉士などのプロフェッショナルになるために、4年後あるいは6年後にそれぞれのライセンスを取得することを目指していることと思います。しかし、それもゴールではありません。さらにその先、君達には誰からも信頼される医療人になっていただきたいと願います。歯学部では、優秀な医療人を養成したいと考え、歯学臨床教育においても様々なプログラムを用意しています。

まず、君達は1年生の時から早期臨床実習として病院で実際の医療の現場に立っていただきます。ここでは、医療人になるための心構えを形成し、医療の本質である「患者さんの視点に立つ」という意味を実感していただく目的があります。また、見学実習を通して、医療行為に必要な知識や技量を観察し、これからの基礎歯学・臨床歯学学習に対するモチベーションを向上させ、医療人

としてのあるべき態度を肌で感じ取ってほしいと考えています。そして、口腔生命福祉学科では3年生の秋から、歯学科では5年生の秋からは本格的に臨床実習が始まります。新潟大学歯学部における臨床実習は、学生を担当医の1人と位置づけ、診療参加型で行われる点が最大の特徴であります。最近では、診療参加型臨床実習をさらに充実させるために、学生の経験や学習成果、指導内容の可視化を図るツールとして電子ポートフォリオを開発し運用するとともに、コンピタンスレベルを評価する新たなシステムを導入するなど、全国モデルとなる充実した歯学臨床教育を実施しています。是非、高い志を持って、学業に励んでいただきたいと思います。

また、課外活動にも積極的に取り組んでください。サークル活動やボランティア活動など、人との交流が医療人に不可欠なコミュニケーション能力を養い、人間としての成長にも大きく寄与します。歯学部にとどまらず、幅広い多くの友人を作ってください。そして、仲間と大いに食べ、大いに飲み、大いに語らって幅広い教養を身につけ、魅力のある人になってください。さらに、挫折を恐れずに様々なことに挑戦してください。挫折は、挑戦した人だけが味わえる特権です。また、心を強く豊かにするワクチンでもあります。信頼される歯科医師・歯科衛生士そして社会福祉士になるためにも、学生生活を通して心も鍛えていただきたいと思います。

新潟は、豊かな自然に囲まれ、食材の豊富さやその美味しさは目を見張るものがあります。また、様々な伝統文化も根付いた魅力ある街でもあります。君達が、新潟の地で楽しく充実した学生生活を送れるものと確信いたします。君達のこれからの活躍に期待しています。

口腔生化学分野担当教授の選考について

平成28年3月31日付で定年退職された織田公光名誉教授の後任として、英国・レスター大学講師・照沼美穂博士が選考されました。照沼先生は

九州大学歯学部卒業後、同大学院修了後、米国、英国で活躍されています。発令は平成28年8月1日付け。

歯学部50周年記念式典および祝賀会の開催について

歯学部では、学部創立50周年記念事業が7月16日に開催され、式典及び祝賀会が行われました。

歯学部は、昭和40（1965）年4月に日本海側唯一の国立大学歯学部として設置され、地域で活躍する人間性豊かな歯科医師をはじめとした高度専門職業人の養成、最先端の歯科医学・医療の研究開発とその臨床応用などを通じ、環日本海における歯科医学・口腔保健医療福祉をリードする拠点として実績を残してきました。

平成16（2004）年には超高齢社会を迎えるなかで必要性が高まっている「食べる」ことや口腔機能の維持向上という視点から保健・医療・福祉を総合的にマネジメントできる専門家を養成することを目的とした四年制の口腔生命福祉学科を設置し、現在では大学院口腔生命福祉学専攻博士前・後期課程が開設されました。

また、平成27年9月には約17500平米の総合研

究棟（歯学系）の大型改修工事が竣工するとともに、最先端の教育研究機器が整備されました。

記念式典には約120名が出席し、前田学部長の式辞に続き、高橋学長、寺門成真文部科学省医学教育課長（代理：島居剛志医学教育課副課長）、田口円裕厚生労働省歯科保健課長、北窓隆子新潟県副知事、五十嵐治新潟県歯科医師会長から祝辞が述べられました。引き続き祝賀会が行われ、篠田昭新潟市長、荒川正昭元学長の祝辞に続いて、下條文武前学長の乾杯で懇談に入りました。祝賀会では、新潟県三条市の無形文化財鋳起銅器玉川堂から創立50周年を記念した銘板の贈呈が行われました。参加者は有松同窓会長からの古い写真をプロジェクターに投影した歯学部のあゆみについての説明を懐かしみ、始終和やかに学部創立50周年を祝い最後に小林医歯学総合病院副病院長による挨拶で締めくくられました。



式辞を述べる前田歯学部長



参加者の方々からの鏡割り

歯学部銘板の寄贈について

歯学部創立を記念して、新潟大学歯学部銘板が歯学部50周年記念祝賀会にて玉川堂七代目玉川基行様より、寄贈されました。玉川堂は、日本の金属加工業者の1つで、日本国内の地場産業として有名な新潟県燕市の金属加工業の中でも唯一、1枚の銅板を鋸で叩き起こして銅器を製作する「鋸起銅器」の伝統技術を二百年弱に渡って継承している老舗企業です（ウィキペディア：<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%8E%89%E5%B7%9D%E5%A0%82>）。当主の玉川基行様がGコード科目「食べる」の講師を務められていることから、この度の寄贈となりました。「新潟大

学歯学部」の揮毫は花田晃治名誉教授によるもので、書の筆致が精緻に再現されています。



新潟大学歯学部創立50周年記念誌「21世紀は『食べる』時代 『食べる』を考えたことありますか」の上梓

歯学部創立50周年を記念し、「21世紀は『食べる』時代 『食べる』を考えたことありますか」を出版しました。この本は、歯学部が新潟大学のすべての学生向けに開講している教養科目（G

コード科目と呼んでいます）「食べる」の講義内容に加え、本歯学部の活動にご協力いただいている方々が新たに書き下ろしたものとなっています。この「食べる」の講義は野田 忠 新潟大学名

◆ ◆ ◆

誉教授ならびに花田晃治 新潟大学名誉教授のご尽力により開講され、開講以来、学生の高い人気と評価を得てきました。この記念誌は、「食べる」と食文化」、「新潟を食べる」、「食べるの科学」、「食べるを支える歯学」の4章から構成され、主として第1、2章では新潟地域で活躍されている方々に、第3、4章では新潟大学歯学部で教鞭を執っている教員に執筆をお願い致しました。新潟の多様な食文化とそれを支える方々のご活躍を堪能し、また歯学の新たな役割を理解できる内容となっています。



ハプティックデバイスを用いた シミュレーター機器の設置

本学歯学部では、診療参加型臨床実習の更なる充実に向けて、1年次における早期臨床実習から、各科の基礎実習、5年次の総合模型実習へと至る連続した臨床教育の充実を推進してきました。歯科医学教育においては知識の習得とともに、手技の修練が必要とされます。技術の習得と向上には反復練習が不可欠であるものの、高速切削器具を使用する際の安全性や、使用する機材の確保の点から、これまでは歯の切削を伴う技能系実習を早期に開始することは困難でした。今回導入したSIMODENT®（シモデント・デンタルトレーナー）は仮想現実（バーチャル・リアリティ）の技術を応用し、コンピューター上で歯の切削を体験できるシステムです。本システムは歯の切削感を忠実に再現するばかりでなく、ミラーを使用した鏡像の確認も可能で、一部の実習では切削の正確さを数値化して評価する事も可能となっています。本システムで使用されている技術はパイロット養成のためのフライト・シミュレータ等にも用いられているものであり、現実には危険を伴

う体験を仮想現実の世界において安全にかつ反復して行うことができる事が最大のメリットです。本システムの本格的な設置は国内初であり、診療参加型臨床実習へとつながる早期臨床教育の更なる充実とその波及効果が期待されます。



図1 シモデント 外観

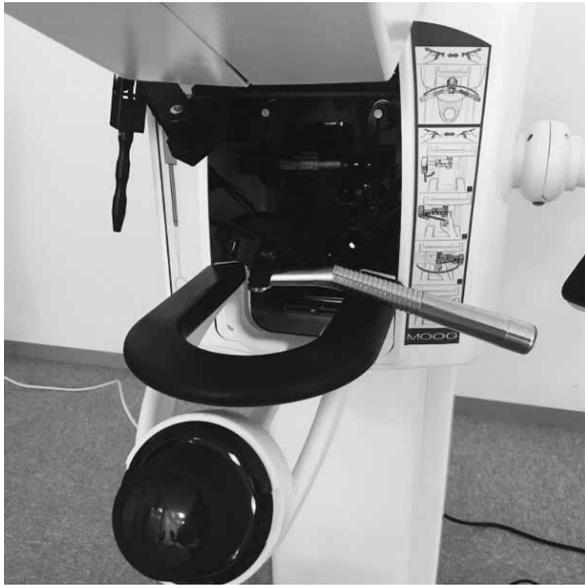


図2 シモデント 操作作用ハンドピース



図3 シモデント 作業画面

新潟高等学校特別講義の開催について

新潟県立新潟高等学校は、「歯学に関する専門知識を得、医療に関する視野を広める。最先端の研究や技術の息吹に触れ、学習意欲を高める」ことを目的として、「新潟大学歯学部見学」を実施しています。今回、平成28年8月3日に、同校理数科メディカルコースの高校2年生41名ならびに教諭2名が新潟大学歯学部を訪問しました。

歯学部長の前田健康教授の挨拶の後、微生物感染症学分野の寺尾豊教授による「口の健康と微生物学：観て考えて」、摂食嚥下リハビリテーショ

ン学分野の井上誠教授による「摂食嚥下障害とその治療」の2つの模擬講義が開講されました。また、新潟高等学校出身で新潟大学歯学部歯学科を卒業し、現在、臨床研修医として診療に従事している2名の若手歯科医師から、なぜ歯学部に進学したか、大学生活や将来の夢などについて話がありました。高校生たちは、講義や高校OBとの懇談を通して、自分の進路や適性について深く考え、将来、医療職を目指す気持ちを新たにしようでした。



平成28年度オープンキャンパスの 開催について

8月9、10日の2日間に亘り、全学主催のオープンキャンパスが開催されました。当日、33℃を超えるうだるような猛暑の中、県内外から280名の参加者がありました。小野学務委員長による挨拶、

全体説明のあと、泉入試委員長による入試説明、井上教授による模擬講義、卒業生による学部紹介、デンタルトレーナー体験等が行われました。



新入生合宿研修を終えて

歯学教育研究開発学分野 塩 見 晶

平成28年4月9日（土）、10日（日）の2日間、新年度のスタートにふさわしい満開の桜の中、新潟市西区赤塚のメイワサンピア新潟にて新潟大学歯学部新入生合宿研修が行われました。今年は、3年次編入生を含む歯学科44名、口腔生命福祉学科25名、学生アシスタント6名、教員24名、職員3名の参加となりました。この研修は、新潟大学歯学部に入學した新入生に対して、教員、職員、同窓生およびクラスの仲間との交流・親睦を図ることを目的として企画されています。昨年度に引き続き教員として2度目の参加でしたので、少し気持ちに余裕が持て、自分自身が新入生として参加した13年前のことを懐かしく思い出しながらの参加となりました。

初日はメイワサンピアに到着してすぐに集合写真の撮影をしました。入学式からまだ4日目のまだお互いの顔や名前がわからないなかで緊張しつつもみんな笑顔で写っています（写真1）。会場に移動して開会式が行われました。前田健康歯学部長挨拶に続き参加教員の自己紹介のあと、健康管理や歯学部のカリキュラムなどこれから4年間

もしくは6年間を送るにあたり必要な事項の説明がありました。その後PROGテストが行われ、1時間40分集中して回答していました。PROGテストとは知識の有無を問う従来のテストとは異なり、実際に知識を活用して問題を解決することができるか（リテラシーテスト）、実際にどのように行動するのか（コンピテンシーテスト）を測定し、自己理解を深めるものです。後日送られてくるフィードバックで自分自身では気付かなかった特性を発見し、今後の進路決定に役立ててもらえることを期待したいと思います。

その後、予め決められた8～9名のグループに分かれ、教員を含む参加者全員がネームプレートを作成し自己紹介を行いました。ニックネームで作成したことでだいぶ距離が縮まり、そのまま和やかな雰囲気ですぐに昼食休憩となりました。2年生の学生アシスタントもここから参加となり、この2日間のサポートを説明する頼もしい姿に、新入生にとっては1年後の目標として映ったのではないのでしょうか。



（写真1．集合写真）

昼食後は「砂漠で遭難したときにどうするか (NASAの問題)」という題目で、質問文の中の12の品物を重要だと思う順に並べ、グループ討論の後にグループ全体意見としての順位を決定しました。グループ討論では進行役を買って出るひとや自分が決めた順位を譲りたくないひと、なかなか意見を言えないでいるひとなど様々でしたが、討論が進むにつれみんなうまく他人の考えと自分の考え両方を織り交ぜて、最終的には班員全員が納得する順位を決定できていました。ほとんどの班で討論前の班員の平均点数よりも討論後の班の点数の方が高得点となり、自分1人で物事を考えるよりも他人と意見交換をすることでより良い結果を導き出せることを実感できたのではないのでしょうか。これからの学生生活でも生かしてほしいと思います。

アイスブレイキングが済んだところで「面接試験を再考しよう！」という題目で入試の面接試験の質問内容についての問題点と受験生の視点から見た適切な質問内容を検討しました。それぞれが印象に残っている質問内容を書き出し、仲間分けし、その理由付けをして発表プロダクトを作成す



(写真2. 自己研鑽セミナー)

る (K-J法) のですが、アイスブレイキングの効果でこのころにはもう自分の意見を言うことに躊躇する様子は見られず、発表も助け合いながら、堂々と話せていました (写真2, 3)。

夕食は学生アシスタントの2年生が準備してくれたくじ引きで席を決めたので、午後ずっと一緒だった班とは別の同級生と話す機会がもたれました。途中から学生による部活動紹介が始まりましたが、様々な部活の映像による紹介や実演、その後の勧誘と、部屋の温度が上がるくらい熱気に満ちていました。歯学部単独の部活だけでなく医学部や全学との合同の部活や国際交流サークルなど私が学生だったころよりもいろいろな部活があり、それぞれに魅力的でした。掛け持ちをしている学生さんが多いのもうなずけます (写真4)。

夕食の後は宿泊棟の一室で教職員との懇親会がもたれ、部屋に入りきれずにロビーまで使って、教職員や新入生同士で真面目な話から冗談話までざっくばらんに話をして、就寝時間ぎりぎりまで盛り上がっていました。

2日目は朝食後に学生アシスタントによるガイダンスとクラス幹事選出、教員から学生支援やセ



(写真4. 部活動紹介)



(写真3. 自己研鑽セミナー)



(写真5. BLS講習)

クハラ相談についての説明がありました。その後、麻酔科の先生方による一次救命処置（BLS）と自動体外式除細動器（AED）の講習会有り、新入生全員がマネキンを相手に人工呼吸や心臓マッサージ、AED装着の実習を行いました。1日目の「面接試験を再考しよう！」では面接内容で命を扱う職業に対しての自覚を問われる質問に戸惑いを覚えた新入生がいたようでしたが、この

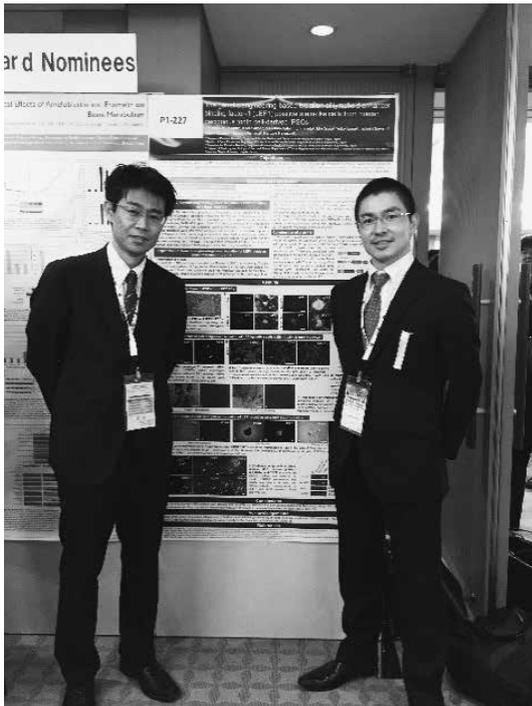
講習をきっかけに歯科医師や歯科衛生士、社会福祉士として医療に携わる心構えが芽生えたことと思います（写真5）。

小林正治副病院長と宮崎秀夫副学部長の挨拶で閉会式となり、2日間の研修が終了しました。今回の研修のようにこれからの学生生活でも互いに助け合い切磋琢磨し、充実した歯学部生活を過ごしてほしいと思います。



大学院に行こう

小児歯科学分野 村上智哉



2016年アジア小児歯科学会での学会発表

小児歯科学分野の村上智哉と申します。早いもので気づけば4年間の大学院生活が終わり、「大学院に行こう」の原稿依頼をいただきましたので、私の経験を交えながら大学院について述べさせていただきますと存じます。

私が新潟大学歯学部小児歯科学分野で大学院生活をはじめたきっかけは、ある「出会い」からでした。私の出身は福岡県であり、当初、歯学部を卒業した後は、地元で歯科医師として働こうと漠然と考えて研修医生活を送っておりました。もともと小児歯科に興味があり、鹿児島大学歯学部生の時には、小児歯科学分野で研究のお手伝いなどをさせていただきました。現新潟大学小児歯科学分野の准教授である齊藤先生にはその時に出会い、今でも日々お世話になっています。また、臨

床研修は小児歯科が学べる施設を選択し、その時期に現新潟大学小児歯科学分野教授の早崎先生に出会いました。このような流れの中で、さらに小児歯科について深く学びたいと思い大学院に進学することを決めました。

私が大学院に進学したとき、小児歯科学分野には社会人大学院生を含め4人が同時に進学しました。これはその年の全国の歯学部小児歯科の医局でもっとも人数が多かったようです。この同期4人がいたことは、私の4年間の大学院生活では、非常に重要であったと感じています。それぞれ違った研究テーマを持って研究を行っており、お互いの研究の進行状況や、悩みなどを研究の合間に話したりすることで解決策を見つけていくことができました。

さらに、他の大学院生との「出会い」もあります。学年を問わず、同じような研究をしている大学院生と研究会や学会でお会いする機会も多く、様々な意見交換ができるのも大学院の良いところだと思います。

大学院では、ある程度研究成果がまとまってくると学会発表を行うことが多いと思います。私の場合もそうであり、国際学会で発表をさせていただく機会もありました。そこでは、世界各国の研究者との「出会い」があります。自分と同じような研究を地球の裏側でも行っていることを知り、なんだか不思議な気持ちになったのを覚えています。

また、新潟大学歯学部では他の研究室との垣根が低く、私はいくつかの研究室に出入りさせていただきました。他の専門分野の先生方から、こころよく研究についてのアドバイスをいただきました。このように、大学院に行くと他分野の先生方

との「出会い」があり、研究を進める上でも重要であると感じました。

これまで、出会いのことばかり述べてきましたが、もちろん、大学院で一番大事なのは、自ら研究する姿勢だと思います。研究は大変な時もあるかと思いますが、世界で誰もやったことがないことを証明するという経験をするには、長い人生の中でかけがえのないことだと思いますし、チャレンジする精神が養われます。

大学院1年生のときは、研究のことはほとんど分からない状態でしたが、幸運にも大学院生の間

に小児歯科学会デンツプライ賞、新潟歯学会奨励賞などの賞をいただくことができました。これも多くの先生方や友人のお力添えがあったことだと感じています。また、大学院進学には家族の理解が必要であることも確かだと思います。大学院進学を後押ししてくれた両親には大変感謝しております。これから大学院進学を考えている方、大学院での出会いは、あなたの人生をさらに面白くしてくれるかもしれません。皆さん、大学院に行こう！！



大学院にいろいろ

摂食嚥下リハビリテーション学分野 酒井 翔 悟

「大学院」といえば、どのようなイメージをお持ちでしょうか。「研究をする」「研究者になるためのステップ」「博士号が取得できる」等、それぞれもたれているイメージは違うと思います。私がもっている「大学院」のイメージは、「自分の生き方の基盤をつくる過程」という言葉があてはまると考えています。

私は2011年3月に新潟大学歯学部歯学科を卒業し、新潟大学医歯学総合病院口腔リハビリテーション科・摂食嚥下機能回復部での研修を修了した後、摂食嚥下リハビリテーション学の大学院に進学して、摂食嚥下リハビリテーション学分野での研究生生活を送ってきました。2016年3月に4年間の大学院生活を終え、現在は口腔リハビリテーション科医員として、外来や病棟で摂食嚥下障害の臨床に従事しています。大学院に進学した当初、研究をしたい、将来は研究者になりたい、といった意思はもっておらず、ただ単に、研修中に経験した摂食嚥下リハビリテーションという分野をもう少し勉強したい、という考えしかありませんでした。

進学してしばらくすると、研究テーマを与えられ、そのテーマから抽出された様々な課題を解決するために動物実験を行う研究生生活が始まりました。右も左もわからない私に対して、先生方は大変熱心に、時に厳しく時に優しく指導して下さいました。次第に実験に慣れ、研究のデータ採取やそのまとめの技術を身につけることが出来、多くの学会発表を経験し、アメリカや東南アジアなど海外にも度々渡航する機会を頂きました。他大学の先生方と知り合いになったことも大学院に進学してよかったと思えることの1つです。学部学生の時のように与えられる授業を受け、実習をこなすのではなく、自ら考え勉強する習慣を身につけることが出来、とても充実した日々を送ることが

出来ました。

大学院生活を振り返ってみると、決して楽しいことばかりではありませんでした。日々の研究・臨床に加え、教育や研究に関する行事の補助、学会発表や論文作成の準備等に追わ



れ、時に逃げ出したくなる時もありました。しかし今となってはそのような様々なことに携わり、多くの貴重な経験が出来たことは、自分の人生にとってかけがえの無い財産になったと思っています。もし時間が戻ってもう一度人生をやり直すとしても、私は迷うことなく大学院進学を選びます。大学院での生活で得られた経験や知識はこれからの人生で必ず活用できる、自分の生き方の基盤になったと確信しています。

学位授与式で「大学院卒業は終わりではなく、これからの研究生生活の始まりである」というお言葉を学部長の前田先生から頂きました。その言葉を胸に、大学院生活で培った経験を生かし、今後も邁進していく所存です。

大学院進学は決してハードルの低いものではありませんが、もし少しでも進学したい希望を持たれている方がいらっしゃいましたら、私は胸を張って進学をお勧めします。他では決して得られない「生き方の基盤をつくる過程」を経験できるからです。

最後に、研究・臨床の両面でこれまで支えてくださいました、井上誠先生、辻村恭憲先生をはじめとした摂食嚥下リハビリテーション学分野の先生方に深く感謝申し上げます。

大学院に行こう

歯科矯正学分野 医員 大 倉 麻里子

歯学部卒業6年目の大倉麻里子です。歯科矯正学分野に所属しており、今年3月に大学院を卒業しました。「大学院に行こう」というテーマをいただきましたので、大学院へ進学した理由や大学院生活についてご紹介したいと思います。就職しようか、大学院へ進学しようか、進学するならばどの科にしようか迷っている学生・研修医の皆さんの参考になれば幸いです。

私は学生の頃から漠然とではありましたが矯正治療に興味がありました。ただ大学院については、歯学部卒業後、研修が終わってさらに4年間という期間を考えると躊躇する気持ちもありました。そこで、まずは半年間矯正のことを勉強してみようと思い、当院の歯科医師臨床研修プログラムBを選択し、研修医の半年間は矯正科でお世話になりました。しかし研修を通して、半年間だけでは矯正治療のことはわからないということを感じました。もちろん診断のための分析方法や基本的な治療の流れなどたくさんを学ばせていただきましたが、数年の期間を要する矯正治療を半年間見学しただけでは、矯正科の先生の会話にもついて行けず、理解するのが非常に難しく悔しい思いをしました。この時に「矯正治療についてもっと学びたい」という気持ちが強くなり、そのためには専門機関でしっかりとした教育を受け、自分も矯正治療を専門に行っていきたいと思ったのが、大学院進学を選んだ理由です。

歯科矯正学分野では、大学院生1人につき指導医がつき、セファロ分析や治療方針の作成、ワイヤーベンディング等の臨床テクニックまで、矯正治療に必要な基礎的な知識と実技指導をしていただきます。また、配当されたすべての患者さんについて指導医とともに治療方針を立て、毎週木曜日に行われる症例検討会に提出し、齋藤功教授を含めた医局員全員によるディスカッションを行う

ことで、患者さんにとって最良の治療方針を決定し、診療に向かうこととなります。さらにそれだけでなく、治療開始後は10か月ごとの口腔内写真チェックがあり、良かった点や改善点、今後の方針など指導していただきます。実際の私の大学院生活は、指導医の先生の診療見学、自分の患者さんの診療、診療が終わった後は技工室で予測模型や治療に使用する技工物の作製を行い、症例検討会や治療経過チェックの準備をする毎日の繰り返しでした。検討会では先生方も本気で意見してくださいますので、どの症例についても何時間もかけて考察し、毎回ものすごく緊張しながらプレゼンしたのを覚えています。毎晩帰りが遅くて肌がぼろぼろになりました。しかし大学という専門の機関でしっかりと全症例を指導していただく喜びは非常に大きく、またその治療方針にむかって試行錯誤しながら治療を進めていく日々は、とても充実していました。

大学院生活でもう1つの大切な仕事は研究です。私は「矯正的歯の移動と歯髄反応」をテーマにした基礎研究をしています。歯科矯正学分野の先生だけでなく、う蝕学分野の先生や硬組織形態



歯科矯正学分野の同期と（筆者は中央）

学分野の先生など、他分野のたくさんの先生に指導していただきました。このように基礎・臨床問わず様々な分野の先生の意見を聞きながら研究ができるのは、大学院生の魅力の1つだと思います。また、日頃臨床で疑問に思ったことを基礎研究に反映させて解析を行うことは、臨床講座ならでもであり、大学に残らなければ経験できないことだと思います。厳しい指導の下で実験し、実験データに一喜一憂しながら少しずつ解析を進めていく過程は決して楽なものではありませんでしたが、たくさんの先生方のご支援をいただき、無事

博士号を取得することができました。

大学院の利点は専門性の高い分野の臨床技術を磨くことができることと、自分が興味を持ったことについて研究ができることだと思います。もちろん授業料も期間もかかるので、良いことばかりではありませんが、自分のやりたいことや人生設計に、大学院の利点が一致するのであれば、大学院での4年間は必ず有意義な期間になると思います。学生・研修医の皆さんの悔いが残らない歯科医師人生を、心より応援しています。



学会受賞報告

2015年度日本歯科保存学会最優秀論文賞

2015年度日本歯科保存学会歯周最優秀論文賞を受賞して

新潟大学医歯学総合病院 歯周病科
新潟大学大学院医歯学総合研究科 歯周診断・再建学分野
久保田 健彦



このたび2015年度日本歯科保存学会最優秀論文賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。本学会は、1955年創設の歯科保存学（修復・歯内・歯周治療学）に関する歴史ある学会です。同

学会では2003年度奨励賞、2009年学術賞を頂き、今回優秀論文賞（歯周最優秀論文・KAVO DENTAL 賞）を頂きとても嬉しく光栄に存じます。

受賞論文は、“ホエイペプチド配合免疫調整流動食経口摂取が歯周炎患者における歯肉溝滲出液の炎症性サイトカインに与える影響”と題し、日本歯科保存学会雑誌 58（2）:109-116 2015, DOI: 1011471/shikahozon58.109に掲載されました。株式会社明治本部食品機能科学研究所及び本学予防歯科学分野との共同研究です。

歯周病は、罹患者が多い病気としてギネスブック認定され、超高齢化社会の現代において、咀嚼・会話・審美に不可欠な歯を喪失する最大の原因になっていますが、局所の細菌性プラーク・バイオフィルムが原因であることはもとより、近年全身の炎症との関連が注目されています。食品で

ある牛乳は栄養価が高く、様々な機能性タンパクが含まれていますが、中でも乳清タンパク質分解ペプチド（ホエイペプチド、whey peptide: WHP）の抗炎症作用が注目されています。

本論文は、WHPが炎症性サイトカインIL-6、TNF- α を調整し、全身的に肝炎や菌血症予防だけでなく歯周炎抑制にも有用であることを初めて報告したものです。詳細は、J-Stage: https://www.jstage.jst.go.jp/article/shikahozon/58/2/58_109/_article/-char/ja/をご覧ください。

歯周病研究は、1967年にブラークにより歯肉炎が起きることがわかってから、生体免疫応答・感受性遺伝子研究等大きく進歩しましたが、まだまだ我々が見ることができない未知の領域にあふれていることを実感します。

一方社会的には、超高齢化によりフレイル・要介護者が増える中、歯周治療も歯周内科的免疫賦活療法が注目されています。乳製品WHPは、抗菌薬と違い耐性菌や副作用の心配がなく安全なため、今後口腔・全身炎症性疾患予防に幅広く応用できると考えます。受賞にあたり、これからも微力ながら継続して歯周病研究の発展に精進する所存です。

最後に、共同研究者をはじめ関係各位に感謝して稿を終えたいと思います。有り難うございました。

受賞報告

高度口腔機能教育研究センター 前川 知 樹

このたび、2015年度日本歯周病学会奨励賞を受賞しましたのでご報告させていただきます。日本歯周病学会奨励賞は、歯周病学の発展に寄与する学術論文を発表した若手研究者を表彰することを目的として制定されたものです。

対象となった論文は、「Antagonistic effects of IL-17 and D-resolvins on endothelial Del-1 expression through a GSK-3 β -C/EBP β pathway」と題し、Nature Communications誌に掲載された論文です。本研究は、米国ペンシルベニア大学・Hajishengallis George教授、独国ドレスデン工科大学・Triantafyllos Chavakis教授との国際共同研究において、Del-1という分子に着目し、Del-1の制御メカニズムを血管内皮細胞を用いて明らかにしたものです。

Del-1は、血管壁を構成する血管内皮細胞が主に産生し、恒常的に粘膜や中枢神経系の炎症の発生と好中球の遊走を抑制しています。そのために、歯周炎や多発性硬化症などの炎症性疾患の新

しい治療薬としての適応が期待されています。そこで私達の国際研究グループは、どのようにDel-1を効率よく組織に誘導できるかどうかと考えました。炎症がおきている組織において、Del-1はほとんど産生されていません。IL-17というサイトカインが組織中で多量に産生されており、血管内皮においてDel-1の産生が制御されているためです。私たちは、IL-17が、Del-1の産生を転写因子C/EBP β を介して制御していることを分子生物学的手法によって証明しました。

受賞した研究は、私の約4年間の米国ペンシルベニア大学での研究の成果の1つです。留学は、国際的な見識を広めるとともに、世界をリードする最先端の研究に取り組めることも魅力です。

最後に、私の留学をリードしてくださった口腔保健学分野の山崎 和久教授と留学を温かく見守ってくださった高度口腔機能教育研究センター長の前田 健康教授、歯周診断再建学分野の吉江弘正教授、多部田 康一先生、微生物分野の寺尾豊教授にこの場をお借りして御礼申し上げます。



受賞報告

予防歯科学分野 佐藤 美寿々

平成27年6月に富山県歯科医師会館で開催された第26回甲信越北陸口腔保健研究会総会・学術大会において「地域在住高齢者におけるフレイル（虚弱）と現在歯数との関連についての横断研究」という演題で発表奨励賞を受賞いたしましたので、簡単な研究内容を含めてご報告いたします。

高齢化が進む中で、高齢者が要介護状態になる原因の1つに「フレイル」があります。今回我々は、地域在住高齢者における残存歯数とフレイルとの関連を明らかにすることを目的とした横断研究を実施しました。

本研究は2008年に新潟市で行われた口腔と全身の健康に関する調査に参加した79歳高齢者344人（男性177人、女性167人）を対象とし、口腔内診査、身体計測、健康状態に関する調査、健康行動・社会経済的状態等に関する質問紙調査を行いました。フレイルであるかどうかを目的変数とし、説明変数には現在歯数を用いました。性別で層化し、教育経験、喫煙状況、高血圧を共変量とするロジスティック回帰分析を用い、フレイルと現在歯数の関連について評価しました。

フレイルである人数は、男性と比べ女性が有意に多くなりましたが（ $p=0.02$ ）、これは現在歯数が少なく虚弱な男性の一部は今回の調査に参加できていない可能性が考えられます。また、女性において現在歯数が多いほどフレイルのオッズ比が低くなりました（調整済オッズ比=0.93、95%信頼区間=0.88~0.99）。本研究結果から、79歳高齢女性において現在歯数とフレイルの間に有意な関

連が認められ、高齢者において、健康な歯・口腔を保持することが虚弱予防に繋がることが示唆されました。今後も研鑽を重ね、より社会に貢献できるような研究を続けていきたいと考えています。

最後になりますが、宮崎秀夫教授を始め、いつも支えてくださっている全ての先生方にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

（写真）予防歯科の医局にて、学会に参加したメンバー（と石田陽子先生の息子さん）で。



2015年度JADR/GC学術奨励賞を受賞して

高度口腔機能教育研究センター 高橋直紀

この度、第63回国際歯科研究学会日本部会（JADR）学術大会におきまして2015年度JADR/GC学術奨励賞を受賞いたしましたので報告させていただきます。

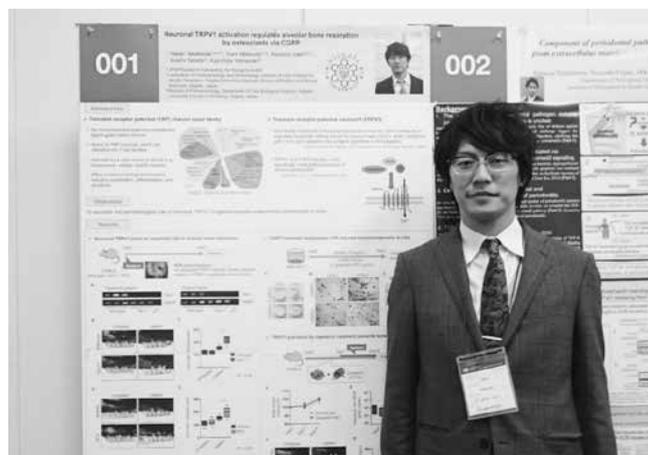
演題は「Neuronal TRPV1 activation regulates alveolar bone resorption by osteoclasts via CGRP.」という、神経組織に発現するイオンチャネルの活性化が歯槽骨吸収を抑制することを実験的歯周炎モデルマウスで明らかにしたものです。

近年同定されたTransient receptor potential (TRP) イオンチャネルファミリーは、温度や機械刺激、化学刺激により活性化される感覚センサーとして機能するユニークなイオンチャネルであることが知られています。その中で、カプサイシン・酸・熱により活性化されるTransient receptor potential vanilloid type 1 (TRPV1) は、神経組織をはじめとして多くの組織に広く発現しており、様々な疾患への関与も報告されていますが、歯周炎との関連はほとんど報告がありませんでした。そこで我々は、以前確立した歯周炎モデルマウスを用いて、TRPV1が歯周炎の病態形成に及ぼす影響の検討を行いま

した。その結果、TRPV1ノックアウトマウスは野生型に比較し、歯周炎が重症化することを確認し、それが神経に発現するTRPV1に依存的であることを明らかにしました。そのメカニズムとして、骨代謝に関連することが知られている神経ペプチドのひとつであるcalcitonin gene-related peptide (CGRP) に注目し、TRPV1の活性化によってされるCGRPが破骨細胞への分化を抑制的に機能することを明らかとしました。

歯周組織における「神経と骨のクロストーク」は歯周疾患発症のメカニズムを探る新しい概念となるだけでなく、TRPチャネルタンパクをターゲットした歯周病予防・治療の新規薬物の開発につながると考えられます。また、TRPチャネルタンパクは嚥下機能、味覚、知覚過敏症との関連が近年報告されていることから口腔機能におけるこのタンパクの研究の更なる拡がり期待されます。

最後になりましたが、本研究遂行にあたり、ご指導を賜りました新潟大学大学院医歯学総合研究科の山崎和久教授、吉江弘正教授、多部田康一助教ならびに御協力頂きました全ての先生方に心より感謝申し上げます。



受賞報告

小児歯科学分野・微生物感染症学分野 黒澤美絵

この度、2016年5月に東京で行われました第54回日本小児歯科学会大会にて日本小児歯科学会平成27年度デンツプライ賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。今回の受賞につきましては、私が大学院で研究し、学術論文として発表いたしました「*Streptococcus pyogenes* attenuates phagocytic activity of RAW 264.7 cells」が表彰されました。大学院4年間の成果をこのような形で評価していただけたことを、大変うれしく、また光栄に存じます。

論文では、*Streptococcus pyogenes* (小児に多発する咽頭炎の起因菌) が産生する毒素タンパク質・CAMP factorのRAW264.7細胞(マウスマクロファージ様細胞)に対する病原性について発表いたしました。CAMP factorがマクロファージに作用すると、細胞質内に大小さまざまな円形の空胞を惹起することを明らかにいたしま

した。また、CAMP factorは、マクロファージ細胞を傷害しないものの、細胞周期を停止させることにより細胞増殖を抑制すること、さらにマクロファージの主たる機能である貪食能を低下させることを確認いたしました。マクロファージに形成された空胞は疑似食胞であり、CAMP factorはマクロファージに対して貪食状態であると錯覚させることで、同菌の貪食を困難にさせるのではないかと推察しております。

今回の受賞を励みに、今後もより一層、研鑽を重ねて参りたいと思っております。最後になりましたが、ご指導いただきました微生物感染症学分野の寺尾 豊教授、小田真隆准教授、土門久哲先生、ならびに早崎治明教授をはじめとする小児歯科学分野の先生方に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。



受賞報告

大学院医歯学総合研究科顎顔面放射線学分野 小林 太一

このたび2016年6月18日から19日にかけて開催されましたNPO法人日本歯科放射線学会第57回学術大会におきまして、私の発表した「シェーグレン症候群の超音波診断基準に関する検討」が優秀ポスター賞を受賞しましたので、報告させていただきます。

シェーグレン症候群（以下、SS）は口腔乾燥等でQOLを大きく低下させる自己免疫疾患です。SSは進行性で、早期発見、早期治療がQOLや予後に重要ですが、厚労省で定める診断基準は唾液腺造影や唾液腺シンチが必要で被曝や痛みを伴います。被曝や痛みを伴わない超音波検査やMRI検査での研究もされていますが、明確な診断基準がありません。そこで今回、私は厚労省診断基準の唾液腺造影や唾液腺シンチを超音波検査に置き換えることを目標に、超音波画像装置を用いて、SSとそれ以外のドライマウスの唾液腺の器質的変化および酸刺激前後の血流変化を比較・検討しました。その結果、唾液腺内部の低エコー領域（リンパ球浸潤もしくは唾液腺内導管の拡張とされています）の最大径1.5mm以上をSSとすると非常に高い正診率となり、唾液腺造影と同等、唾液腺シンチより優れる診断精度になることが示されました。また、SS以外のドライマウスでは、酸刺激後の血流上昇がSSに比べ低いこともわかりました。

今回の結果から、我々は厚労省診断基準の唾液

腺造影や唾液腺シンチを低侵襲で低コストの超音波検査に置き換えることが可能と思われ患者の負担軽減に貢献できると考えています。また、更に検討が必要ですが、現在明確な診断基準のないドライマウスの原因診断の確立に向け今回の検討結果を生かしていければと思っております。

最後に、受賞にあたりご指導を賜りました林孝文教授、勝良剛詞先生ならびに医局の先生方、口腔リハビリテーション科の伊藤加代子先生にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。



米国ペンシルベニア大学への留学報告

高度口腔機能教育研究センター 前 川 知 樹

私は2012年3月からおよそ4年間弱の間に、米国東海岸ペンシルベニア州フィラデルフィアにあるペンシルベニア大学（University of Pennsylvania: 通称UPenn）に、前半はポストドクトラルフェローとして、後半は日本学術振興会の海外特別研究員として研究留学をしていました。フィラデルフィアはアメリカの東部に位置し、人口150万人を超える全米でも第4位の都市です。市内は電車、地下鉄、トロリー、バスと公共交通機関が充実しているためどこにでかけるにも困ることはありません。NYには車で1時間30分、ワシントンDCにも3時間で行くことができ日帰りで観光が楽しめます。またフィラデルフィアには、アメリカ4大スポーツである野球、アメフト、バスケットボール、アイスホッケーのチームがありスポーツコンプレックスにていつでも観戦が可能になっています。

私の所属していたUPennはフィラデルフィアの中心部に位置し、University Cityを形成するほどとても大きなコミュニティを作り上げています。創立は1740年でベンジャミン・フランクリンが創設者の1人であり、アメリカ合衆国東部の世界屈指の名門私立大学8校からなる連盟

（Harvard大学、Yale大学、Columbia大学、他）に所属しています。医科系はNIHから全米第2位の額の研究費（550億円）が与えられており、設備もすばらしく研究に関しても世界のトップクラスのラボを間近にみるができます。

私の所属するHajishengallis教授のラボは、免疫学、細菌学を中心として歯周病に関連した基礎研究から臨床応用にむけた研究まで多角的に行われています。私は、常に多数のプロジェクトを同時に進行していくことを念頭において研究をしてきました。海外での研究は、期間が限られているために、1つのプロジェクトが失敗しても次のプロジェクトが進行していれば、しっかりと結果を出すことができるからです。ラボで行ってきたプロジェクトは、プロバイオティクスによる歯周病の予防法の開発を元に、補体治療薬を応用した歯周病治療の開発、生体由来物質による骨の吸収と過度な炎症を抑制するメカニズムの解明でした。本実験では、歯周病治療をよりヒトに近い環境で試験をするために、米国内にある動物実験施設にてサルを用いていました。結果が良好だったために、大規模なサルの繁殖施設を利用した基礎と臨床の橋渡し研究（トランスレーショナルリ



Hajishengallisラボメンバー



ギリシャ人のボスHajishengallisとギリシャでの学会

サーチ)が必要と考え、フィリピン・タナイ市にある1万頭のサルを自然繁殖しているSICONBREK社に赴き、現地のコラボレーターとともに新しい薬剤の効果を検証しました。フィリピンのジャングル内での生活は過酷でしたが(話が長くなるのでまた機会があれば)、すべてのスタッフの研究に参加できるというモチベーションの高さと協力的な姿勢のおかげで素晴らしい結果を得ることができました。

日本では今、留学を志す人が少なくなっているといえます。英語が心配、生活が怖いという方もいるかもしれません。私も渡米した当時は、英語がまったく通じず、食事の注文や会計さえもできませんでした。最初の3カ月はストレスが多く、何度も帰りたと思いました。しかし、人生に1度のチャンスと考えなおし、結果、たくさんの方々の支えによって楽しいアメリカ生活を送るこ

とことができました。おかげでスクスクとお腹が育ちましたが…。加えて、留学することで世界から米国に集まる研究者と友達になる事が出来る上に、日本の同じ志をもった同志との出会いもあります。私は、フィラデルフィア日本人研究者の会の幹事をやっていました。そこでは、毎月文系・理系・企業を問わず海外で勉強したいという志をもった人たちの講演をお願いし、交流を深めてきました。フィラデルフィアで知り合った友達とは、いまでも連絡を取り合い、仲良くしています。ぜひチャンスがあれば実績と新しい出会いを求めて留学してみたいはいかがでしょうか。

最後にこのような貴重な機会を与えてくださった山崎教授、多部田助教はじめ研究室の先生方、ならびに留学を支えてくださった方々に御礼申し上げます。



マニラ中央大学の方々と食事

アメリカ留学報告

生体歯科補綴学分野 江口 香里

【はじめに】

2015年2月から2015年12月までの11ヶ月間、「官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム～」の支援を受け、アメリカ合衆国のノースカロライナにあるUniversity of North Carolina at Chapel Hill (UNC) 及びイリノイ州にあるUniversity of Illinois at Chicago (UIC) にVisiting Scholarとして留学する機会をいただきました。短い期間ではありましたが留学を通じて様々な貴重な経験をすることができました。この場をお借りして留学報告をさせていただきます。

【留学まで】

留学のきっかけは2014年の冬、歯学部国際担当もされている当分野の魚島勝美教授から「トビタテ！留学JAPANという学生対象の新しい留学支援制度が始まるのだが応募してみるつもりはないか」とのお話をいただいたことでした。

歯学部ニュースを読んでくださっている学生さんに広報を兼ねて簡単に説明させていただきますと、トビタテ！留学JAPAN（以下「トビタテ」という）とは、文部科学省が日本の若者の海外留学倍増を目標に開始した留学促進キャンペーンの

1つであり、政府だけでなく官民協働となって将来世界で活躍できるグローバル人材を育成することを目指して2014年からスタートさせた留学支援制度のことです。トビタテの最大の特徴は、返金が不要の奨学金が受けられるという事だけでなく、交換留学などの単位取得を前提としたアカデミックな留学でなくても支援を受けられる、留学プランを自ら自由に設計できる、留学事前事後研修が充実しているという事です。ですので、もし学生さんの中で海外留学に興味のある方がいらっしゃれば、ぜひ1度トビタテに応募してみることをお勧めします。

さて、留学についてこれまで具体的に考えたことなど全く無かった私でしたが、留学経験のある先生に話を伺ってみるとみな必ず「留学して良かった！」とおっしゃっていた事、当時私は色々な面でブレイクスルーの一手が欲しい！と強く感じていた事から、とりあえずトビタテに応募してみよう！と勢いに身を任せるような形で留学を決意しました。トビタテの採用が決定してからは留学の準備に追われ、これから約1年もの間日本を離れアメリカで生活するんだ…という実感も余韻も全く無いまま飛行機に乗り込んだのを覚えております。



写真1 アパートにて。ノースカロライナにはたくさんのお家が建っています。



写真2 チャペルヒルのメインストリート。素敵なお店がたくさん並んでいます。

【ノースカロライナについて】

ノースカロライナはアメリカ合衆国の南東部に位置する州です。留学先であるUNCは全米最古の州立大学で、ノースカロライナ中央部のチャペルヒルという都市にキャンパスがあります。また、チャペルヒルとその東に隣接するダーラム、州都ローリーの3都市を中心とした都市圏はリサーチ・トライアングルと呼ばれ、アメリカ東海岸を代表する高等教育機関や研究所が集中する世界でも有数の学術都市として知られています。実際、私が留学していた2015年にはUNCとダーラムにあるDuke大学から2名のノーベル化学賞受賞者が誕生しており、受賞会見をこの目で見る事ができ、私ももっと研究をがんばろう！と研究に対する良い刺激を受けることができました。治安が良く、気候が温暖な事から、チャペルヒルは全米でも有数の暮らしやすい街と言われており（田舎とも言いますが）、海外生活初心者の私にとっては非常に生活のしやすい街でした。



写真3 UNCでできた最初の友人と。自宅での誕生日パーティーに招待していただきました。

【留学生活について】

留学中はSchool of Dentistry Department of Prosthodontics Bone Biology and Implant Therapy LaboratoryのLyndon F. Cooper先生のもとでお世話になりました。前号の長澤麻沙子先生の記事でも紹介されておりますが、Cooper先生は我々と同じ臨床補綴家でありながら20年以上UNCにラボを構え基礎研究に力を注いでいらっしゃる方です。留学中は、IGFBP-3という蛋白質が骨形成に対してどのような機能を持つのか、ということに関して研究を行わせていただき、様々な研究手法を学ばせていただきました。研究に行き詰まるといつもの確なアドバイスや新しいアイディアを下さり導いてくださいました。そんなCooper先生が突然、ラボをシカゴに移す！とおっしゃった際には、状況が理解できず戸惑いを隠せませんでした。常に目標や向上心を持ち精力的に行動されるその姿に、強い憧れと尊敬を抱きました。

【シカゴでの生活】

「冬のシカゴに引っ越すなんて大変ね」。そのようなことを言われながらも新たな場所に希望を抱き帰国直前の2015年11月、私はシカゴへと引っ越しました。シカゴはアメリカでも3番目に人口が多い大都市で、日本の函館とほぼ同じ緯度に位置しています。ミシガン湖の影響を受け、冬は新潟以上に強く冷たい風が吹き荒れていました。引っ越し後は新しいラボのセットアップに携わらせていただきました。実験が一時的にストップしてしまったのは残念ではありましたが、異国の地での引っ越しやゼロからのラボのセットアップなどなかなか経験できることでもありませんので、非常に貴重な経験をさせていただいたと思っております。

【留学生活で学んだこと・得たもの】

今回の留学を通じて、私は、様々な国から渡米し研究や学問に励む研究者や学生、アメリカでポジションを獲得し様々な分野で活躍する日本人、様々な志を持って日本から海外へと飛び立つ他分野の大学生など、普段では交流し得ない方々と多

く知り合うことができました。また、トビタテの趣旨にもあるのですが、失敗を恐れずに興味を持ったことに対してはとりあえず飛び込んでやってみる！というチャレンジ精神も十分に培うことができたと思います。留学とは、未知なる体験の連続であり、新たな刺激をたくさん受けることにより、これまでよりも幅広い価値観や高い視野で物事を考え捉えられることができるようになり、研究者として技術や知識を習得し成長できるだけでなく、人として自分を成長させることができる場所だと感じました。

【最後に】

私の知る限り、新潟大学歯学部において大学院在籍中に留学したという話はあまり聞いたことが無く、非常に稀なケースであったのではないかと

思います。また、大学院4年生という学位論文をまとめなければならない大変な時期に敢えて指導教官の元を離れるということで、今思い返せば我ながらすごい留学計画だったなと思います。そのような状況であったにもかかわらず留学することを快く許してくださった魚島教授、留学への背中を押し、留学中も常に厳しく時にやさしく指導してくださった秋葉陽介先生、生体歯科補綴学分野の先生方、新潟大学留学交流推進課の方々に、この場をお借りし厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。留学から学んだことや経験を今後の研究や臨床に活かすことにより、不在中に御迷惑をお掛けした魚島勝美教授をはじめとする当分野の先生方に少しでも恩返しできればと思っております。



写真4 ノーベル化学賞を受賞されたAziz Scancar氏（UNC）とPaul Modrich氏（Duke）。



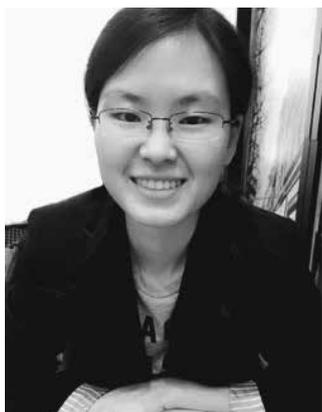
写真5 UNCのFooding ceremony。改めてPh.D.を取得することの意義を感じる、非常に感慨深いものでした。



写真6 冬のシカゴのDowntown。クリスマスの時期であったため、イルミネーションで街中が輝いていました。

人生旅の途中

歯周診断・再建学分野 車 玉 蘭



皆様、こんにちは、はじめまして。

大学院2年生の車玉蘭です。地元は中国の黒龍江省牡丹江市、出身大学はハルビン医科大学です。牡丹江は中国で「雪の里」と呼ばれ、ハルビンは「氷の城」と呼ばれる四節分明の美しいところ

です。皆さん機会があればぜひ観光に来て下さい。寒がりの私ですが、このような雪と氷の町で生まれ育ちました。最初は新潟県県費留学生として新潟へ来ました。歯周診断・再建学分野の研究生として1年間留学することになって、歯周科が大好きになって2014年4月大学院生として入学しました。2年目になって、時間があつという間に過ぎていき、やりたいことが沢山あつて時間が足りないくらい充実しています。この2年間の生活を有意義に過ごす事ができて、いろいろな人に出会って、今まで体験した事の無い事をたくさん体験して、

昔はテレビでしか見る事のできなかったものを自分の目で直に見る事ができ、研究についても広い視点で考えることができ、自分にとって大変貴重なものとなりました。今後も日本の先生方と学生さん達と一緒に色々ないい思い出を作ることができたらと思います。

中学生の頃から日本語の勉強を始め、ずっと日本に興味をもっていました。日本での生活は充実しており、新鮮で、楽しいこともたくさんあった反面、新潟に来たばかりのころ、困ったことも決して少なくはありませんでした。でも、指導医の杉田先生から研究や臨床などの多くの事をご指導頂けていると同時に、生活の面でもお世話になっています。また、同じ班の花井先生と黒木先生には、困った事があれば助けてもらい丁寧に接して頂き、非常にささいな問題であっても、医局の先生方が非常に熱心に教えて、支えてくださります。人生は一期一会と言っても、人と人の縁が結ばれそれは一生の宝です。私はこの宝を胸に秘め毎日感謝の心で一步步新潟の生活を楽しんでいきます。

歯周科の一員として、臨床を経験しながら毎日



写真1 牡丹江の「雪郷」



写真2 ハルビンの「冰雪大世界」

新たな発見をしたり、現場で行われる“医療”を肌で体験しています。よい歯科材料、細かい技術だけでなく、スタッフ全員が親切に温かく患者さんに接し、治療に関しても丁寧に説明をして、計画的、また的確に治療をしたり、ユニットも洗面場等もいつもきれいであり、チーム医療などにも本当に感心しました。

最近、歯周病と全身疾患関連報告の増加に伴い、実際の治療だけでなく免疫と代謝による遺伝子関連性を解析することを通して研究の重要性を感じています。私は、杉田先生の班の一員としてMAEA、SIRT1、GLIS3などの遺伝子の多型による生物学的機能差が歯周炎および全身疾患に影響する研究を進めています。5月に鹿児島で開催された日本歯周病学会で初めて英語で口頭発表をして、沢山質問されてとても緊張しました。また、6月にソウルで開催されたIADRでポスター発表し、世界中の人との交流でき、大学院ならではの大変貴重な体験もさせて頂きました。基礎研究を絶やさず医学の進歩に貢献し、未知の疾患に挑戦する、私の理想とする歯科医師像を目指して頑張りたいと思います。

今回の留学経験は私の今後の生活に大きな影響を与えるものと感じています。自分でも驚くほど充実した生活をしていて、歯学を学ぶことが楽しいと感じています。また、自分の人生は自分の力で切り開いていく必要があると痛感しました。どん

なに辛くても、頑張っていればきっといいことがあると信じています。今回の留学は私の人生における最高の宝物になると感じています。

最後に、日頃から指導してくれる先生方にこの場を借りて心より厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。



写真4 第59回日本歯周病学会2016年度春季学術大会で杉田班



写真3 平成28年度日本歯周病学会で発表している様子

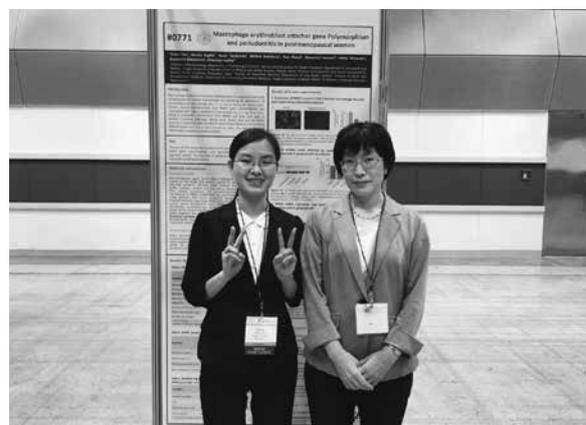


写真5 2016 IADRソウルにて

教授に就任して



教授に就任して

新潟大学 医歯学総合研究科 口腔生命科学専攻
口腔健康科学講座 う蝕学分野 教授
野 村 由一郎

新潟大学歯学部の関係各位におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

この度新潟大学歯学部う蝕学分野（旧：歯科保存学第一講座）の教授を拝命し、本年4月1日より着任いたしました、野村 由一郎（のいり ゆういちろう）です。よろしくお願ひ致します。初めに、このようなご報告とご挨拶の機会を与えて頂きました新潟大学歯学部の関係の皆様へ感謝申し上げます。

まずは、自己紹介を交えて私と新潟との関わりをご紹介いたします。私は、平成元年3月に徳島大学歯学部を卒業いたしました同学部の7期生です。学生時代は歯学部のバレーボール部とラグビー部を兼部しておりました。本職はバレーボールですが、部員不足の折オールデンタル出場を目指すラグビー部にも毎年9月から12月の間のみ身を寄せておりました。其の甲斐あって、私はオールデンタルに11回出場させて頂きました。6年間で2度ほど、血尿も出しましたが…12回でない理由は、5年生のラグビーのデンタル出発の前日練習中に骨折し、泣く泣く出場をあきらめました。6年生の12月30日まで地元徳島開催のデンタルに出場し、全国3位になったのは今でも良い思い出です。そのせいか、1月に行われた国家試験の模試では、徳大の後ろから1割内に位置していました。当時は、3月に国家試験があり、今より時間があつたため、体力に物を言わせて頑張り、国試も無事合格しました。今の、学生さんには決して模範になる生活を送っておりませんでした。絶対にまねはしないでください。時代が違います。一

方、この課外活動が私と新潟を初めて引き合わせました。丁度30年前ラグビーのオールデンタルが新潟で開催されたのです。当時フェリーと特急を乗り継ぎ10時間程度かけてたどり着いた覚えがあります。創部以来デンタルで未勝利であった徳大歯学部ラグビー部は16名の寄せ集め集団で初勝利を目指しました。くじ運がよく、1回戦の対戦相手は15名に足りていませんでした。危なげなく1回戦を突破した勢いで2回戦準々決勝と勝ち進みました。我々も負傷者多数になり準決勝を棄権するか否か、聞いて回られた当時のキャプテンを今でも覚えています。旅館の予約は、2泊3日しかなく、結局ベスト4という成績と20~30万の借金を残し初めての新潟を後にしました。次年の夏には私が主将としてバレーボール部が新潟を訪れましたが、6戦全敗の散々な成績でデンタル新潟シリーズを終えました。バレー部は、私が卒直後より3年間、初代監督として同行し、連続準優勝を成し遂げ、その後の栄光の歴史への一步を刻みました。またその時代に知り合った女子マネージャーのひとりと後日結婚し3人の子供を授かりました。4年前、マイアミの学会中に脳梗塞で倒れ、当時半身不随に近い私を1人で地球の裏まで迎えに来てくれたかけがえのない大切な女性（ヒト）です。私の足跡をたどるに、原点である徳島の学生時代を抜きにはできませんでしたので、長々とプライベートまでご紹介しました。

平成元年に徳島大学歯学部を卒業後、平成8年10月まで、徳島大学歯学部歯科保存学第一講座に在籍しておりました。元々は、一診（新大では総

診)時代に担任の先生(故 内田昭次教授)に入局を勧誘されたのがきっかけでした。その先生が一診(総診)の12月に急逝され、教授不在の弱小教室に入教室することとなりました。その後、平成2年の2月より同講座を主宰されました恵比須繁之教授(前大阪大学副学長・前大阪大学大学院歯学研究科 歯科保存学教室 教授)と巡り合ったことが、生まれ故郷の大阪大学でお世話になるきっかけとなりました。私の入局当時の徳島の教室員は10名不足でしたが、恵比須先生が阪大に移動される平成8年当初には20人半ばまで増え、徳島大学歯学部講座内でも有数の機動戦隊と姿を変えておりました。その間、歯科臨床・教育そして研究の3本柱をバランスよく行うことが、臨床系教員の責務であると叩き込まれました。プロ野球でもトリプルスリー達成の困難さが昨今話題となっておりますが、臨床系教員は、どれ1つが欠けても問題であり、新潟大学でも、バランスの取れた人材を輩出し、後継者の育成に注力しようと思っています。

研究面では、恵比須先生のライフワークでありますデンタルプラーク(デンタルバイオフィルム)研究に傾倒し、徳島では、歯肉縁下バイオフィルムを、大阪では感染根管関連バイオフィルム(特に根尖孔外バイオフィルム)の研究を、ここ新潟では講座名にもなっております、う蝕(特に根面う蝕)関連バイオフィルムの研究を展開しようと考えております。これで保存領域のバイオフィルムを制覇することになるのではと考えています。学会のシンポジストとしての4度の講演に招待を受けた内、2回が新潟開催であったという縁も感じています。

臨床面では現大阪大学大学院歯学研究科 歯科保存学教室教授林 美加子先生や現大阪大学歯学部附属病院 臨床教授木ノ本 喜史先生(徳島大学歯学部非常勤講師)等のレベルの高い臨床家の先生方と一緒にできたことが私の臨床の糧となっています。徳島時代に、人員不足で1年目から圧倒的な数の患者様を診察して、ある程度の手技・

手法を確立し、大阪大学での19年半の中で、その理論的・科学的バックグラウンドを構築するとともに、アドバンスな臨床に触れたことで、簡単には崩れない臨床を培えたと考えています。新潟では、先代の教授興地 隆史先生(現東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 口腔機能再構築学講座 歯髓生物学分野 教授)が築かれたモダンエンドの臨床を新潟全域に定着するよう努めるとともに、保存修復学の領域も含めた新たな治療法や治療薬の開発にも積極的に挑み、高度先進医療の実践にも取り組んでいこうと考えています。

教育面では、新潟大学歯学部は、平成27年に文科省の教育認証評価のトライアルを既に終了した教育先進国です。これは、現新潟大学歯学部長前田健康先生をはじめとする、先人の先生方のご努力の結晶だと推察しています。阪大も徳大も幽霊屋敷化した校舎で学生が講義や実習に励んでおりますが、此処新潟では本年3月にリニューアルも終了し、真っ新となった校舎に設置された数々の最先端・最新鋭の設備・機器の中で、才能あふれる学生達をどのように教育すれば一番良いのか思案に暮れています。充実したのはハードだけで、ソフトは開発途上だと素見されないように、学生諸君の気概を失墜させることがないように、謙虚にそして貪欲に教育して参りたいと考えています。改装については、今年の3月号の歯界展望の巻頭企画“教育研究環境整備と充実—新潟大学歯学部の取り組み—”をご覧ください。

3校目の大学ということで、移動の戸惑いはそんなに感じておりません。単身赴任の戸惑いはございますが、3名の阪大出身の先輩教授が在籍していることも大きな力になるでしょう。前田先生からは、野杵は徳島から来てもらったと言われ、モチベーションの高まりを感じるるとともに、気負いもなくなりました。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう何卒よろしくお願ひ申し上げますとともに、新潟大学歯学部および関係各位の更なる発展を祈念して、就任のご挨拶とさせていただきます。

インプラント治療部

新潟大学医歯学総合病院 インプラント治療部 部長 魚島勝美

1. はじめに

新潟大学病院にインプラント治療部が発足して10年が経過しました。1997年7月、それまで診療室毎に独立して行っていたインプラント治療を統括する形で、歯学部附属病院にインプラント診療班運営委員会を設置し、その下で形式的にインプラント外来が設置されています。本邦で現在主流となっている純チタン製のインプラントが使用され始めたのが1985年頃ですので、それから約10年後のことでした。当時は積極的にインプラント治療を行っていた冠ブリッジ診療室が中心となってインプラント外来を運営していましたが、未だ患者様のフォローや治療成績に関するデータの蓄積等に関しては、個人レベルで管理されており、大学病院としての機能が十分に果たせていたとは言い難い状況でした。そこで、2006年4月に歯学部附属病院の専門外来として、専任スタッフを配置する形でインプラント治療部が発足しました。皆さんで存知かもしれませんが、本邦ではこの30年間にインプラント治療は爆発的に普及し、今では歯科治療のオプションとして広く認知されています。本来であれば、他の診療科と同じく専任のスタッフが10名近くいてもおかしくないほどの診療業務があるのですが、現在のところ治療部専任は講師（病院准教授）の星名秀行と医員3名および研究生1名のみです。他に、他診療科に所属する兼任部員が私を含めて7名おり、それぞれの専門診療の傍らインプラント治療に携わっています。本稿では、当インプラント治療部をご紹介します、私たちが何を目標にどのような活動をしているかをご理解いただき、ご指導、ご鞭撻を賜りたいと思います。

2. 治療部のスタッフ

部長・教授 (兼任)	魚島勝美 (冠・ブリッジ診療科)
副部長・病院准教授 (専任)	星名秀行
副部長・教授 (兼任)	藤井規孝 (歯科総合診療部)
部員・教授 (兼任)	小林正治 (口腔再建外科)
部員・准教授 (兼任)	荒井良明 (顎関節治療部)
部員・講師 (兼任)	久保田健彦 (歯周病科)
部員・講師 (兼任)	田中裕 (歯科麻酔科)
部員・病院講師 (兼任)	櫻井直樹 (義歯診療科)
部員・医員 (専任)	山田一穂
部員・医員 (専任)	植松晃也
部員・医員 (専任)	清水太郎
部員・研究生 (専任)	小川信

前述の通り、治療部員は兼任部員を含めて12名ですが、実際にはその他にも多くの病院スタッフがインプラント治療に携わっています。



スタッフ写真：インプラント治療部の専任部員
左から植松、星名、魚島（兼任）、山田、清水、小川

3. 診療業務

インプラント治療部では毎日新患を受け付けています。治療部発足直後には年間200人を超える患者さんがいらっしゃいましたが、ここ数年は平均して年間130人程度の患者さんを受け入れています。これらの患者さんのうち、約76%が院内、院外からの紹介で受診されています。しかしながら実際にインプラント治療を行う患者さんは毎年100人程度で、インプラントの本数にして200本程度です。つまり、インプラント治療を希望して来院される患者さんの中には、何らかの事情でインプラントができない方、インプラントを用いなくとも十分に機能回復が可能な方がいらっしゃるということです。ここで重要なことは、歯がなくなったところを何らかの形で補い（補綴と言います）、機能回復を図るにあたって、必ずしもインプラントが最も適しているとは言えないということです。インプラントは顎の骨としっかりと結合し、自分の歯以上に咬めるようになるという点

で、非常に優れた治療法です。しかし、無くなった歯の両隣の歯を削って固定するブリッジや、取り外しの入れ歯でも、十分に違和感なく長期に機能が回復できることもあるのです。私たちは、患者さんの年齢、咬む力、残っている歯の状態、失った歯の部位、顎の骨の量と質、かかる費用などを慎重に検討して、それぞれの患者さんに最も適した治療法を選択するように努めています。そのために、治療部では毎週1回、木曜日の17:00から、インプラント適用を考えているすべての症例について、多くのスタッフが参加する症例検討会を行い、ここでの合意形成が本院におけるインプラント治療には必須となっています。この検討会は広く院内に開放しており、場合によっては院外からの参加も認めていますので、学生さんも含めてインプラントに興味がある方は是非ご参加下さい。場所は少し分かりにくいので、治療部スタッフに聞いていただければ結構です。



インプラント症例検討会の様子

現在主に用いられているインプラントは純チタン製で、表面に細かい凹凸があるものです。このタイプのインプラントが本邦で本格的に用いられ始めたのは30数年前のことで、当時は患者さんの骨の量や高さ、厚みがインプラントを埋め込むのに十分でない場合にはその適用を断念していました。しかし、近年では自家骨移植によって、当初骨がない場合でも、その場所に骨を作ってからインプラントを埋め込むことができるようになってきました。以前は「骨があるところにインプラントを植え込む」という発想でしたが、近年では「歯を作る必要があるところの直下にインプラントを埋め込むために、必要な骨を作る」という発想になっています。骨移植の手術はほとんどが入院下で行われますので、近年ではインプラント治療部が受け入れる入院患者さんの数が増加しています。

インプラント治療は顎の骨に穴を開けて、チタン製のネジを埋め込み、骨と結合したネジに土台を立てて、入れ歯や冠を作る、とても難しい治療です。したがって、これを適切に行うためには、十分な外科的技術のみならず、一般的な歯科治療

の技術やインプラントをいかに適切に用いるかに関する知識と見識が求められます。患者さんにとっては肉体的にも、経済的にも、場合によっては精神的にも非常に大きな負担となる治療だからです。すなわち、インプラント治療を適切に行えるようになるためにはそれなりの訓練が必要になります。本院インプラント治療部は、公益社団法人日本口腔インプラント学会が認定した研修施設ですので、本院で一定の訓練を受け、要件を満たせばインプラント学会が認定する専門医になることができます。そこで、本院ではインプラント治療の訓練をしっかりと行うことができるように、当治療部発足当初から院内の認定制度を設けています。訓練を希望する歯科医師は登録の上、所定の要件を満たすために上級医の指導の下に診療を行うこととなります。具体的には、登録医、担当医、認定医、指導医という4段階の認定制度で、登録医は指導医の指導の下に必要な症例を経験し、院内認定委員会で認められれば担当医になって、自らが指導医と一緒に手術を行うことができます。また担当医として一定の経験を積み、認定されると認定医となって独立してインプラント治療がで

きるようになります。この院内の制度は対象を限定していませんので、院内でインプラント治療を行いたい歯科医師は誰でも登録することができます。

本院でのインプラント埋め込み手術は、病院全体の中央手術室もしくは外来棟5階の歯科専用外来手術室で行います。この手術は、一般の外科手術と同じように完全な設備と装備の下で、清潔に行われます。我々術者は滅菌の手術着と手袋をして手術に臨みます。この手術は、場合によっては学生さんにも見学していただくことが可能ですので、希望する方は相談して下さい。一般的に本院ではインプラント埋め込み手術は、歯科麻酔科の管理の下で行うことが多く、点滴をしながら、半分眠った状態（沈静法と言います）で行いますので、患者さんにとっては非常に楽な手術です。



中央手術室での静脈内沈静法を用いたインプラント手術

一方、インプラントは埋め込めば終わりではなく、重要なのはその後を作る冠や入れ歯でしっかり咬めるようにすることです。ですから、治療部のスタッフは手術だけではなく、インプラント以外の歯の治療も含めて多くの外来診療も行っています。外来棟4階の歯科の一角は治療部のスペースで、毎日専任スタッフが治療をしている他、兼任部員は自分が所属する診療科において一般治療と平行してインプラント治療も行っています。

4. 研究

インプラントに関する研究の歴史は長く、多くの成果が得られています。しかしながら、本邦での問題は、臨床データが不足していることです。世界的には近年インプラント埋め込み20年後のデータが発表され始めました。20年経っても、適正にインプラントを用いれば90%以上が使える状態にあるとされています。残念ながら本邦では未だ20年経過後のデータが少なく、いわゆる欧米人と根本的に骨格が異なり、インプラントにとっては非常に厳しい日本人に対するインプラント治療のデータが必要です。ですから、当治療部では、発足当初からすべての患者さんの細かいデータを蓄積しています。今後はこのデータを分析・発表するとともに、更なるデータの蓄積に努め、臨床研究を行っていく必要があります。また、インプラント治療は純チタン等の人工材料を骨に埋め込む治療であることから、生体における様々な反応について基礎的な研究を行い、その生物学的な背景を解明する必要もあります。現在は当治療部が臨床の一部門に過ぎないために、このような基礎研究を行う環境や予算、スタッフが十分ではありません。したがって、このような基礎研究は、治療部に参画する兼任スタッフが所属する大学院組織で行っており、今後もインプラント治療の改善に資する研究を続けていくつもりです。

5. インプラント治療部が抱える問題点

これまでも書きましたが、現在が一番の問題はスタッフ不足です。インプラント治療の目的は、歯を失った患者さんに人工の歯を作って良く咬めるようにすることです。したがって、一度インプラント治療を始めたなら、その患者さんが必要とする治療は、インプラント治療に限らずすべて平行して行うこととなります。インプラントの埋め込み手術自体は半日もあれば十分にできることですが、その患者さんが問題なく咬めるようになるための口の中全体の治療には膨大な時間がかかります。なおかつ、インプラント治療は、患者さんが生きてそのインプラントを使っている限り、

永久に慎重なメンテナンスが必要となる治療ですから、各スタッフが担当する患者さんの数は増える一方です。現状では、他の診療所や院内他科との連携で何とかやりくりしていますが、今後はそれも困難になる可能性を孕んでいます。

インプラント治療部の運営に関する予算不足も深刻です。インプラント治療には多くの器具・器材が必要で、これをまかなうためにはそれなりの経費がかかりますが、残念なことに、病院全体の予算が厳しい昨今、十分な予算措置がされているとは言えません。患者さんにご迷惑をかけることが無いよう、今後も治療部の円滑な運営に努力して参ります。

6. 今後について

インプラント治療の目的は、患者さんのQOL

の向上です。そして、インプラントは適切に使用すれば、とても素晴らしいオプションとなります。ところが、少しでもインプラントの使用法を間違えると、却ってQOLを下げる結果となる非常に難しい治療でもあります。おかげさまで、インプラント治療部は発足後10年を迎えることができました。これからは、本院におけるスタッフの一層の充実と、予算獲得、研究環境の整備などに力を注がなくてはなりません。今後もより良いインプラント治療を提供するために、治療部スタッフ一丸となって努力を重ねて参りますので、どうか皆様の一段のご助力と、ご指導・ご鞭撻をお願いいたします。



高度口腔機能教育研究センター

センター長 教授 前田 健康

高度口腔機能教育研究センターは平成27年度文部科学省特別経費として採択された「ネットワーク型教員組織の構築によるレジリエンスな教育研究拠点の形成」により、平成27年4月に設置されました。平成28年度からの第3期中期目標期間を見すえ、歯学部、医歯学総合研究科口腔生命科学専攻・口腔生命福祉学専攻の機能強化を図る上で、①若手人材の登用難をはじめとする教員組織の硬直化、②現行の講座制では学際的な教育・研究には対応が難しいこと、③歯学に対するニーズは多様化していること、④大型研究費獲得に向けた共同研究体制の整備が遅れていること、⑤高等教育の質保証、歯学教育の国際標準化の流れの中でのアイデンティティーの確立、といった点が課題としてあげられていました。また、超高齢社会を迎えた我が国で、歯学分野は口腔機能の維持あるいは回復という重要な役割を担っていますが、各教育研究分野では独自の研究成果を生み出しているものの、シームレスな環境で切磋琢磨する競争的環境下での共同研究体制は確立されていないという課題があります。これらの課題解決には新たな人事制度等の改革を行い、教員組織の活性化を図り、機能強化に向かう必要があると考え、文部科学省との折衝の後、概算要求で採択され、歯学部の機能強化の方向性に合致したプロジェクトの一環として設置されました。

高度口腔機能教育研究センターは若手人材を中心に学際的、異分野融合の教育・研究をプロジェクト主導で推進することを目的としています。また、平成27年9月完了の総合研究棟（歯学系）の

大型改修工事により、歯学部校舎面積17,500m²のうち10%強にあたる約2,000m²をコモンラボ、アライアンスラボスペース（共有スペース）としましたが、この共有スペースへの大型機器の新規購入および集約化、教育研究分野間の壁を越えたプロジェクト基盤型研究の実施、スペースの管理を主な業務としています。また本年度（平成28年度）からは大学機能強化分として「若手研究者が集うレジリエンスな口腔保健教育研究拠点の形成ーネットワーク型教員組織の構築と実質化による総合的な機能強化ー」に採択されています。

専任教員として、教授（学系高度化ポスト）1名、助教3名が所属し、さらに特任准教授1名、特任助教2名の計7名が配置されています。助教3名（前川知樹、川崎勝盛、加藤寛子）は平成26年度国立大学強化推進補助金【特定支援型】の支援により、特任教員3名の配分を受け、平成27年4月1日付で承継教員に切り替え、年俸制助教として採用された若手教員です。この3名の助教はいずれも2年以上在外研究経験を有する教員です。その後、平成27年6月1日にセンター長として前田健康教授が就任し、また特任准教授（井上佳世子）、特任助教1名（原田史子）をセンター教員に配置換えしました。さらに平成28年4月1日付で新たに特任助教1名を採用し、平成28年7月1日現在のセンター所属教員は以下の通りとなっています。またプロジェクト研究を実施する口腔生命科学系列の教員がセンターの併任教員となっています。

<センター教員名簿>

		教授	准教授	講師	助教				
専任	高度口腔機能教育研究センター	前田 健康	井上佳世子*		川崎 勝盛	加藤 寛子	前川 知樹	原田 史子*	高橋 直紀*
兼任	微生物感染症学	寺尾 豊	小田 真隆		土門 久哲				
	生体組織再生工学	泉 健次							
	う蝕学		竹中 彰治		大墨 竜也				
	小児歯科学	早崎 治明	齊藤 一誠						
	生体歯科補綴学		加来 賢		秋葉 陽介				
	口腔解剖学	大峽 淳			川崎真依子				
	口腔生理学	山村 健介	岡本圭一郎		黒瀬 雅之				
	歯周診断・再建学				多部田康一				
	硬組織形態学		依田 浩子						
	歯科薬理学	佐伯万騎男			柿原 嘉人				
	摂食嚥下リハビリテーション学	井上 誠	辻村 恭憲	真柄 仁					
	包括歯科補綴学	小野 高裕	堀 一浩		藤原 茂弘				
	歯科麻酔学	瀬尾 憲司							
口腔生命福祉学		米澤 大輔							

*特任教員

高度口腔機能教育研究センターの短期的な使命として、教員組織活性化のため、研究ユニットリーダーに教授のみならず、准教授以下の教員、学内外の教員を登用し、学際的な研究ユニットを組織することがあります。研究ユニットの立ち上げに際しては、分野融合的な展開を想定したオープンラボの基盤整備を行い、歯学系が進めている4つの大きな研究カテゴリーを縦横に組合せ、以下のような研究テーマへ展開することとしています。

- ・ 口腔環境研究：誤嚥性肺炎制御、全身疾患と口腔疾患の関わり の 解明
- ・ 摂食嚥下研究：口腔リハビリテーション、介護食・食支援器具開発・応用
- ・ 再生工学研究：口腔発生機構及び再生工学、口腔システム機能の再構築、神経傷害性疼痛制御
- ・ 口腔保健福祉研究：口腔保健プロモーション、地域包括ケア研究

また、① ラボユニットを活用したQOL向上を目指す歯学研究の高度化、② 国内外ネットワークを活用した新潟大学歯学部グローバルプレゼンス事業を推進することとしています。

①のラボユニットを活用したQOL向上を目指す歯学研究の高度化では、

- (a) 超高齢社会への貢献、口腔からのQOL向上をキーワードに、年俸制教員、若手特任教員、プロモーション教員を配置し、共同研究を進めるとともに、大学院生の教育の場として活

用

- (b) 大型研究費の獲得、科研費採択金額の増加および新潟大学発医療イノベーションの創出
- (c) オープンスペースでの大型機器の共有化を進め、学内外に開放するとともに、地元食品産業等との共同研究の場の設定

②の国内外ネットワークを活用した新潟大学歯学部グローバルプレゼンス事業では、

- (a) WHOを中心とする海外ネットワーク、外国人教員・学内センターとの連携強化
- (b) 学生・若手教員の海外エクスターン、若手外国人研究者の招聘と共同研究による口腔保健の世界スタンダードを発信するリーダーシップの獲得

また、ネットワーク型教員採用に際し、海外で一線研究を推進している若手優秀留学者をPI (Principal Investigator) 待遇とすることで獲得し、帰国前の所属機関との先端共同研究と若手人材の相互交流を図ることとしています。

これらの取組により、大学改革のモデル、歯学研究の高度化、人材供給・情報発信地としてのハブ機能の実質化により、本学歯学部のプレゼンスを高め、優良人材の確保と次なる歯学部の機能強化に努めることとしています。

診療支援部 歯科衛生部門

歯科衛生部門 稲野 紫 巳

こんにちは。診療支援部 歯科衛生部門の稲野 紫巳です。私は口腔生命福祉学科を卒業し、新潟大学医歯学総合病院に入職しました。また、社会人大学院生として医歯学総合研究科 口腔生命福祉学専攻博士前期課程を卒業しました。学生の頃から文章を書くのは苦手で、まさか原稿の依頼がくるとは思ってもみませんでした。歯科衛生部門については、今まで先輩方がすばらしいお話をしているので、私自身の話をしようと思います。興味ないよと言わずに最後までお付き合い頂けたら嬉しいです。

私の学生時代は、あまり目立たないようにしていましたが、やんちゃなところもあり、先生方にはとてもお世話になりました。進路を考え始めた時、テストのための勉強しかしていなかった私は、就職することに不安を感じました。歯科衛生士として自信をもって働いていくためにもっと勉強しなきゃいけないと思いました。もっと早く気づくべきでした。

大学院への進学を決め、病院勤務1年目は4ブロック（小児・矯正歯科）に配属になり、優しく育てて頂きました。2年目には3ブロック（主に顎関節・インプラント）に異動になり、今現在もビシバシ育てて頂いています。私は最年少だったこともあり、先輩方には甘えに甘えてきました。今では勤務4年目で先輩になりました、と言いたところですが、いまだ最年少です。まだまだ先輩方から知識を吸収していこうと思います。

大学院の研究テーマは配属になった顎関節に関する内容に決めました。この選択は私が変わる大きなきっかけになったと思います。顎関節症に関してはなんの知識もなく一からのスタートでしたが、なんとかやり遂げることができました。大学院を卒業した今でも、研究を続け、顎関節治療部の先生方にお世話になっています。

私は、病院に初めて勤務したときに、わからないことがたくさんあることをとても恥ずかしく思っていました。今ではわからないことがあるとワクワクします。研究を通して、新しい知識を得ること、学ぶことがとても楽しいと思えるようになりました。先生方、先輩方のご指導のもと恐るべき成長を遂げています！今後もさらなる進化を遂げるため勉学に励んでいきます。

歯科衛生部門の末っ子、稲野 紫巳を今後ともよろしくをお願いします！



自己紹介

歯科衛生士 本間 しのぶ

歯科衛生士の本間しのぶと申します。

平成24年に入職後、旧外来棟の予防歯科に半年、ブロック4に約1年、その後ブロック3へ配属になり、現在に至ります。

新潟大学歯学部は衛生士学校の学生だった20年前に臨床実習でお世話になりました。当時の実習先だった小児歯科、矯正歯科外来での実習が本当に楽しくて、今でも甘酸っぱい青春の思い出です。黄色い実習着の私たちは先生方に、「ヒヨコちゃん」と呼ばれていました。月日が流れるのは早いもので、世間ではベテランと呼ばれてしまうアラフォーです。本年度は、歯科衛生士室研修系のリーダーなどを任されています。



研修系とは、歯科衛生士の新採用者に新潟大学病院歯科外来で行うメンテナンスの基礎研修、内外講師をお招きしての研修会の企画などを行います。また、歯科衛生士のスキルアップを図る為、外来ブロックごとにテーマを決め研修を行い、得られた成果を年度末の歯科衛生士の連絡会にて報告するブロック研修を行っております。

それまでパソコンなど殆ど触ったこともなく、USBって何?のアナログ人間の私にとって、

メールでのやり取りやパワーポイントを使っのての
スライド作りがどれほど大変なことであつたか…
ご想像がつくと思います。皆様のお力添えがあつた
からこそ、何とか発表までこぎつけることが出来
ました。そんな私も今では立派なアップルユー
ザーです(笑)。

家では10歳と4歳の男の子のママで、2人とも
今は「名探偵コナン」に夢中です。黒の組織との
戦いで寝るまで騒がしいので、我が家のテレビの
音は殆ど聞こえません。(ちなみに赤井さんの
ファン) そんな子供達ですが、私の楽しみの2時
間サスペンスの時間だけは努めて静かな遊びをし
てくれています。しかし、犯人が明かされるドラ
マ最大の見せ場には抗いがたい睡魔に襲われ、犯
人と動機がわからないままでいつも消化不良な思
いをしております。もう1つの息抜きは、同僚の
衛生士さんと大好きなカシスオレンジのグラスを
片手に語り合う事ですが、ピッチの速いお姉様方
にはいつもかないません。

最後になり
ますが、今後
も外来スタッ
フの一員とし
て、患者様と
先生方の気持
ち良い環境作
りに邁進した
いと思いま
す。至らない
ところも多々
あると思いま
すが、どうぞ
宜しくお願い
します!



歯科技工部門より

歯科技工部門 荒井 秀明

はじめまして。診療支援部 歯科技工部門の荒井秀明です。「技工部便り」ということで原稿依頼をいただいたので、中央技工室の紹介をさせていただきます。

まずはじめに少しだけ自己紹介をさせていただきます。出身は群馬県で平成14年に新潟大学歯学部付属歯科技工士学校に入学しました。卒業後は研修生として新潟大学病院の技工室（現歯科技工部門）で1年間勉強させていただき、富山県の歯科医院とラボでの就職を経て、平成21年から当院で勤務し現在に至ります。

では、技工室の紹介をさせていただきます。前回長谷川さんが紹介していた通り、移転後の中央技工室は面積的には小さくなりましたが配置を工夫したり余分なものを断捨離して以前より効率よく作業が行えるようになったのではないかと感じています。ただ部屋の配置上しょうがないところなのですが、中央技工室には窓がついていません。換気がしづらいというもさることながら、自然光が入ってこないというのは個人的にはとても残念なところ です。

設備に関して前回の歯学部ニュースの時から新しく増えた機器を2つ紹介させていただきます。1つめは、歯科技工用高周波鋳造機アルゴンキャスターの導入です。正確に言うと技工室での導入

ではなく義歯診療室からの申請で導入されたものですが、共同で使用する目的で設置されました。設置場所も当初は主に使用する中央技工室に設置予定でしたが、置き場所の確保が難しいこともあり隣の先生方の技工室である共同技工室に設置されました。このアルゴンキャスターの導入によりコバルトクロム合金などを鋳造できるようになり、これまでパーシャルデンチャーのクラスプやバーなどでコバルトクロムの指示があった場合はすべて外注に出していたのですが、技工室でも製作することが可能になりました。

2つめは、ストロマンCARES CS2が導入されました。これによりストロマン社のインプラントでも、前回紹介したジェニオン2同様にレーザーでスキャンしCADソフトでデザインすることが可能になりました。

ここ数年で技工室に新しい機材がたくさん導入されている状況でも分かる通り歯科医療は多様化し新しい技術や材料、機器がどんどんできています。それらに対応できるよう常に知識や技術の向上にはげんでいくことが重要であり、日々勉強し成長し続けられるような技工士でありたいと思います。まだまだ未熟な私ではありますが今後ともよろしくお願いします。



素 顔 拝 見



摂食嚥下
リハビリテーション学分野
特任助教

竹 石 龍 右

2015年4月より摂食嚥下リハビリテーション学分野の特任助教を拝命しました竹石龍右と申します。私は新潟大学病院で生まれ、高校卒業まで新潟市で育ちました。大学進学を機に上京し、10年余り過ごした後、新潟市に戻りました。医療機器メーカーに在職中、井上誠教授から共同研究の依頼を頂いたことがご縁で社会人大学院生となりました。

共同研究の内容はヒトの咽頭に電気刺激を行うことで嚥下を誘発するというものです。実験にはカテーテルの先端に電極を取り付けた専用のプローベを使用するのですが、企業ではその設計に携わっていました。大学院では井上誠教授からご指導を賜り、咽頭電気刺激の長期的な効果を検討しました。

現在は新潟大学、東北大学、広島大学の3大学で連携した教育プログラムの推進に携わっています。多くの先生方のご協力を頂きまして、夏季休業中の学生派遣実習（サマースクール）、春季休業中の3大学合同短期派遣プログラム（スプリングスクール）など、これまでの学部教育には見られなかった取組を実現することができました。

私生活ではおもに旅行を趣味にしており、この場をお借りして紹介させて頂きます。

春は福島県に毎年お花見に行っています。新潟市からは日帰りも可能で1本桜から桜並木まで豊富なうえ、早朝から出発すれば1日で6～7か所を回ることもできます。おすすめは郡山市の紅枝垂れ地蔵桜、上石の不動桜、三春町の滝桜、天神夫婦桜を見た後、高柴デコ屋敷を見学、本宮市の

塩ノ崎の大桜、二本松市の合戦場のしだれ桜を見て回るコースです。いずれも写真映えする見事な1本桜で一度はご覧頂きたいと思います。

夏は関東の花火大会に行くことが多いです。都内から電車で行ける会場では足立の花火大会、神奈川新聞花火大会、市川市民納涼花火大会がお気に入りです。これらの大会は1万3千発以上打ち上げられる大きなものですが、開始時刻直前でも場所の確保が容易なだけでなく、かなり近くから鑑賞・撮影することができます。最寄駅から会場までも徒歩圏内であり、行き帰りの混雑も比較的少ないのがポイントです。

初夏から秋は隣県の百名山を中心に年3～4つの登頂を目標にしています。少し距離はあるものの、長野県は体力にあまり自信がない方でもトレッキングができる名所に恵まれています。1泊2日の旅程では初日に松本市の上高地、2日目は乗鞍岳に登った後、白骨温泉に浸かって帰れます。松本市から少し足を延ばせるようなら美ヶ原高原、霧ヶ峰を回った後、諏訪湖畔の温泉に入ってくることもでき、老若男女問わずおすすめです。

冬はカラオケに行くことが多いです。ただ歌うだけではもったいないので採点機能を利用します。評価項目の種類や配点の割合は機種によって異なりますが、まずは原曲を完全にコピーしましょう。得点を稼ぐというよりもいかにミスをしなかが大切です。しかし、選曲によって難易度が大きく変わるので、得点ランキングを参照することも大切です。また、基本的にアルコールの摂取は厳禁です。紅茶またはウーロン茶の氷なしが良いと思います。

以上、簡単ではありますが、プロフィールから私生活まで紹介させて頂きました。お陰様で公私ともに充実した毎日を送らせて頂いています。井上誠教授をはじめ各分野の先生方におかれましては今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



摂食嚥下
リハビリテーション学分野
助教

白石 成

平成27年6月1日より摂食嚥下リハビリテーション学分野の助教を拝命いたしました、白石成（しらいし なる）と申します。素顔拝見に寄稿させていただくのは初めてですので、ご挨拶を兼ねて簡単に自己紹介させていただきます。

生まれは東京で幼年期を栃木県下都賀郡で過ごし、その後は愛知県豊橋市にて高校卒業までを過ごしました。名産はちくわです。当時、愛知県では名古屋市に次ぐ人口を有していましたが、平成の大合併以降は豊田市、一宮市にその規模を越され現在は第4の都市みたいです。

平成12年に東北大学歯学部に入學し当初バスケットサークルに所属していましたが、右手小指の骨折を機に早々に帰宅部となりバイト生活となってしまいました。サークルは練習後に先輩方と食べに出掛ける夕食（飲み会？）が楽しく、今思い返せば先輩方のエネルギーな活力に感服されています。骨折は第二関節の剥離骨折で、人生初の手術となりました（局麻ですが。。。）。手術後は夏休みに突入したこともありリハビリを怠ったためか、現在でも第一関節が十分に曲がらず右手に力が入り辛いことがあります。リハビリは大事ですね。

その後は親友が主将していたボート部に誘われ、活動を始めました。ボートを通じて知り合えた仲間、諸先輩方は現在も貴重な財産となっています。学部最後のシーズンでは同期で1つのクルーを組むことができ、夜練、艇庫に泊まって朝練、からの授業という素敵なスケジュールで練習することができました。時に衝突しながらも濃密は時間を共有できたことは良い経験と思い出となっています。

平成18年に東北大学大学院歯学研究科口腔システム補綴学分野（佐々木啓一教授）に進学、研究は学生時代からお世話になっていた顎口腔機能創

建学分野（鈴木治教授）にて骨再生材料であるOCP（リン酸オクタカルシウム）を利用したバイオマテリアルの研究に携わりました。その後は、バイオマテリアルの創製やインプラントの表面改質の研究に従事し、臨床では東北大学病院顎口腔再建治療部（小山重人准教授）にて、主に頭頸部腫瘍を有する患者に対して、術後の器質的欠損やそれに付随する機能的障害に対する顎補綴治療や摂食嚥下リハビリテーションに携わりました。具体的には、舌切除後の患者に対し準備期の食塊形成や口腔期の食塊送り込みの改善、発音・構音障害の回復することを目的として、口腔機能訓練や舌接触補助床を製作していました。このような診療背景が機会となり、15年間住んだ仙台を飛び出し、摂食嚥下リハビリテーション学分野に入局するご縁となりました。現在は米国シカゴ大学解剖学教室（Prof. Callum F Ross）に研修する機会をいただき、この素顔拝見が発刊される頃には日本に帰国する予定です。

井上誠教授をはじめとした分野スタッフの方々に感謝すると共に、諸先生方にはお世話になることが少なくないと思いますが、少しでも新潟大学に貢献できるように努力してまいります。今後ともよろしく願いいたします。



包括歯科補綴学分野
助教

藤原 茂 弘

2015年4月1日付で助教を拝命しました包括歯科補綴学分野の藤原茂弘と申します。臨床では有床義歯や頭頸部癌術後などの顎顔面補綴を専門に、研究では嚥下時の舌圧発現様相など嚥下機能の生体計測を主にさせていただいております。このような自己紹介をする機会を与えていただきましたので、少しばかり私の身の上話をさせていただきます。

元々は大阪大学の有床義歯補綴学・高齢者歯科学分野に所属しておりましたが、お世話をしていただいた上司である小野高裕先生が新潟大学の教授となり、その際に光栄にも小野教授よりお声掛

けをいただき、新潟大学に来ることとなりました。

大学時代は苦勞して入った大学だから何か大学じゃないとできないようなクラブに入りたいと思い、スキューバダイビング部に所属していました。高校の卒業旅行で南の島に行き、そこで海の素晴らしさに魅せられていた私は、こんなクラブがあるのかとオリエンテーションで見つけた瞬間にこのクラブにしようと思えました。

ダイビングのライセンスをとり、色々な島や海を巡ってきましたが、ダイビングは最高です。ダイバーにはそれぞれ好みがあり、マンタやサメなど大物が好きな大物派ダイバー、クマノミなど小さい魚が好きな小物派ダイバー、海中の地形が好きな地形派ダイバーなどなどと分けられていますが、私は魚にあまり興味がない地形派ダイバーです。海の世界は非日常で、岩でできたキレイなアーチや海中に一面に続く砂地など文章ではすべてを表現できませんが本当に素晴らしいの一言です。

海だけでなく島巡りも楽しみの1つで、これまで小笠原、慶良間、宮古、石垣、西表、波照間、与那国、大東島、渡名喜と色々な島を行きましたが、島ごとに陸上だけでなく海の中までも雰囲気の違いがあります。巡るごとに新たな発見があっておもしろいものです。

純粋に海が好きという気持ちで入部したこのクラブですが、海が近くにあるわけでもない大阪で、スキューバダイビング部の普段の活動といえば、酒です。「体育会系に所属しているのだから飲み会だけでも体育会系にしよう」というよくわからないことをOBの先輩が考えたらしく、その伝統が今でも受け継がれ、私が所属していた時は大学で1、2を争う飲み会クラブでした。非常に和気あいあいとした飲み会を在学中は楽しんで、その後遺症かはわかりませんが、大阪大学時代の

医局の飲み会でも少々行き過ぎるところもあったようで、それを新潟でやってしまわないように日々精進しているところです。

スキューバダイビング部という得体の知れないクラブでしたが、海も酒も大好きになり、将来は海の近くに住みたいと漠然と考えておりました。が、新潟に住むとは考えてもいませんでした。沖縄の青い海とオリオンビールを想像していたのですが、荒れ狂う日本海とおいしくて飲み過ぎ注意な殺傷能力の高い日本酒に囲まれた新潟に住むとは全くもって考えておりませんでした。

新潟で右も左もわからなかった私も1年が経ち、新発田も「しばた」と読めるようになり、胎内という地名にもドキッとしなくなり、医療人育成センターにも迷子にならずたどり着けるようになり、私も新潟に少しは慣れてきたのかなと実感しております。新潟の人はみんな優しく、慣れない私に色々親切にしてくださいました。

ようやく環境にも慣れてきたところで、新潟大学のために、また声を掛けていただいた小野先生と包括歯科補綴学教室のために、日々頑張ってお仕事に努めてまいりたいと思います。

関西弁が耳障りかもしれませんが、これからもみまさまどうぞよろしくお願いいたします。最後までお読みいただきありがとうございました。



FD委員会活動報告

新潟大学歯学部FD委員会 委員長
秋葉陽介



・ご挨拶

平成27年度より新潟大学歯学部FD委員会委員長を拝命しております、生体歯科補綴学分野の秋葉陽介と申します。歯学部ニュースをお読みになっている先生方には、平素、FDの開催、運営にご協力いただきありがとうございます。FDに参加頂いている先生方の中には「とにかく出席しなければいけない」「夕方の忙しい時に1時間程時間を取られる」「何か色々なテーマで講演している」「アンケートが面倒」、こんなイメージを持たれている先生方もいらっしゃるかもしれません。折角先生方の貴重な時間をいただき、参加いただいておりますので、今回の活動報告を読んで、もう少しFDについて知っていただき、FDへの参加時間を有意義な時間にしていただければ、と考えております。もちろん、FD委員会の活動やFDについて知っていただくには、検索サイトに「新潟大学歯学部」「FD委員会」と入力いただき「新潟大学歯学部FD委員会HP」(<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/FD/index.html>)を見ていただくのが最もわかりやすいと思います。

・新潟大学歯学部の“FD”とは

FDはFaculty development (ファカルティ・ディベロプメント) の略であり、Facultyは大学の全教職員を、Developmentは能力開発を意味しており、日本語では一般的に「大学教員の教育能力を高めるための実践的方法」のことを指すとされています。先ほど紹介した新潟大学歯学部FD委員会のHPではFDの目的を「教員の教育能力を高めるとともに、常に最適な教育環境を実現するために必要な情報を提供することであり、同

時に教員自身の歯科医師、あるいは研究者としての能力を高めること」としております。つまり、新潟大学歯学部におけるFDは学部学生に対する教育にとどまらず、大学院教育や研究活動、歯科臨床教育や臨床能力の向上など、歯学部在籍する先生方の活動すべてに対し、その能力を高める事を目的として開催されているということです。また、FDの対象も教員にとどまらず、将来的な教員候補として、また研究能力向上を目指して、大学院生の先生にも参加をお願いしております。企画内容によっては診療スタッフも対象とする場合があります。Staff Development (SD)、Academic Development (AD) と考えていただいても良いかと思えます。時折、教員以外の先生にFDへの参加をお願いしているのは、こんな理由からなのです。

・FD委員会の活動

FD委員の活動として、最も皆さんの目に付きやすいのはFD講演会の運営に関わるアナウンス、出欠確認、アンケート、写真撮影などかと思えます。しかし、FD委員会の最も重要な仕事は、その前段階、FDの承認もしくは企画立案です。FDの承認に関して、一度、FD委員会で承認され、FDとして開催されることになった企画には、対象となる歯学部教職員全員の出席が求められます。そのため、FD委員会は申請された企画に対し、その企画が基本的に歯学部の全教職員を対象とした企画であるか、全職員の教育、研究活動においてその能力向上に対して有意義であるか、FDとして開催する必要はあるか、といったことについて議論し、FD開催の是非を決定します。

FDの企画立案に関しては、大学や教育、またそれを取り巻く環境の中で、教職員がどのようなことを知っておくべきなのか、何が必要なのかを議論し、新企画立案を行っています。FD委員会によって承認された企画は通常の特別講義、説明会を超えて、教職員及び大学院生の日々の活動に資する必須の情報や知識、技術の提供の場でありたいと考えております。TBLなど新しい教育方略の紹介、PROG TESTやACCEPT projectなど学部学生教育に導入されるシステムの紹介や体験、特色ある学部学生への教育内容の紹介、科研申請のための注意点解説、大学改革や歯学教育の現状の紹介など、一見脈絡なく、色々な講義やワークショップを行っているように思われるかもしれませんが、いずれの企画においても、教職員に必須の情報を含んでいるようにしております。FDの質の担保も重要なFD委員会の活動です。参加いただいている先生方にそれが伝わるようなFDを開催できているか、それをうまく参加者に伝えられているか、というのは重要な問題でありFD委員会の課題であると考えております。

・新潟大学歯学部FD委員会沿革

新潟大学歯学部FD委員会は魚島勝美教授を初代委員長として、平成14年度に設立されました。当時の委員の先生方は自らワークショップに参加し、FDを学び、その後タスクフォースとなって歯学部の全教員に対して1年がかりでカリキュラムプランニングに関するワークショップを行いました。現在も数年に一度、新任教員の先生方にお集まりいただき、FD委員会主催のカリキュラムプランニングワークショップを受講いただいております。その他にも多くの企画を運営したFD委員会の活発な活動は、初代委員会から、齊藤功教授、井上誠教授を委員長とするFD委員会へと受け継がれていきました。年に6～8回の講演会、もしくはワークショップを企画運営し、歯学部の教職員、大学院生に有益な情報を発信し続けました。現体制の新潟大学FD委員会は平成27年度より前田健康歯学部長を顧問に、オブザーバーとして井上誠先生、小野和宏先生をお迎えし、FD委員として寺尾豊先生、佐伯万騎男先生、多部田康

一先生、吉羽永子先生、新美奏恵先生、伊藤晴江先生、池真樹子先生、諏訪間加奈先生、真柄仁先生、藤原茂弘先生にお勤めいただいております。FD委員会は委員長の招請に同意していただいた有志で構成されており、オブザーバー、委員の先生方は通常業務に加えてFD委員として歯学部教員の資質向上のための力を尽くしていただいております。

自分は委員長を拝命しておりますが、多くの先生方よりご指導ご鞭撻を受けFDについて、教育について勉強中の身でもあります。多くの先生方がそうであるように、「歯科医師」になるべく教育を受けてきた自分たちは「教育」に関わる教育を受けておらず、そのために、自分の受けた方法で、必要の中で学び、実践してきた方法を用いて、自分自身の姿を見せてといったやり方で、学部学生、大学院生等、後進の指導を行っていかなければいけません。しかし、歯科や新潟大学歯学部を取り巻く環境は変化し、社会から歯科医師が、また本学卒業生が求められるものも変化しております。それに伴い教職員が求められる知識や技術も増え、多様化しております。日々の業務の中でこれら全ての情報に触れ、収集し、身に付けていく事は簡単ではありません。FD委員会はそんな先生方への情報提供、技術提供を目指して活動しております。

・最後に

ここまでお読みいただきFDやFD委員会に関してご理解いただけたでしょうか？これからも色々なFD企画が準備してあります。参加いただく先生方にお願ひがあります。毎回FDの後に先生方にお願ひしているアンケートには忌憚ない意見を記載いただき、可能であれば一言でも構いませんので自由記載欄にご意見をいただきたいのです。アンケートに記載されたご意見を基に委員会で企画を推敲することで、今まで以上に教職員のニーズに合致し、無駄が無く、有益な企画の開催が可能になるかと考えております。先生方には今後ともFDの開催、運営にご協力の程よろしくお願ひし、活動報告とさせていただきます。

研究室体験

歯学科5年生

微生物感染症学分野 磯野俊仁

<はじめに>

微生物感染症学分野（学生の間では“微生物”）にて実験をさせていただいている磯野俊仁と申します。本格的に教室に通いはじめてもうすぐ2年が経とうとしています。周囲からは再試の常連（過去）で実験をアホみたいにやっていて、ドルオタといった評を得ている感じでしょうか？そんな人間が送ってきた研究室生活を振り返ってこうと思います。

<実験との出会い>

私が始めて微生物教室に来たのは2年生の基礎科学演習です。はっきり言って先生方にかかりっきりになっての実験でした。しかし「意外と実験が楽しいことに気づきました。そしてもっと実験がしたいということで授業が一段落した3年生の夏休み開始と同時に実験をさせて欲しい旨をお願いに伺い、了承していただきました。

<やってきた実験>

この2年間、A群レンサ球菌、ミュータンス菌、ジンジバリス菌を用いた実験を行ってきました。現在は、「A群レンサ球菌が産生する毒素の役割」に関する研究を行っています。主に小田先生の実験のお手伝いをしながら、リアルタイムPCR、ウエスタンブロッティング、大腸菌を用いた遺伝子組換えタンパク質精製など様々な実験を行い、その手技、原理などを理解していきました。（元来ドンくさくて、要領の悪い私ですから、非常に

臭い歯周病菌をクリーンベンチにこぼし、研究室全体を悪臭まみれにするなど、失敗をして先生にはたくさん迷惑をおかけしました。すみません）1ヶ月以上同じ遺伝子のクローニングに費やしたこともありましたが、先生とディスカッションしながら問題を解決することの楽しさを覚えました。実験の仮説立案から結果の考察まで一連して行うことで物事を論理的に考える習慣ができたように思います。

<まとめ>

大学生活と実験を両立することは大変でしたが、実験をしていい結果が出た時の快感が何とも言えず続けてきました。そんな快感を味わいたい方は興味のある研究室へ行ってみるのはどうでしょうか？ハマるかもしれませんよ。

最後となってしまいましたが、はっきり言って落ちこぼれの私でも研究室へ受け入れてくださった寺尾先生をはじめとする先生方、そしてここまで根気強く指導してくださった小田先生にこの場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございました。



歯学科5年生

歯科薬理学分野 清川 裕貴

初めに。実際に実験してみるからこそがおもしろいので、この雑記を読むよりはピペットでも弄っている方がよっぽど有意義と思う。

私がこの研究という世界につま先を入れてしまったのは、3年ほど前の実習であっただろうか。微生物教室にて友人と共に教えを乞い、唾液からの細菌培養やら口腔細菌に対するタバコの影響やら様々に習わせていただいた。この時の先生方の博識・明朗さはいまも頭に残り、大学における実験に格好よさを覚えた。

次の年、ふとしたことから私は薬理教室にて実験をさせてもらえることになった。なぜ薬理に転身したかということ、私の興味の移ろいからである。細胞のその形態、その機能、その生き様、などに美しさを覚えたのであった。観察していると、神は細部に宿るならぬ細胞に宿る、という洒落が浮かんだものだ。さておき、おもしろさがあるかどうかに行動原理を置いていたからこそ細胞を扱える薬理へと移らせていただいた。それが成功しているかどうかはわからないが、少なくとも満足はできている。自分の興味を継続できることはなんと幸せであろうか。不純な動機であるとか、血税を無駄にするな、とかいう糾弾はここでは許していただきたい。

薬理教室では、主に破骨細胞を扱わせてもらっている。柿原先生の前、様々な条件での培養、スクリーニングなどをしてきた。現在では、様々な食品の成分が破骨細胞へどのように影響するか試している。いまだにスクリーニングを重ねる現状

ではあるが、暗中の効果を求めてさまようのは苦痛とおもしろさが同居している。もう少し理論的な深みを求めていきたいが、破骨細胞の基礎を固めるためには必要なことだと割り切りたい。単純な実験であっても、その結果は考える種になるのだから。ともかく、わからないことを考えていく、またわかっていることでも考え直すという点に実験のおもしろさがあるのだと思う。まだまだ未知の領域が多い破骨細胞はうってつけであり、現在楽しみを噛みしめている。

さて書きたいことは山ほどあるが、下手なことを書いて多方面からの目玉を食らいたくないのだから。何事も中庸に、という生き方の私では過激なことを書けずにいてまことに申し訳ない限りである。

学生の皆さんで、もしも実験に興味がある方がいればぜひとも各教室の扉を叩いてもらいたい。一部の教室では学部生の実験教育に力を入れたいというところもあるらしい。とりあえず実験を体感してみるの面白いかもしれないので、どうぞ。教室を訪ねるのに気兼ねしそうな方々は相談していただきたい。私などは役に立たないだろうが、顔の広い5年山本君や4年武田君らは良い道筋となることだろう。

最後に。初めた時から今に続くまで、私を指導してくださっている柿原先生には感謝してもしきれない。つまらない質問やくだらない発想にたいしても真摯に対応していただき、そしてどんどん実験をさせていただいた。柿原先生の教えだったからこそ実験を楽しくできました。この場を持って感謝の意を表させてもらいたい。ありがとうございました。



同窓会だより

同窓会長新任挨拶

会長 有松 美紀子



私は、有松 美紀子と申します。6代目の初の女性会長として就任致しました。女性としての感性だけでなく、家庭と仕事との両立、出産、育児、介護や様々な役員経験から得られ

ました知識や情報と連携力を用いて会務を執行して参りたいと思います。

現在、歯学科と口腔生命福祉学科を合わせたの同窓会員数は2,600名を超え、全国のみならず海外でも活躍しています。

特筆すべきことの第1は、女性会員の増加（毎年卒業生の3分の2は女性）です。

第2は、会員の活躍の場が、従来のように歯科医療関係のみならず、行政、福祉、マスコミ、美容等多職種に及んでいるということです。

第3は、会員の高齢化と大学や同窓会への帰属意識の薄れによる同窓会離れの問題があります。

これらを受けまして同窓会のサービスを今まで以上に会員一人一人が納得して頂けるように工夫し、サービスの原資となる会費納入をお願いして参りたいと思います。準会員である学生さん、研修歯科医師、同窓会員のみならずご家族の方々にも親しみをもって頂ける組織作りと運営が目標です。

また、会員一人一人が自分が少しでも役に立てる立場になったならば他の方の笑顔のためにできることを進んで行って頂ける風潮になるように自ら率先して参りたいと思います。

今後も紙面をお借りし同窓会のサービス事業を

お伝えして参りますので、ご意見ご感想などをお寄せください。どうぞ、宜しくお願い致します。

同窓会における慶事

副会長 野内 昭宏

同窓会では慶事があった場合の内規を決めており、それに基づいて表彰等を行っております。昨年度から今年度初めにかけて、非常に多くの慶事がありましたので、ご報告します。

長年にわたり学生の教育に携われてきて、平成28年3月末日をもってめでたく定年退職を迎えられた 朔 敬教授（口腔病理学）、織田公光教授（口腔生化学）、新垣 晋准教授（組織再建口腔外科学）の3人の先生方に、同窓会からお祝いの金一封を差し上げました。

また、学長や教授に就任された下記の先生方にはお祝いの金一封を、また、デンタルや学業で優秀な成績を取めた学生4名に対して、表彰状と副賞を差し上げました。

- ・山村 千絵 先生（歯学科15期）
新潟リハビリテーション大学学長就任
- ・山川 智子 先生（歯学科25期）
長岡大学教授就任
- ・本間 志保 先生（歯学科26期）
梅花女子大学教授就任
- ・北川 純一 先生（歯学科28期）
松本歯科大学教授就任
- ・佐藤 拓一 先生（歯学科19期）
新潟大学医学部保健学科教授就任
- ・芳澤 享子 先生（歯学科20期）
松本歯科大学教授就任



- ・竹澤 みなみ さん（現歯学科6年生）
「第47回日本歯科学学生総合体育大会ゴルフ部門
女子個人優勝（5連覇中）」
- ・真喜志 佐奈子 さん（歯学科46期）
「新潟大学学生表彰（IADR Hatton Awards
日本代表2015年度最終候補者）」
- ・赤塚 眞奈 さん（口腔生命福祉学科8期）
「新潟大学学業成績優秀者奨学金授与」
- ・浅利 早紀 さん（口腔生命福祉学科9期）
「新潟大学学業成績優秀者奨学金授与」



同窓会からのお祝いを受け取られる芳澤教授



定年退職のお祝いを受け取られる朔教授



表彰を受けた真喜志さん



表彰を受けた浅利さん

「歯科における医療安全管理対策 –事例から学ぶ医療事故の対応–」を聴講して

歯学科33期生 石井 賢 紀

私は卒業して13年病院の一般歯科に勤務しています。今まで抜歯後出血や抜歯後感染などの偶発症は経験しましたが、幸い訴訟に発展するような事故は起こさずに来ました。何かあってもすぐ内科で診てもらえるという気持ちで診療していました。しかし、今回のセミナーを聴講して、たまたま運が良かっただけで、医療訴訟とは常に隣り合わせではないかという気がして怖くなりました。

判決で患者側が勝つ確率は約22.6%とのこと。結局、説明不足、患者さんの理解不足が医療訴訟に発展するとつくづく思いました。私自身しっか





プレートを新たに加え、歯学科1期生～46期生、口腔生命福祉学科1期生～9期生のネームプレートを掲示してもらいました。

このネームプレートが、卒業生の皆さんには母校で学んだ証しに、在校生の皆さんには卒業への士気の向上になれば幸いです。歯学部にお立ち寄りの際は是非、歯学部4階渡り廊下のネームプレートへ足をお運びください。



第7回研修歯科医支援塾開催

同窓会 準会員・研修歯科医支援部

平成28年5月26日(木)17時30分から18時30分まで、大学病院のアメニティーモール内のセミナー室にて「第7回研修歯科医支援塾」を開催致しました。この支援塾は、「研修歯科医の進路決定やワークライフバランスの参考に資する」ことを目的としてスタートしたもので、演者は大学院進学者や大学病院勤務医、一般診療所勤務医、開業医等と様々です。同窓会の事業として開催していますが、本学卒業でない(同窓でない)他大学卒業の研修歯科医にも、平等に門戸が開かれています。

今回は、大学院に進学し留学経験もある江口香里先生(歯学科41期生、生体歯科補綴学分野)と、一般診療所勤務後に開業された小熊崇泰先生(同38期生)のお二人に講演して頂きました。

進路決定の時期、情報、理由や現在の仕事と生活の様子、将来の展望等の他、江口先生からは留学の楽しさ、有意義さを、小熊先生からは開業時の大変さとトラブル、そして、その解決法等もお話して頂きました。

出席した研修歯科医さんたちは大変熱心に聞かれ、質疑応答も活発に行われました。閉会した後も演者お二人のご厚意により、遅い時間まで相談会が行われていました。

研修歯科医は、大学卒業、国試合格後、慌ただしく研修に入り、毎日の仕事をこなすことで精一杯です。研修修了後の進路決定をするための時間や情報が乏しいのが実情のようなので、毎回行う開催後のアンケート結果では、ほとんどの方が満足だったと答えてくれています。

今後は、時間的に余裕のある学生のうちに聞いて頂いたり、また、保護者の方にも出席して頂けるように検討してまいりたいと思います。

ご意見、ご希望等がありましたら同窓会事務局までお寄せください。





総合診療部を経験して

歯科総合診療部を経験して

う蝕学分野 大学院1年 鈴木 裕 希

初めまして、う蝕学分野大学院1年の鈴木裕希です。私は2015年3月に本学を卒業後、1年間総合診療部にて研修をさせていただきました。ここでは、私がこの1年間を通して経験し学んだことをお伝えしたいと思います。

なぜ本学総合診療部を研修先として選択したかということ、自分が担当医として一口腔単位で治療計画を考え、診療したいと思ったことが一番の理由でした。まずこの卒後1年間は専門分野に特化することなく、一般歯科治療の土台となる基礎の部分じっくり学びたいと考えていました。

しかし卒後研修が始まる前は、総合診療部での研修は学生の臨床実習の延長になってしまうのではないかという不安も正直ありました。でも、いざ診療が始まるとそのような不安はなくなりました。歯科医師免許を取得した以上、担当医として責任感をもって治療しなければならないという自覚が芽生え、患者さんのためによりよい医療を提供していきたいと強く思うようになりました。

私個人の感想として総合診療部の研修で良かった点について紹介したいと思います。

まず1つ目として、ポートフォリオの存在です。自分の診療を振り返り、それに対して指導医の先生方が客観的にフィードバックをして下さることで、自分の至らない点や次の診療の課題を見つけることができました。同じ治療に対しても先生方によって視点が異なり、様々な観点からアドバイスを頂けたことはとても貴重な経験だったと思っています。また診療中に思った少しの疑問に対しても、外来ではもちろんのこと、ポートフォリオを通して先生方は親切に丁寧に教えてください、非常に勉強になりました。

また、2つ目としては研修歯科医の同期がたく

さんいたことです。自分が日々の診療や技工などで悩むことは周りも同じようなことでつまずいていることが多いので、お互いに相談し教え合うことができました。今後の職場において、これほど同期の多い環境は滅多にないと思うので互いに切磋琢磨しながら、研修させて頂いたことは非常に良い経験となりました。研修で出会った同期の先生方とは今後お互いに助け合って歯科医師人生を歩んでいくことと思います。

思い返すとこの1年間は本当にあっという間でしたが、それは日々充実していた証拠だと感じております。この1年間の臨床研修で得られた大きな経験をベースにして、いつまでもここで感じた「初心」を忘れずに精進して参りたいと思います。



歯科総合診療部を経験して

歯科矯正学分野 大学院1年 深 町 直 哉

初めまして。歯科矯正学分野大学院1年目の深町直哉です。私は大阪大学を卒業し、新潟大学歯科総合診療部Aコースにて1年間研修をさせていただきました。

この度は歯科総合診療部での経験について述べる機会を与えてくださりありがとうございます。他大学出身である私から見た新潟大学や新潟大学

を選択した理由や実際に1年間経験させていただいたことについて述べさせていただきます。

まず初めに私が新潟大学歯科総合診療部を選択した理由についてです。私は新潟出身であるため新潟大学がどのような環境で診療しているのかが興味があり、6年生の時に見学会に参加させていただきました。その際に、とてもきれいで設備も充実しており、非常に環境が整備されている施設だと思いました。また、説明会では「診療参加・実践型」というキーワードにとても魅力を感じ、新潟大学歯科総合診療部を研修先として選択させていただきました。

実際に研修が始まると他大学出身である私は、カルテの使い方や器具の場所など診療とは関係のない部分でわからないことが多く非常に戸惑いました。しかし、新潟大学出身である同期や先生方や衛生士さんなどみなさんとても親切であったため、4月末の自身での診療開始のころには馴染むことができました。

「診療参加・実践型」というキーワードの通り、診療では自分自身が担当医となって診療を進めていくため責任感を強く持って取り組むことができました。学生のころに自身で治療を経験する機会が少なかったため、最初の診療ではものすごく緊張しました。しかし、指導医の先生との事前ディスカッションや診療途中での確認など常に指導して下さる先生方がそばにいてくださったので自信を持って診療を行うことができました。また、それだけではなく診療後にポートフォリオを記入し、先生に確認していただくことで自分の診療をすぐに振り返り、的確なアドバイスをいただくことで毎診療ごとに確実にステップアップすることができました。患者さんを担当されているため、一口腔単位について診断から始まり治療計画を立案し、実際に治療を行い、メンテナンスに移行するという一連の流れを経験することができたことはとても勉強になりました。

新潟大学出身である方々はこの環境が当たり前

だと感じるかもしれませんが、他大学出身である私からすればこんなに環境の整っている施設は他にないと思います。まず、学生の中から患者さんが担当され一口腔単位で担当医として診療に携われることが驚きでした。また、自身のスキルアップのための模型実習やいつでもバックアップして下さる心強い各専門分野の先生方の存在など研修において確実にスキルアップできる環境が用意されていると感じました。

最後となりましたが、私は新潟大学歯科総合診療部で研修することができ本当に良かったと思います。診療での技術の向上だけでなく、患者さん1人1人としっかり向き合い話を聞き、信頼関係を築くことなど大切なことを学ぶことができ、かけがえのない経験となりました。歯科医師のスタートである研修医は今後の歯科医師の基盤となっていきます。その基盤をこのような素晴らしい施設で築くことができたことに感謝し、また今後歯科医師として初心を忘れることなく、日々精進していきたいと思っています。



歯学部運動会を終えて

歯学部運動会実行委員長 歯学科5年 山本 悠

運動会はいかがだったでしょうか。

こんにちは。歯学科5年山本です。今年度の歯学部運動会実行委員長を務めさせていただきました。

今年はリレー、15人16脚を紅白戦にして学年の垣根を越え、玉入れは女同士の熾烈な戦いに、綱引きは男、いや「漢」の真剣勝負に。DJ・MCは‘やすしやすしのやすし’が担当（特別企画）

～紅白対抗リレーでの一幕～

MCやすし：

「これより紅白対抗リレーを、、、中略、、、ここでお知らせです！紅白戦の前にエキシビジョンマッチを行います！出場者募集します！！」

どよめく会場：

「お————！！俺出ます！！私はでないかな～お前でろよ」

そんなこんなで、出場する青先生、多数の学生がスタートラインに着く。

MCやすし：

「ルールは簡単。青先生を追い抜いた学生は、、、留○です！！」

「なお、エントリー済の出場者は棄権できませんので、ご了承ください。」

このような感じで、大盛り上がりでのエキシビジョンマッチは行われ、我々は‘大人の世界’を学びました。それは

「上手に負ける。」

ということ。

もちろん、この‘接待リレー’はジョークですので留○は冗談でしたが、学生誰一人として、青先生を追い抜くことはありませんでした。

大人の世界を学び、学年の垣根を超え、そして、学年の絆をふかめられた運動会を行うにあたりまして、先生方、学務係の方、参加して頂いた歯学

部生、そして運営を共に行った同級生に感謝いたします。



顔面小麦粉まみれの筆者



平成28年度歯学部内委員会

2016/4/1

委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
—	前田健康	系列長		任期28.4.1～31.3.31
総務委員会	前田健康	歯学部長		総括
	小林正治	副病院長		歯科担当
	小野和宏	副学部長・学務委員会委員長		学務
	宮崎秀夫	副学部長・歯学科長		渉外・建物
	魚島勝美	副学部長		広報・国際
	寺尾豊	副学部長		研究
	葭原明弘	口腔生命福祉学科学科長		
	大内章嗣	学部長補佐		
学務委員会	小野和宏	学務委員会委員長	全学教育委員会	総括
	齋藤功	教務委員長		教務
	泉健次	入試委員会委員長	入試実施委	入試
	山村健介	学生支援委員会委員長		学生支援
	藤井規孝	臨床実習委員会委員長		臨床実習
	葭原明弘	口腔生命福祉学科学科長		口腔生命福祉学科
	齋藤功	教務委員会委員長		総括
教務委員会	堀一浩			
	大内章嗣			教育課程(口腔生命福祉学科系)
	ステガコ・ロクサーナ			教育課程(口腔生命福祉学科系)
	井上誠			◎共用試験(CBT)
	中島貴子			◎共用試験(OSCE)
	小野和宏	オブザーバー		
	齋藤功			
教育課程委員会	小野和宏			
	井上誠			
	藤井規孝	委員長		
臨床実習実施委員会	山賀孝之	47期ヘッドインストラクター		
	竹中彰治	歯の診療科		
	多部田康一	歯周病科		
	五十嵐直子	義歯診療科		
	秋葉奈美	冠・ブリッジ診療科		
	小田陽平	口腔再建外科		
	勝見祐二	顎顔面口腔外科		
	丸山智	口腔病理検査室		
	池真樹子	歯科放射線科		
	中島貴子	歯科総合診療部		
	遠藤千佳	看護部門		
	高野綾子	歯科衛生部門		
	照光真	歯科麻酔科		
	金子昇	予防歯科		
	辻村恭憲	口腔リハビリテーション科		
	大島邦子	小児・障がい者歯科		
	越知佳奈子	矯正歯科		
	福島正義	口腔生命福祉学科		
	児玉臨麟	歯の診療科		
	両角俊哉	歯周病科		
	小山貴寛	顎顔面口腔外科		
	富井優子	看護部門		
	櫻井直樹	義歯診療科		
	丹原惇	矯正歯科		
	竹山雅規	矯正歯科		
	大湊麗	言語治療室		
	岩瀬陽子	小児・障がい者歯科		
	井浦敏彦	歯科撮影室		
	倉田行伸	歯科麻酔科		
	荒井良明	顎関節治療部		
	星名秀行	インプラント治療部		
	勝良剛詞	歯科放射線科		
	伊藤加代子	口腔リハビリテーション科		

委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
	真柄 仁	摂食嚥下機能回復部		
	八木 稔	お口の健康室		
	田代 美佐子	看護部門		
	白川 道子	歯科外来手術室		
	後藤 早苗	歯科衛生部門		
	柴田 佐都子	口腔生命福祉学科		
	諏訪間 加奈	口腔生命福祉学科		
	本間 和代	明倫短期大学		
共用試験委員会 (CBT)	計 良 倫 子	明倫短期大学		
	小野 真奈美	明倫短期大学		
共用試験委員会 (OSCE)	井上 誠			必要な都度委員を指名
学生支援委員会	中島 貴子			必要な都度委員を指名
	山村 健介	学生支援委員会委員長	学生相談室相談員・学生相談連絡会議	総括
	依田 浩子			歯学科
	小松 康高			歯学科
	秋葉 奈美			歯学科
	諏訪間 加奈			口腔生命福祉学科
学生相談員	佐伯 万騎男		学生相談室相談員・学生相談連絡会議	歯学部
	伊藤 晴江			研究科
入試実施委員会	山村 健介			全学の学生相談室相談員・学生相談連絡会議は、井上教授、程桂教授
	依田 浩子			
	泉 健次	入試委員会委員長	入試委・入試実施委	総括
研究科学務委員会	寺尾 豊	前入試委員会委員長		補佐
	瀬尾 憲司			
	高橋 英樹	オブザーバー		
施設環境整備委員会	齋藤 功			総括
	葭原 明弘			教務
	井上 誠			学生支援
	宮崎 秀夫	副学部長		総括
	堀 一浩		施設整備専門委	
共通施設専門委員会	吉江 弘正		総合博物館検討専門委	
	大峽 淳		動物実験倫理委員会	
	寺尾 豊		遺伝子組換え実験安全委	
	福島 正義		口腔生命福祉学科 (施設担当)	
	宮崎 秀夫	副学部長		
情報セキュリティ管理専門委員会	西山 秀昌		情報基盤センター運営委	総括
	鈴木 一郎			IT一般
	中島 俊一			
	小田 陽平			
図書館委員会	魚島 勝美	副学部長		
	吉江 弘正		附属図書館委員会	
	八木 稔		附属図書館委員会	
国際交流委員会	魚島 勝美	副学部長		
	泉 健次			
	齋藤 功			
	依田 浩子			
	大峽 淳			
	長澤 麻沙子			
	柿原 嘉人			
広報委員会	石田 陽子	オブザーバー		
	魚島 勝美	副学部長	歯学部ニュース専門委	総括
	大島 勇人		研究科広報委web担当	◎
	小田 陽平		学部広報web専門委	◎
	ステガロク・ロクサーナ		広報委員会 (学部)	◎
	吉羽 邦彦		広報委員会 (研究科)	◎
	黒川 孝一		口腔生命福祉学科	◎
研究科広報委員会 (Web担当)	辻村 恭憲		公開講座実施委員会	◎
	大島 勇人			◎
歯学部広報委員会 Web専門委員会	鈴木 一郎			◎
	黒川 孝一			◎
	小田 陽平			
	照光 真			

委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
歯学部ニューズ専門委員会	魚島勝美			他の委員は准講層、助教層からローテーションで選出
広報専門委員会	スガロク・ロクサーナ		学部	
	吉羽邦彦		研究科	
歯学部公開講座委員会	辻村恭憲		公開講座実施委員会	
プロジェクト研究委員会	寺尾豊	副学部長		
	小野高裕			
	大峡淳			
	泉健次			
	加来賢			
	前川知樹			
倫理委員会	宮崎秀夫	委員長		
	前田健康	学部長		
	高木律男	副病院長		
	佐伯万騎男			
	葭原明弘			
	小野高裕			
臨床系実習室管理委員会	渡邊修	学識経験者 法学部より		任期 27.4.1~29.3.31
	小野高裕	共同技工室、実習準備室		
	吉羽永子	臨床基礎実習室、臨床技能評価室、臨床示説室		
	小林哲夫	臨床基礎実習室		
	魚島勝美	臨床基礎技能実習室		
	加来賢	臨床技能自習室		
	藤井規孝	臨床実習技工室		
	黒川孝一	歯科行動科学相互実習室		
人事評価委員会	前田健康	系列長		
	山村健介	任期制教員で基礎系の教授		
	林孝文	任期制教員で臨床系の教授		
	小田陽平	任期制教員である准教授、講師及び助教のうちから2人		
	土門久哲			
FD委員会	秋葉陽介	委員長		
	佐伯万騎男			
	寺尾豊			
	多部田康一			
	池真樹子			
	諏訪間加奈			
	真柄仁			
	伊藤晴江			
	吉羽永子			
	新美奏恵			
	藤原茂弘			
	前田健康	顧問		
	小野和宏	オブザーバー		
井上誠	オブザーバー			

臨床実習実施委員会以外で任期の記載のない委員会委員の任期は、平成28年4月1日から平成30年3月31日まで

◎は下部組織を立ち上げる必要のある委員

教 職 員 異 動

学 部

【教員等】

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
昇任	28. 4. 1	柴 田 佐都子	口腔生命福祉学専攻准教授	口腔生命福祉学専攻助教
配置換	28. 4. 1	川 崎 真依子	口腔解剖学分野助教	医歯学総合病院冠・ブリッジ診療科助教
採用	28. 4. 1	野 杵 由一郎	う蝕学分野教授	
採用	28. 4. 1	大 墨 竜 也	う蝕学分野助教	医歯学総合病院医員
採用	28. 4. 1	多 田 紗弥夏	予防歯科学分野助教	
採用	28. 4. 1	高 橋 直 紀	高度口腔機能教育研究センター特任助教	
採用	28. 4. 1	黒 澤 美 絵	小児歯科学分野教務補佐員	
採用	28. 4. 1	佐 藤 知弥子	歯科矯正学分野教務補佐員	
採用	28. 6. 1	井野瀬 三良子	組織再建口腔外科学分野事務補佐員	
採用	28. 6. 8	大 口 繭 美	摂食嚥下リハビリテーション学分野産学官連携技術者	
採用	28. 6. 8	佐 藤 茜	摂食嚥下リハビリテーション学分野産学官連携技術者	
採用	28. 6. 8	保 田 麻 里	摂食嚥下リハビリテーション学分野産学官連携技術者	
退職	28. 6. 30	児 玉 臨 麟		う蝕学分野助教
退職	28. 6. 30	岩 瀬 陽 子	医歯学総合病院小児歯科・障がい者歯科助教	小児歯科学分野特任助教
昇任	28. 7. 1	小 島 拓	医歯学総合病院口腔再建外科講師	組織再建口腔外科学分野助教
採用	28. 7. 1	片 桐 涉	組織再建口腔外科学分野准教授	
採用	28. 7. 1	澤 味 規	小児歯科学分野特任助教	医歯学総合病院医員
採用	28. 7. 1	笠 原 由 佳	生体歯科補綴学分野事務補佐員	
採用	28. 8. 1	照 沼 美 穂	口腔生化学分野教授	
採用	28. 8. 1	小田島 あゆ子	口腔生命福祉学専攻助教	
採用	28. 8. 1	古 志 奈緒美	摂食嚥下リハビリテーション学分野特任助手	

【事務等】

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
配置換	28. 4. 1	小林 江 里	歯学部事務室総務係長	自然科学系自然科学研究科総務係長
配置換	28. 4. 1	白 田 隆 太	総務部人事課職員係長	歯学部事務室総務係長
配置換	28. 4. 1	野 口 寿 子	人文社会・教育科学系総務課長岡附属学校係主任	歯学部事務室学務係主任
退職	28. 6. 30	渡 辺 温 子		歯学部事務室総務係事務補佐員
配置換	28. 7. 1	玉 木 友 子	総務部人事課	歯学部事務室総務係
採用	28. 7. 1	市 橋 恵美子	歯学部事務室学務係事務補佐員	
採用	28. 8. 1	渡 邊 美 奈	歯学部事務室学務係事務補佐員	



病院

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	28. 4. 1	高橋 功次郎	矯正歯科助教	矯正歯科医員
配置換	28. 4. 1	川崎 真依子	(28. 4. 1 医歯学系助教)	冠・ブリッジ診療科助教
採用	28. 4. 1	金丸 祥平	口腔再建外科医員	継続
採用	28. 4. 1	高辻 紘之	口腔再建外科医員	新規
採用	28. 4. 1	浅井 佑介	口腔再建外科医員	新規
採用	28. 4. 1	高田 寛子	口腔再建外科レジデント	新規
採用	28. 4. 1	内川 恵里	口腔再建外科レジデント	新規
採用	28. 4. 1	須田 大亮	口腔再建外科医員 (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	竹内 涼子	口腔再建外科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	荻野 奈保子	口腔再建外科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	原 太一	口腔再建外科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	齋藤 太郎	顎顔面口腔外科医員	新規
採用	28. 4. 1	結城 龍太郎	顎顔面口腔外科レジデント	新規
採用	28. 4. 1	深井 真澄	顎顔面口腔外科医員 (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	渡部 桃子	顎顔面口腔外科医員 (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	中谷 暢佑	顎顔面口腔外科医員 (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	原 夕子	顎顔面口腔外科医員 (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	永井 孝宏	顎顔面口腔外科医員 (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	木口 哲郎	顎顔面口腔外科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	隅田 賢正	顎顔面口腔外科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	北村 厚	顎顔面口腔外科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	清水 志保	顎顔面口腔外科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	曾我 麻里恵	歯科放射線科医員	継続
採用	28. 4. 1	小林 太一	歯科放射線科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	吉川 博之	歯科麻酔科医員	継続
採用	28. 4. 1	金丸 博子	歯科麻酔科医員	継続
採用	28. 4. 1	山崎 麻衣子	歯科麻酔科医員	継続 (育児休業中)
採用	28. 4. 1	佐藤 由美子	歯科麻酔科医員	継続
採用	28. 4. 1	小玉 由記	歯科麻酔科医員	継続 (育児休業中)
採用	28. 4. 1	平原 三貴子	歯科麻酔科医員 (パートタイム)	継続

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	28. 4. 1	山 田 友里恵	歯科麻酔科医員（パートタイム）	継続
採用	28. 4. 1	須 田 有紀子	歯科麻酔科医員（パートタイム）	継続
採用	28. 4. 1	澤 味 規	小児歯科・障がい者歯科医員	新規
採用	28. 4. 1	鹿児島 暁 子	小児歯科・障がい者歯科医員	継続
採用	28. 4. 1	松 枝 一 成	小児歯科・障がい者歯科レジデント	新規
採用	28. 4. 1	花 崎 美 華	小児歯科・障がい者歯科医員（パートタイム）	継続
採用	28. 4. 1	中 島 努	小児歯科・障がい者歯科医員（パートタイム）	継続
採用	28. 4. 1	村 上 望	小児歯科・障がい者歯科医員（パートタイム）	継続
採用	28. 4. 1	左右田 美 樹	小児歯科・障がい者歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	28. 4. 1	鈴 木 絢 子	小児歯科・障がい者歯科レジデント（パートタイム）	新規
採用	28. 4. 1	大 竹 正 紀	矯正歯科医員	継続
採用	28. 4. 1	坂 上 馨	矯正歯科医員	継続
採用	28. 4. 1	西 野 和 臣	矯正歯科医員	継続
採用	28. 4. 1	井 表 千 馨	矯正歯科医員	新規
採用	28. 4. 1	眞 舘 幸 平	矯正歯科医員	新規
採用	28. 4. 1	大 倉 麻里子	矯正歯科医員	新規
採用	28. 4. 1	上 村 藍太郎	矯正歯科医員（パートタイム）	継続
採用	28. 4. 1	大 森 裕 子	矯正歯科医員（パートタイム）	継続
採用	28. 4. 1	網 谷 季莉子	矯正歯科レジデント（パートタイム）	新規
採用	28. 4. 1	市 川 佳 弥	矯正歯科レジデント（パートタイム）	新規
採用	28. 4. 1	藤 田 瑛	矯正歯科レジデント（パートタイム）	新規
採用	28. 4. 1	阿 部 遼	矯正歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	28. 4. 1	新 島 綾 子	矯正歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	28. 4. 1	村 上 智 子	矯正歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	28. 4. 1	中 田 樹 里	矯正歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	28. 4. 1	栗 原 加奈子	矯正歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	28. 4. 1	大 澤 知 朗	矯正歯科レジデント（パートタイム）	新規
採用	28. 4. 1	深 町 直 哉	矯正歯科レジデント（パートタイム）	新規
採用	28. 4. 1	水 越 優	矯正歯科レジデント（パートタイム）	新規
採用	28. 4. 1	皆 川 久美子	予防歯科医員	継続（育児休業中）
採用	28. 4. 1	宮 本 茜	予防歯科医員	新規

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	28. 4. 1	瀧 口 知 彌	予防歯科医員	新規
採用	28. 4. 1	笹 嶋 真 嵩	予防歯科医員 (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	野々村 絢 子	予防歯科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	野 中 由香莉	歯周病科医員	継続
採用	28. 4. 1	堀 水 慎	歯周病科医員	継続
採用	28. 4. 1	宮 澤 春 菜	歯周病科医員	継続
採用	28. 4. 1	松 田 由 実	歯周病科医員 (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	島 田 惇 史	歯周病科医員 (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	佐 藤 圭 祐	歯周病科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	根 津 新	歯周病科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	保 苅 崇 大	歯周病科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	黒 木 歩	歯周病科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	山 田 実 生	歯周病科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	横 地 麻 衣	歯周病科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	大 倉 直 人	歯の診療科医員	継続
採用	28. 4. 1	長谷川 泰 輔	歯の診療科医員	新規
採用	28. 4. 1	坂 上 雄 樹	歯の診療科医員 (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	遠 間 愛 子	歯の診療科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	末 山 有希子	歯の診療科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	枝 並 直 樹	歯の診療科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	竹 内 亮 祐	歯の診療科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	鈴 木 裕 希	歯の診療科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	江 口 香 里	冠・ブリッジ診療科医員	新規
採用	28. 4. 1	宮 福 子	冠・ブリッジ診療科レジデント	新規
採用	28. 4. 1	高 昇 将	冠・ブリッジ診療科レジデント	新規
採用	28. 4. 1	水 鳶 一 尊	冠・ブリッジ診療科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	高 岡 由梨那	冠・ブリッジ診療科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	三 上 絵 美	義歯診療科医員	継続
採用	28. 4. 1	山 鹿 義 郎	義歯診療科医員	継続
採用	28. 4. 1	小飯塚 仁 美	義歯診療科医員	新規
採用	28. 4. 1	大 川 純 平	義歯診療科レジデント (パートタイム)	継続

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	28. 4. 1	菊 地 さつき	義歯診療科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	設 楽 仁 子	義歯診療科レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	上 原 文 子	義歯診療科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	兒 玉 匠 平	義歯診療科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	酒 井 翔 悟	口腔リハビリテーション科医員	新規
採用	28. 4. 1	砂 田 悠香子	口腔リハビリテーション科レジデント	新規
採用	28. 4. 1	船 山 さおり	口腔リハビリテーション科医員	継続
採用	28. 4. 1	鈴 木 拓	口腔リハビリテーション科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	吉 原 翠	口腔リハビリテーション科レジデント (パートタイム)	新規
採用	28. 4. 1	長谷川 真 奈	歯科総合診療部医員	継続
採用	28. 4. 1	三 上 あずさ	歯科総合診療部医員	継続
採用	28. 4. 1	永 井 裕 子	歯科総合診療部レジデント	継続
採用	28. 4. 1	渡 邊 大 祐	歯科総合診療部レジデント	継続
採用	28. 4. 1	関 根 彩央里	歯科総合診療部レジデント	新規
採用	28. 4. 1	服 部 陽 一	歯科総合診療部レジデント	新規
採用	28. 4. 1	佐 藤 拓 実	歯科総合診療部医員 (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	中 村 太	歯科総合診療部レジデント (パートタイム)	継続
採用	28. 4. 1	高 嶋 真樹子	顎関節治療部医員	継続
採用	28. 4. 1	河 村 篤 志	顎関節治療部医員	継続
採用	28. 4. 1	永 井 康 介	顎関節治療部レジデント	継続
採用	28. 4. 1	山 崎 裕 太	顎関節治療部レジデント	継続
採用	28. 4. 1	山 田 一 穂	インプラント治療部医員	継続
採用	28. 4. 1	小 川 信	インプラント治療部医員	継続
採用	28. 4. 1	清 水 太 郎	インプラント治療部医員	継続
採用	28. 4. 1	上 松 晃 也	インプラント治療部医員	継続
採用	28. 4. 1	阿 部 達 也	病理検査室医員	継続
育児休業	28. 4. 13	佐 藤 美寿々		予防歯科助教
採用	28. 5. 1	竹 内 玄太郎	魚沼地域医療教育センター (歯科口腔外科) 特任講師	新規
採用	28. 5. 1	砂 田 悠香子	口腔リハビリテーション科レジデント (パートタイム)	口腔リハビリテーション科レジデント
退職	28. 5. 31	金 子 友 厚		歯の診療科助教
採用	28. 6. 1	渡 邊 賢 礼	口腔リハビリテーション科医員	医歯学総合研究科研究員

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
退職	28. 6. 13	河野 承子		小児歯科・障がい者歯科助教
任期満了	28. 6. 30	澤 味 規	(28. 7. 1 学系特任助教)	小児歯科・障がい者歯科医員
退職	28. 6. 30	佐野 富子		小児歯科・障がい者歯科助教

【看護・診療支援部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	28. 4. 1	遠藤 可奈子	看・東3階病棟看護師	新規
採用	28. 4. 1	高橋 彩	看・東3階病棟看護師	新規
採用	28. 4. 1	中野 佑香	看・東3階病棟看護師	新規
育児休業復帰	28. 4. 1	吉田 加織		看・外来4・5階看護師
育児休業復帰	28. 4. 1	村上 絵理香		看・東3階病棟看護師
所属換	28. 4. 1	田代 美佐子	看・外来4・5階看護師長	看・東4階病棟看護師長
所属換	28. 4. 1	渡邊 悦子	看・東3階病棟副看護師長	看・東10階病棟副看護師長
所属換	28. 4. 1	吉田 加織	看・放射線部看護師	看・外来4・5階看護師
所属換	28. 4. 1	村上 絵理香	看・血液浄化療法部看護師	看・東3階病棟看護師
育児休業復帰	28. 5. 17	大貫 倫子		看・東3階病棟看護師
採用	28. 6. 1	小林 さやか	歯科衛生部門歯科衛生士	新規
所属換	28. 6. 1	齋藤 みゆき	看・集中治療部看護師	看・東3階病棟看護師

【事務部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
昇任	28. 4. 1	井関 慶喜	管理運営課臨床研究支援係長	管理運営課主任
昇任	28. 4. 1	横山 康之介	管理運営課専門職員	総務課主任
昇任	28. 4. 1	伊藤 圭子	医事課病歴管理係長	医事課主任
昇任	28. 4. 1	田澤 由紀子	医事課専門職員	医事課主任
配置換	28. 4. 1	渡辺 春美	総務部人事課専門職員(給与企画担当)	総務課人事労務係長
配置換	28. 4. 1	石川 和彦	学務部学生支援課保健管理係長	医事課救急医療係長
配置換	28. 4. 1	吉田 誠司	人文社会・教育科学系学務課法学部学務係長	医事課診療請求係長
配置換	28. 4. 1	鈴木 忍	人文社会・教育科学系学務課経済学部学務係長	管理運営課医療材料係長

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
配置換	28. 4. 1	佐藤 泉穂	医歯学系保健学科事務室総務係長	管理運営課臨床研究支援係長
配置換	28. 4. 1	矢野 健	総務課人事労務係長	人事課非常勤人事係長
配置換	28. 4. 1	星野 智裕	管理運営課薬品材料係長	管理運営課医薬品係長



みかけは…

歯学部事務室長 吉田 恵太郎

歯学部事務室に事務室長として配属されてから早6年近くになりました。

昇任人事として初めて事務室長になったのですが、それまでの仕事は会計の執行を主に担当していたので、学務系の仕事や人事系の仕事については全然わかりませんでした。

あまりにも基本的なことがわからなかったので、前田学部長から単位の数え方のスライドをいただいたくらいで…

そんな状態でも歯学部で揉まれているうちに、いっぴしの事務室長らしくなってきたのではないかと思います。みかけは。

みなさん、歯学部事務室に入ると、たぶん真っ先に私の顔が見えるのではないかと思います。(それは決して顔が大きいせいではないかと思いたいのですが…)

そしてきっと、えらい怖そうなおっさんがいるなぁ〜と、学生諸君や若い先生方は思っていますよね。

いや、決してそんなことはなく、見かけよりも小心者なのです。ガラスのハートの持ち主なのです。

全然怖くなんかありませんので、なにかありましたらご相談していただいても大丈夫です。

歯学部事務室では先生方や学生の皆さんに、よりよいサポートができるようがんばっています。

もしかしたら、相談事によっては心を鬼にしてお断りすることもあるでしょう。でも、それは先生方や学生の皆さんをリスクから守る必要があるからです。

不安なこと、わからないことがありましたら、まずはお気軽にご相談ください。

そしてこの機会にひとつはっきりとさせておきたいことがあります。

実は私…、前田学部長よりもかなり年下なのです。ええ、それはもう結構年下なのです。一緒に飲み屋さんに行けば、最初に料理が運ばれてきたり、上座に通されたり、海外では学部長を差し置いてシャチョーサンと言われたりしますが、みかけどおり年下です！

…

みかけよりは意外と若くて、意外とやさしい？事務室長がいる歯学部事務室にぜひお気軽にお越し下さい。



ミャンマーにて、前田学部長と宮崎副学部長と一緒に

歯学部学務係下っ端の今

事務室学務係 櫻井 拓 仁

事務室学務係の櫻井と申します。昨年4月より新採用で歯学部に配属され、1年以上が過ぎました。毎日優しい優しい学務係長（けっして言わされてはいません…。）にご指導いただき、さらには心も体も大きな事務室長に支えていただきながら、精進しています。

さて、私は学務係ということで、学生の皆さんと話をする機会も多く、歯科医師・歯科衛生士・社会福祉士を目指して勉学に励む皆さんに、毎日刺激を受けて過ごしています。学生の皆さんの中

には、学務係に対して「対応が悪いなあ」、「面倒なことをさせるなあ」などなど、色々と思っている人がいると思います。（私も学生のころはそう思っ…。）そのような人が少しでも減っていくよう、学務係として改善できることは改善し、また皆さんの要望で応えられるものには応えていけるようになりたいと考えています。

まだ皆さんと年齢も近い（と自分では思っている）ので、何か困ったことがありましたら、学務係の窓口で気軽に声をかけてください。



出張先の徳島で新潟大学歯学部入試チームと徳島大学入試チームと一緒に

編集後記

今回初めて歯学部ニュースの編集委員を担当させていただきました。普段は読者側である歯学部ニュースがどのように作られていくのかを垣間見ることができ、とても新鮮でした。ご寄稿下さった先生方には、原稿執筆をご快諾いただき、そして締め切り守っていただきまして、大変助かりました。また、小田編集委員長の素晴らしいリーダーシップにも助けられ、スムーズに編集作業を進めることもできました。執筆をお引き受けいただきました先生方、関係者の皆様はこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

高度口腔機能教育研究センター 高橋 直紀

「歯学部学生の今」、「入学者のことば」、「素顔拝見」を担当いたしました。歯学部ニュース編集委員の腕の見せ所は「原稿を依頼する人選」だと考えています。「歯学部学生の今」、「入学者のことば」においては、各学年で特に将来有望な学生さんに原稿を依頼し、皆さん非常に文章表現が豊かで、学生さんのリアルな日常をお届けできたかと思えます。「素顔拝見」では本学出身でない先生方をお願いいたしまして、その人となりか少しでも伝わり、今後の交流の更なる発展につながれば幸いです。原稿を執筆して下さった学生の皆さん、先生方、お忙しいところご協力くださり誠にありがとうございました。

硬組織形態学分野 齋藤 浩太郎

まず、お忙しいところ原稿執筆いただいた皆様と、お世話になった編集委員の先生方に感謝申し上げます。歯学部ニュースはwebでも公開されているため、私も同じような経験がありますが、検索中に思いがけず記事に行き当たって、有益な情報を得た方もいらっしゃるかと思います。このような経験から編集委員として情報発信の一端を担うことがちょっとした人助けにつながっているかもしれないという思いがあり、それがこの仕事をやり抜く原動力となっていたように思います。愛読して下さっている関係者の方々はもちろんですが、ネットサーフィン中偶然に発見して下さった方にも新潟大学歯学部から発信される情報が少しでもお役に立ち、楽しんで読んでいただけるものとなることを願っております。

高度口腔機能教育研究センター 加藤 寛子

この度、歯学部ニュース編集委員を初めて担当させて頂きました。歯学部ニュースは、学生の頃より手元に届く度に楽しく拝見しておりましたが、それぞれの一冊には多くの方のお力が込められていることを実感致しました。ご多用の中、原稿依頼を快く引き受けて頂いた皆様、編集委員長をはじめ編集委員の先生方、本当にありがとうございました。

口腔保健学分野 諏訪間 加奈

この度、歯学部ニュースの編集委員長を務めさせていただきました。本号では、これまでの内容に加えて、教育や研究の改善を目指して取り組んでいるファカルティ・ディベロップメント (FD) 委員会の活動、および学部学生の研究活動に関する記事を掲載しております。読者の皆様と「新潟大学歯学部の今」を共有できれば幸いに存じます。最後になりましたが、ご多忙中にも関わらず原稿執筆や写真提供を快諾していただいた皆様、4名の編集委員の先生方、ウィザップ本間様に感謝申し上げます。

微生物感染症学分野 小田 真隆

歯学部ニュース

平成28年度第1号（通算129号）

発行日 平成28年9月28日
発行者 新潟大学歯学部広報委員会
編集責任者 小田 真隆、魚島 勝美
編集委員 高橋 直紀、斎藤浩太郎
加藤 寛子、諏訪間加奈
印刷所 (株)ウィザップ

表紙・裏表紙写真の説明

表紙の撮影データ

撮 影 地：佐渡市（尖閣湾）

撮 影 日：2016年5月

使用機材：OLYMPUS E-M5 Mark II/M.ZUIKO DIGITAL ED 12-40mm F2.8 PRO
／絞り：F5.6・シャッター速度：400分の1秒

裏表紙の撮影データ：

撮 影 地：佐渡市（北沢浮遊選鉱場跡）

撮 影 日：2016年5月

使用機材：OLYMPUS E-M5 Mark II/M.ZUIKO DIGITAL ED 12-40mm F2.8 PRO
／絞り：F7.1・シャッター速度：640分の1秒

コメント：今回は、再び地元・新潟県内に眼を向けてみました。表紙は尖閣湾、裏表紙は北沢浮遊選鉱場跡で、いずれも佐渡市の景勝地・史跡です。新潟県と佐渡市が世界遺産登録をめざす「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」は、残念ながら2016年度は見送られましたが、今後も継続して推薦を受けるための活動がなされていくことと思います。撮影日はメイストームで、直前まで雨がちだった空が晴れ上がってはいましたが、日本海は真冬と肩を並べるほどの大荒れでした。そのお陰で、明るく眩しい空と海、激しい波が岸壁を打ちつけるというコントラスト、地元の方でも出会う機会が少ない絶景を尖閣湾で見ることができました。

本誌中の写真の使用機材

ボ デ ィ：OLYMPUS E-M5 Mark II, E-M10, E-P2, STYLUS 1s

レ ン ズ：M.ZUIKO DIGITAL ED 12-40mm F2.8 PRO, M.ZUIKO DIGITAL 25mm F1.8, M.ZUIKO DIGITAL ED 60mm F2.8 Macro, M.ZUIKO DIGITAL ED 14-150mm F4.0-5.6

撮 影 者：林 孝文

